

中・四国アメリカ研究

第10号

2021年

目 次

論 文

- タバコ業界と全米医師会の関係史
—依存から対立へ— 岡 本 勝 (1)
- ポピュリズム時代のアメリカ史研究
—課題と展望— 中 野 博 文 (29)
- 亡霊的な表象体
—『若草物語』とごっこ遊び 本 岡 亜沙子 (49)
- 文明化された異教国
—福音派の日本人観とハワイ併合との関係 山 本 貴 裕 (65)
- 可傷的で攪乱的
—ニーナ・ルヴォワルの『ウイングシューターズ』
にみる「粹組み」批判 渡 邊 真理香 (95)
- 投稿規定 (111)
- 編集後記 (112)
- 歴代会長 (113)

中・四国アメリカ学会

タバコ業界と全米医師会の関係史

—— 依存から対立へ ——

岡 本 勝

はじめに

アメリカ合衆国（以下、アメリカ）において、南北戦争期に市場へ出まわりはじめた紙巻きタバコの消費は、20世紀の初頭まで伸びなかった。例えば1880年に加工された全葉タバコのうち噛みタバコへは58%、葉巻とパイプ用へは19%ずつ、そして嗅ぎタバコへは3%がそれぞれ使用されたものの紙巻きタバコへは1%程度で、世紀転換直後までこの割合に大きな変化はなかった。¹ 最も流行していた噛みタバコは無煙であったため、口腔に作用することはあっても肺へは届かなかったし、葉巻やパイプタバコの煙は味が濃く喉や鼻への刺激が強かったので、多くの使用者はそれを肺まで吸いこまず、口のなかでふかすだけという嗜みかたをした。そのため、これらのタバコは喉頭ガンや舌ガンを引きおこす刺激になるかも知れないと疑われたのである。

しかし、第一次世界大戦および戦後の経済発展期を通して、紙巻きタバコはその使いやすさや口当たりの「軽さ」^{マイルドネス}などから急速に需要を伸ばし、1920年代の中頃までには最も消費される形態になっていた。ところが、その後時間の経過とともに肺ガン発症の事例が目立ちはじめたため、紙巻きタバコ喫煙との因果関係を疑う研究が専門家たちによって行われるようになった。その結果、20世紀の中頃には説得力のある研究結果があいついで発表されたのだが、そのような研究の多くは因果関係を認めるものだったので、喫煙行為に対して警鐘が鳴らされはじめた。

確かに、医師や研究者のなかで喫煙を否定的に眺める者は徐々に増えていったが、彼らの多くが属す組織、とりわけ1847年に創設され、1985年の時点で30万人近くの会員数を誇った「全米医師会」(the American Medical Association 以下、AMA) は、タバコ業界に対して長年融和的な姿勢をとってきた。連邦厚生省公衆衛生局医務長官によって1964年1月に公表された喫煙と肺ガンや肺気腫などとの因果関係を認める報告書に対しても、後述するように、AMAは組織として明確に支持したわけではなく、その後十数年間も曖昧でありつづけた。それどころか、AMAはタバコ業界と相互依存の関係にあって、喫煙を「社会的に容認される行為」にしようとした業界を、ある意味で支えたのである。²

これまで筆者は、アメリカでのタバコに関連したさまざまな問題をテーマにした歴史研究を

してきたが、AMAに焦点をあてたものはなかった。また、これに関する先行研究でも、AMAとタバコ業界の関係に特化して、20世紀初頭から世紀末までの長期間を展望したものは管見のかぎりなかった。そこで本稿では、そのような「隙間」を埋めるべく、両者の関係を主題とした論考を行う。まず、喫煙に警鐘を鳴らす者が医学界には少なからずいたにもかかわらず、組織としてのAMAが一般に考えられていたことと異なり20世紀の終盤までタバコ業界と依存関係にあった点を考察する。そして、AMAは最終的に業界から離反し対立するようになるのだが、なぜそしていつ頃そのように変化したのかについても明らかにしたい。

第一章 タバコ業界と全米医師会の依存関係

当初不人気だった紙巻きタバコが、第一次世界大戦の前夜には広く国民に使用される形態になりはじめたため、例えばそれまでパイプ用の刻みタバコを製造していたRJレイノルズ社はこの形態を主力商品に転換しており、1913年に製造を開始した「キャメル」の成功によって大手の紙巻きタバコ会社へと成長した。1920年代から1950年頃にかけて、キャメルにくわえてアメリカン・タバコ社製の「ラッキーストライク」（以下、LS）とリゲット&マイヤーズ社製の「チェスターフィールド」が^{ビッグ・スリー}三大銘柄を形成し、さらにロリレード社製の「オールドゴールド」やフィリップモリス社製の「フィリップモリス」などの銘柄も市場へ参入したため、お互いがライバルとして広告を使った激しいシェア争いを繰りひろげたのである。

タバコ広告へは映画やラジオによって人気の出た俳優などがまず登場し、憧れのスターがそれぞれの銘柄を薦めるというものが多かった。しかし、人びとのなかには紙巻きタバコの喫煙——その多くが刺激を求めて煙を肺のなかまで吸いこんだ——によって喉の奥に違和感を感じ、それが健康に何らかの悪影響をおよぼすのではないかと危惧する者が少なからずいた。タバコ会社もこの点を見逃しておらず、自社製品が健康被害をもたらすことはないというメッセージを、喫煙者に伝える広告を開始するのだった。

1920年代、そのような広告へ最初に現れたのはアナウンサーや歌手のような声を売り物にする人たちで、彼らは「喫煙によって喉を痛めたことがない」という体験を語った。さらには、見るからに健康そうなメジャーリーグやフットボールのスター選手たちも登場するのだが、最も効果的と思われたのは医師だった。それは、白衣を身にまといときには聴診器を首にかけたり反射板を額に装着する人物がタバコ広告に登場し、それぞれの銘柄に対して「喫煙しても不健康を招くことはない」と請けあうものだったが、彼らは必ずしも本物の医師でなく、役者が演じる場合も少なくなかった。³

当時、紙巻きタバコの使用を否定的に眺める医師もいるにはいたが、彼らは圧倒的に少数派だった。それどころか、多くはそれが健康に悪いという反タバコ派の主張が科学的根拠に乏し

い情緒的なものと考え、その一方でストレスの解消につながると肯定的に捉える傾向にあった。このような考えかたはその後も続き、1948年に発行された『全米医師会誌』（Journal of the American Medical Association 以下、『JAMA』）の論説では、喫煙にストレスを緩和する効果があるというお墨付きまで与えられている。⁴

実際、喫煙と不健康を結びつけた論文が、1940年までに欧米で40編以上発表されたものの、20世紀中頃のアメリカにおける医師の喫煙率は一般国民と同様50%を超えており、彼らは「適量」なら問題ないとしながら喫煙を続けたのである。当時、医師は職業上のストレスを相対的に強く感じると考えられたため、大量喫煙者になる事例が多いと指摘されることもあった。⁵

1920年代末、医師を使ったシリーズものの広告をまず行ったのはアメリカン・タバコ社で、当時LSは販売量で先行するキャメルを猛追していた。1927年に始められた広告において、「11,105人の医師は、ラッキーストライクがほかの銘柄よりも敏感で繊細な〔自らの〕喉に違和感を感じさせないことを認めている」という「アンケート結果」が引用された。また、LSが喉にやさしい理由として、タバコ葉を「こんがり^トと^ス焼く」という製法があげられており、「これによって喉をいがらっぽくさせることはない」という説明に、広告へ登場した白衣の人物がお墨付きを与えている。⁶しかし、そのような乾燥方法——フルー・キュアリング——は、ほかの銘柄でも使われておりLS特有のものでなかったし、刺激を抑制するという主張が科学的に証明されていたわけでもなかった。

フィリップモリス社もまた、1930年代の中頃までに医師の「証言」に言及する広告を打つようになった。社名と同じ銘柄であるフィリップモリスの広告には、「医師グループの報告書によると、〔他社銘柄を吸っていた〕喫煙者がフィリップモリスへ変更したら、すべての事例でいがらっぽさが消え、喉の状態は完璧に改善されたとのことだった」という説明文がつけられたのである。⁷

このとき、その理由としてタバコ葉にジエチレングリコールがくわえられていたことがあげられており、この添加物によって吸湿性が増すため、喉に違和感を感じさせないという医学雑誌にも掲載された研究結果が広告に引用された。ちなみに、それはコロンビア大学の薬学研究者マイケル・ミュリノス（Michael Mulinos）とR. L. オズボーン（R. L. Osborne）によって発表された「吸湿性物質に影響された紙巻きタバコ煙の炎症特質」という論文で、1935年の『ニューヨーク州^{ステート・ジャーナル・オブ・メディスン}医学雑誌』に掲載されていた。⁸

これをうけて、フィリップモリス社は喫煙に関する質問や疑問に回答する旨のメッセージ広告を多くの医学雑誌に掲載し、実際に問い合わせてきた医師へは、回答とともにミュリノスやオズボーンのような業界寄りの研究者による論文の複写と、タバコ数箱が返送された。その後、ミュリノスたちの研究にはフィリップモリス社からの助成金が使われていた事実が明らかに

なったため、それが医学界の一部で物議を醸したこともあった。⁹

医師が登場する数多くのタバコ広告のなかで、最も注目されたのが1946年に始まるキャメルのものであった。およそ6年間続いたこの広告シリーズで使用された有名なコピーは、「より多くの医師はほかのいかなる銘柄よりもキャメルを喫煙している」というものであった。RJレイノルズ社によると、このコピーは契約していた広告代理店「ウィリアム・エステー」によって考案されたもので、この代理店が依頼した「お互いに独立した」大手調査会社3社によって、喫煙する全国の医師約11万3千人に対して行われた聞きとりの結果を根拠にしたものであった。調査員たちは、学会の大会会場、病院、診療所などで、実際に医師に対して好みの銘柄を質問したとしており、回答の礼としてキャメル1カートン（10箱）が手渡されることもあった。¹⁰

キャメルにかぎらずタバコ広告に登場する医師は、真夜中でも往診を断らない献身的な人物で、患者にとって信頼にたる医療の専門家として賞賛されていた。白衣をまとった者が尊敬される立派な人として描かれることに対し、本物の医師のなかには満足する者も少なくなく、彼らは紙巻きタバコやタバコ会社を好意的に眺める傾向にあった。

医師が登場して、「喉や鼻に違和感をいっさい感じさせない」とか、「あなたの喉に本当の爽快感をもたらす」とか、「混みあった車内でも咳一つ出ない」などというコピーを使ったタバコ広告は、一般の雑誌や新聞だけで行われたわけではなかった。¹¹ それは、全国および地方の医師会が発行する専門誌やニューズレターのような印刷物にも掲載された。そもそも『JAMA』は、1928年にそのようなタバコ広告を“^{フーウィ}hoovey”，つまり「ばかげたこと」として批判的な論説を掲載していた。しかし、1933年には方針を転換して広告掲載料を受けとることにし、『ニューヨーク州医学雑誌』や『ニューイングランド^{ジャーナルオブメディシン}医学雑誌』などほかの専門誌もそれに倣った。大恐慌で予算が乏しくなった時代、医学雑誌でのタバコ広告は医師組織を財政的に支えることになったのである。このようなことがきっかけとなり、AMAはその後もタバコ業界との関係を継続していくのだが、それを象徴するものとして、「JAMA」という文字の入った灰皿を作成して会員などに配付している。¹²

このような組織としての取組がある一方で、医師という職業がタバコ会社に利用されることに不快感をおぼえる者もいた。ロイド・ストライカー（Lloyd Stryker）医師もその1人で、彼は先ほど触れた1927年に始まるLSの広告に関して、「医者のお墨付きによって、一般人は〔その内容が〕正確で信頼できる調査結果であると信じこんでしまう」という警告を、『ニューヨーク州医学雑誌』のなかで発している。¹³ 実際、ストライカーのように医学雑誌でのタバコ広告に反対した医師もいたが、彼らは医学界では少数派で、1940年代になっても掲載に抗議する意思を、例えば『JAMA』の編集者へ伝えたのは、年間で「12名を超えることはなかった」。¹⁴

もちろん、医学雑誌におけるタバコ広告も、読者である医師や医学部生などへ特定の銘柄を

購入するよう働きかけた点は否定できない。しかし、それ以上に重要だったのは、健康に不安をいただいた喫煙者がまず相談する相手は多くの場合掛かりつけ医で、彼らの患者に対する影響力の大きさをタバコ会社が見逃していなかったことだ。実際、医学雑誌に掲載されたタバコ広告には、「あなたの患者さんにも、当社の〇〇〇を薦めていただきたい」という主旨の文言が散見された。¹⁵

タバコ会社にとって売りあげを減少させないために重要だったのは、医学界と良好な関係を維持することだった。そのためには、医師をタバコに「依存^{フック}」させるのが効果的な戦略と考えられ、さまざまな働きかけが彼らに対して行われたのである。例えば、タバコ会社は社員を病院や診療所へ赴かせて製品を直接手渡したり、ときには郵送することもあったが、このような医師への「無料配付」は、アメリカン・タバコ社によって1927年頃に開始され、その後他社も追随して広く行われるようになった。¹⁶

医学界との関係を維持するためのタバコ会社による別の働きかけとして、1940年代からAMAや地方の医師会が開催する年次大会へ社員が派遣され、参集してくる医師たちにさまざまな便宜が図られた。特に州レベルの大会では、タバコ会社による資金提供を含むいろいろな後援活動が行われており、それが1960年代まで続けられたところもあった。

AMAの年次大会においても、各タバコ会社はそれぞれの銘柄名を冠した展示コーナーを設けてアピールした。例えば、キャメルのブースでは他社銘柄よりもニコチン含有量が少ないということの宣伝として、いくつかの銘柄の紫煙が体内で吸収される様子を、透明の人体模型を使って比較させる展示を行った。また、マイクロナイト・フィルターを宣伝する「ケント」のブースでは、この銘柄とほかの銘柄から排出される紫煙を、それぞれ別のガラスのなかへ吹き入れたあと白紙上にそれらを逆さまにしておくと、ほかの銘柄の白紙が円状にグレーへと変色する一方で、ケントの白紙は変色しないことが実演された。¹⁷

それ以外にも、タバコ会社のなかには参加者がコーヒーを飲みながら「休息したり、読書したり、喫煙したり、さらにはお喋りをするために」ラウンジを開設するものもあった。それについては、大会前に発行されたニューズレターや医学雑誌のなかに「ドクターズ・ラウンジをあなたのクラブにしてください」という「招待状」が掲載された。さらに、タバコの無料配付は年次大会でも行われ、医師たちは好みの銘柄を受けとるため各ブースに列を作って並んだ。実際、このような配付は、ケンタッキーのような葉タバコ生産州において、1980年代の中頃まで行われたところもあった。¹⁸

第二章 タバコ業界を取りまく環境の変化

前章で述べたように、喫煙と疾病に因果関係があると疑う研究は20世紀の前半に国の内外で

散発的に行われたが、第二次世界大戦終結後その数は増した。それは、臨戦態勢が解除されるなか、第一次世界大戦期に流行しはじめ、その後右肩上がりで消費を伸ばしていった紙巻きタバコの喫煙と、ときをへて目立ちはじめた肺ガン発症の事例を結びつける研究者が増加したからであった。なかでも、『JAMA』の誌上で1950年に発表された、セントルイス・ワシントン大学に關係する医師で病理学者だったアーニスト・ウィンダー (Ernest Wynder) とエヴァーツ・グレイアム (Evarts Graham) による、「肺ガン発症の潜在要因としてのタバコ喫煙」という週及調査研究は、患者のほぼすべてが喫煙者であったことを指摘したため大きな反響を呼び、さまざまところで引用されるようになった。¹⁹

彼らの研究は「キヤンサー・ソサエティアメリカ癌協会」の支援によって実現したもので、肺ガンで入院していた700人に近い患者に対して行われた、喫煙などの生活習慣に関する聞きとり調査の結果を中心にまとめられたものだった。そして、以前は一般の国民がほとんど目にする事のなかった医学専門誌に掲載されていた論文を、今回は『リーダーズ・ダイジェスト』が記事として取りあげたため、とりわけ喫煙者は衝撃を受けたのであった。その記事とは、ジャーナリストのロイ・ノー (Roy Norr) によって1952年に書かれた「キヤンサー・バイ・ザ・カートンタバコによるガン」で、そこではウィンダーとグレイアムによる共同研究の内容が、一般の読者にも分かりやすく説明されていた。²⁰ 当時『リーダーズ・ダイジェスト』は発行部数が国内最大で、例外的にタバコ広告を掲載していなかったため、広告料収入のかなりの部分をタバコ会社に依存していたほかの雑誌とは異なり、喫煙に関する否定的な記事の掲載は容易だった。

喫煙者が受けた衝撃は、それまでに経験したことのない紙巻きタバコ消費量の落ち込みという形で現れ、1953年のそれは前年より120億本も減少したのであった。このような「危機」に直面したタバコ会社は、主に二つの手段でそれに対処しようとした。まず第一に、フィルター付きの製品を増産して安全性を強調すること、そして第二に、それまでライバルとしてときには足を引っ張りあってきた過去を棚上げにして、業界全体の将来のために初めて協力関係を築こうとしたことだった。

そもそもフィルター付きの紙巻きタバコは、1952年以前にはほとんど市場に出まわっていなかった。ブラウン&ウイリアムソン社が、大手として初めてフィルター付きの「ヴァイスロイ」を販売したのは1936年だった。その広告へ最初に登場したのも白衣を着た人物で、彼は「ヴァイスロイにフィルターがあるので、私は患者にこの銘柄へ切りかえるよう助言している」と語っていた。しかし、当初この銘柄に人気はなく、1950年の市場シェアは1%にもたっしていなかった。²¹

ところが、喫煙の危険性が広く報じられて消費が減ると、大手タバコ会社は既存の銘柄をフィルター付きに変更したり、新たにフィルターがついたものを製造するようになった。ロリラー

ド社は1952年にケントを、RJレイノルズ社は1953年に「ウィンストン」を、リゲット社は同じく1953年に三大銘柄では初めてチェスターフィールドを、そしてフィリップモリス社は1954年に「マルポロ」を、それぞれフィルター・タバコとして製造しはじめたのである。

次に、危機に直面したタバコ会社がとったもう一つの手段、すなわち業界内での協力関係構築について考察したい。1953年12月の中旬、リゲット&マイヤーズ社を除く大手タバコ会社の経営者たちは、ニューヨーク市のプラザホテルで秘密裏に会合をもった。これを呼びかけたアメリカン・タバコ社のポール・ハーン (Paul Hahn) 社長は、直前に発表した報道機関むけの声明文のなかで、「肺ガンが紙巻きタバコ喫煙に起因するなどということは、いまだ証明されていない」とまず述べた。しかし、「国民には事実を知る権利があるので、この問題（因果関係）に対して偏見や先入観をいだいていない研究者が、真実を突きとめるために行うさらなる研究は必要で、それに協力するのはわれわれの方針と一致する」とも語った（傍点は引用者）。この「いまだ証明されていない」と「さらなる研究は必要」という言葉は、その後喫煙規制などに反対する場合タバコ業界が繰り返しかえし使用したため、反喫煙組織からは「時間稼ぎのフレーズ」と非難されることがあった。²²

プラザホテルでの会合において二つの決定がなされたのだが、それらは「紙巻きタバコ喫煙者への率直な訴え」という意見広告の掲載と、「タバコ産業調査研究委員会」(Tobacco Industry Research Committee 以下、TIRC) の設立であった。まず前者は、会合から約2週間後の1954年1月4日に、全国258都市で発行されていた448の新聞に、葉タバコ生産者や倉庫業者などの団体を含むタバコ業界によって一斉に掲載されたものだった。その論旨は、喫煙と肺ガン発症の因果関係については、専門家たちによる統一した見解が示せないため、「さらなる研究は必要」というものだった。

そこで設立されたのが後者で、この組織は「タバコ使用と健康についてのさまざまな問題に関する研究活動への助言と資金助成」を、タバコ業界全体で行うために立ちあげられたものと1月4日の意見広告では説明されていた。さらにTIRCの活動は、「疑う余地のない誠実さと国民的信望を有する科学者」に託されるべきで、そのために「医学、科学、教育学などの分野から、タバコ業界に利害をもたない著名な研究者」で構成される「科学諮問委員会」が設置されるとした。そして、若くしてメイン大学やミシガン大学の学長を歴任した遺伝学の権威クラレンス・リトル (Clarence Little) が委員会を率いることになり、10名の委員たちとの協議によって、「多様な研究に対して専門的な助言と十分な資金」の提供が行われるとしたのである。²³

1950年代の中頃、医師や研究者のなかで喫煙に警鐘を鳴らす者は少なくなかったが、全国で多くの医師などが会員になっていたAMAは、組織として必ずしも反喫煙の立場をとらなかった。それどころか、例えば1954年に次期AMA会長の予定者となっていたウォルター・マーティ

ン (Walter Martin) は、「集められたエビデンスだけで、喫煙によって肺ガンが引き起こされるといふ仮説を証明しているとするには説得力に欠ける」と述べて、「いまだ証明されていない」と主張するタバコ業界と類似の立場をとっていた。²⁴

逆風が吹きはじめるなか、TIRCはAMAや自らに好意的な研究者との関係を維持する、もしくは反タバコ派にさせないことが重要と考え、彼らを対象とした啓発活動を行った。TIRCは、プロパガンダ目的で定期・不定期の刊行物を大量に発行したが、それ以外にも例えば公表されていたタバコに関連する研究論文のうち業界寄りのものを30編程度取りあげ、それぞれの要点を18ページの冊子『タバコ論争における科学的視点』（1954年）にまとめ、それを「17万6800人の勤務医、開業医、[医療] 専門家」などへ届けたこともあった。²⁵

このような活動とは比較にならないほど効果的と考えられたのが、「素晴らしき広報」と自ら位置づけた研究助成金の提供だった。TIRCによると、1954年からの4年間で約220万ドルが助成され、5年目にはさらに100万ドル以上が追加された。これらの助成金は、「研究やその成果の公表に関して、受給者には完全な自由が保障されることを前提に付与されており」、決して「紐付きではない」とTIRCは公言していた。ところが、申請された研究テーマは多様だったが、実際に科学諮問委員会によって採択されたのは、例えば喫煙とは直接関係のない遺伝的要因や環境リスクに焦点をあてたガン研究など、多くの喫煙者が求めた「タバコ使用と健康に関する研究」では必ずしもなかった。²⁶

一方、反タバコ派のなかには助成金を受けとる者を批判したり、TIRCからの申し出があっても拒絶する研究者も少なくなかった。例えば、先ほど触れたウィンダーとグレイアムだが、前者は多額の費用を必要とする実験や調査のためにはTIRCからでも助成金を受けとるべきとし、それを提供するのにはタバコ業界としての道義的責任であると語った。これに対して後者は、研究の独立性と客観性を担保すべきとの立場からそのような助成を受けることに反対し、「われわれの研究は、資金支援によって歪められてしまう可能性が多少なりともあるため、タバコ業界とはいかなる利害関係ももつべきではない」という書簡をウィンダーへ送っている。²⁷ いずれにしても、1959年末までに全国61の病院、大学医学部、研究機関に属す90余名の研究者へ助成が行われ、TIRCへの謝辞が述べられたおよそ100編の論文や報告書が、医学や科学の専門誌に掲載されたのである。²⁸

第三章 医務長官諮問委員会報告書と全米医師会

20世紀の中頃以降、紙巻きタバコ喫煙と肺ガンや肺気腫などいくつかの疾病との因果関係をテーマにした統計学や病理学の研究が、タバコ業界と距離をおく専門家たちによってさかんに行われるようになり、その動向は関係を認めるほうへと向かっていった。TIRCによる助成を

受けた研究でさえ、タバコ業界にとって好ましくない結論にいたる事例も目立ちはじめ、減額されたり打ちきられる研究者が現れるようになった。²⁹

1960年頃には、国の内外で増加していた喫煙に警鐘を鳴らす研究結果を検証し、それらを公衆衛生上の政策に反映させるよう求めた世論が、イギリスやアメリカなどで大きくなっていった。アメリカでは、アメリカ癌協会、ハート・アノシエーション「アメリカ心臓協会」、ラング・アノシエーション「アメリカ肺協会」のような患者やその家族、さらには医療従事者などによって組織された反喫煙の立場にたつ任意団体が中心になって、就任後間もないジョン・ケネディ（John Kennedy）大統領へ何らかの対策を講じるよう働きかけが行われた。ちなみに、AMAも喫煙と疾病の因果関係に関する研究論文の精査作業に参加するよう求められたが、この組織は「十分に資格のある医師や科学者がそろわない」ことを理由に、その要請には応じなかった。これは組織の上層部で決められたもので、そこにはタバコ業界への付度があったと考えられる。³⁰

請願を受けたケネディ政権では、厚生省公衆衛生局サー・ジョン・ジョナラ医務長官ルーサー・テリー（Luther Terry）が責任者となって対策に動いた。1962年6月、彼は10名の委員で構成される諮問委員会を立ちあげ、そのなかに委員たちへ協力する150名を超える専門家からなる分科会を複数設置し、国の内外で公表されてきた多数の論文を精査して報告書を作成することになった。諮問委員会は、その後1年以上をかけて議論を重ねて報告書を完成させ、1964年1月11日にテレビカメラが入った記者会見場でそれを公表したのだが、その日は株式市場が休みになる土曜日で、それはタバコ会社の株価に配慮したためとされた。

この「医務長官諮問委員会報告書」（以下、「1964年報告書」）は、喫煙と疾病の因果関係を連邦政府として初めて公式に認めるものとなっており、一時的にはあったが、消費の落ち込みなどタバコ業界に影響をもたらしたのである。³¹ これに対して、各タバコ会社はフィルターの改良を進め、タバコ広告の多くをフィルターつきタバコの安全性を強調するものにあてた。さらに、1960年代の傾向としてニコチンやタールの含有量を抑えた「健康的な」銘柄を各タバコ会社とも製造しはじめ、それらには「ライト」とか「マイルド」という表記が使用されたものが多かった。

また、この時代にはほとんどの医学雑誌や学会誌でのタバコ広告はなくなっており、一般の雑誌でも白衣をまとった人物の姿は消えていた。これは、主としてタバコ会社の自主規制によるものだったが、その背景には喫煙の安全性を医学的に保証するタバコ広告の禁止という、「連邦取引委員会」が1955年に公表したガイドラインがあった。³² それでもタバコ業界は、自らに協力的な医学組織との関係を維持することで、社会に広がった反喫煙の逆風を少しでも和らげたいと考えていた。そのことが最も顕著に表れたのがAMAとの関係で、タバコ業界によるこの組織への助成は大幅に増額されたのである。

1963年末、AMAでは理事会によって一つの研究プロジェクトが立ちあげられ、そこへ50万ドルを拠出することが決められたのだが、これはタバコに含まれる有害物質を取りのぞいて「安全なタバコ」を製造できるようにするため、タバコ業界が研究資金を提供したものであった。³³ さらに、喫煙と疾病の因果関係を認める「1964年報告書」が公表され、連邦取引委員会主導の喫煙に注意を喚起する「警告表示」をパッケージや広告に印刷させようとする動きが始まると、大手タバコ会社6社はただちに5年間で1000万ドルの研究助成を、当時警告表示に反対していたAMAへ行おうと表明し、その後1968年には800万ドルが追加されている。³⁴

タバコ業界からの助成に関しては、AMA内に新設された「教育研究基金」(Education and Research Foundation)が窓口になった。そして、提供された助成金の配分先や金額などは、この基金内に設置された5人の専門家で構成される検討委員会で行われたのだが、そのうちの3人は医務長官諮問委員会のメンバーでもあった。タバコ業界からの助成に対して、教育研究基金の責任者になったレイモンド・マッケオウン (Raymond McKeown) 医師は、その「寛大な申し出を喜んで受ける」と謝意を表明した。³⁵ また、検討委員会長のモリス・シーヴァーズ (Maurice Seevers) 医師も「医療専門家組織とタバコ業界は、たとえ研究促進の目的が異なっていたとしても、両者とも喫煙者によって投げかけられた疑問に対して、明確に回答するうえで最良の方法となる基礎的な科学研究を重視している」と語り、医学界とタバコ業界の関係を評価した。³⁶

タバコ業界によるAMAへの助成拡大の目的には、「1964年報告書」に反駁するための新たなエビデンスを見つけた「検証作業」も含まれていた。しかし、たとえそれが見つからなくても、喫煙と疾病の因果関係についてはいまだ議論の余地が残っており、引きつづき研究は必要であると主張さえできれば、その時点では十分だった。したがって、助成金を提供しつづけて研究が継続されている状況を生み出すことは、タバコ業界にとって戦略上重要だったのである。その結果、業界は結論を先延ばしにして時間を稼ぐことができ、その間に味や香りを損なうことなくタバコに含まれる有害物質を取りのぞいたり、効果的なフィルターを開発するなど技術革新によって、安全なタバコの製造が可能となることに期待を寄せたのだった。³⁷

しかし、タバコ業界からの助成金をのべ844人の研究者へ配分して行われたAMAの検証によっても、状況はタバコ業界にとって必ずしも良い方向へとは向かわなかった。それでも、「[喫煙と疾病の因果関係についての] 結論は出ておらず、さらなる研究は必要である」とタバコ業界は主張しつづけたが、それは徐々に説得力に欠けるものにならざるをえなくなった。そして、「1964年報告書」に対するAMAによる検証は、1978年8月ようやく終了して報告書が作成されたのであった。『タバコと健康』というタイトルで約400ページにまとめられたこの報告書の要旨は、1964年に医務長官諮問委員会がだした結論を、「基本的に変更する必要はない」と

いうものだった。³⁸

ところで、喫煙に警鐘を鳴らす医師や研究者が多くいたにもかかわらず、なぜAMAが「1964年報告書」に対して曖昧な姿勢をとりつづけたのであろうか。次にこの点を考えてみたい。そこには、先ほど触れたタバコ業界からの研究助成金以外にも、ある政治問題が存在していたことをまず指摘したい。その問題とは、最終的にリンドン・ジョンソン（Lyndon Johnson）政権下で成立する65歳以上の国民を対象とした「メディケア」という公的健康保険制度と、「メディケイド」という困窮者や障害者を対象とした医療費扶助制度のことで、当時AMAはそれらを実現させるための法案に反対していた。

長年、アメリカには政府が財政負担をする健康保険制度はなく、それは民間の保険会社に委ねられていた。そのような状況では医療報酬などが高額となる傾向にあったため、これは医療関係者にとって望ましいものと言えた。しかし、提案されていたメディケアやメディケイドが導入されると、公費負担という性質上費用への抑制圧力が強まると予想されたため、AMAは法案が成立しないよう議員たちに働きかけていたのである。

連邦議会において、これらの制度を「医療の社会主義化」として反対の中心にいたのが、葉タバコを大規模に生産したり、大小さまざまなタバコ会社が製造拠点を置くヴァージニアやノースカロライナやテネシーなどの「タバコ州」から選出された保守派の議員たちだった。AMAが、そのような政治家に影響力をもつタバコ業界と良好な関係を維持しようとしたことは、現実的な選択であったと言える。あるタバコ訴訟の過程で1971年に公表されたメモに、AMAは1960年代になってタバコ業界を「足手まとい」と感じはじめていたものの、「[メディケア法案などを成立させないために] タバコ州選出の議員に、自ら（AMA）への不満を生じさせるかも知れない業界に対するいかなる言動も回避しようとした」と書かれていた。³⁹

AMAがタバコ業界との関係を維持しようとした理由は、助成金とメディケアやメディケイド以外にもあった。それは、AMAが会員の退職後に受けとる年金のためにタバコ業界、特にRJレイノルズ社とフィリップモリス社の株式へ運用投資をしており、株価の下落はこの組織の年金制度にとって好ましくなかったという事情だった。当初、株式の保有については執行部の一部役員のみが知る事実であったが、徐々に一般の会員へも「噂として」広がっていき、喫煙を問題視すべきAMAが、タバコ会社の安定的な成長を願うという矛盾を指摘する声が、組織の内外から聞かれはじめるのだった。⁴⁰

一方タバコ業界は、先ほど述べたように「1964年報告書」の公表を機にAMAとの結びつきをより強固にしようとしたが、それと並行して個人の医師や研究者、さらには大学やそのほかの研究機関とも助成金の増額によって関係強化を図ったのである。これに関連して、TIRCは1964年に「タバコ研究協議会」（Council for Tobacco Research 以下、CTR）へと変わったが、

この改称はプロパガンダ機関と批判されることの多かったTIRCのイメージを変え、研究推進に業界がより積極的に取りくもうとする姿勢を示そうとしたものと自ら説明している。

しかし、表向きにはいっさいの制限をくわえない自由で独立した研究を支援するとCTRも公言しながら、実際には提案されたなかからタバコ業界にとって好ましい成果が見こまれるものを中心に選抜されたことには変わりなかった。また、研究結果が学会誌などで発表される前にCTRが査読を求めた場合も多く、思わしくない結果になったものへの助成は、以前と同様に打ちきられることがあった。⁴¹ 元来、TIRCでの審査はリトルが率いた科学諮問委員会に属す医学や病理学を中心とした研究者たちによって一元的に行われていたが、CTRになってからの募集は「研究課題」ごとに分けられ、それらの審査はすべて業界と契約関係にあった弁護士事務所を中心としてなされるようになった。

このような実態を明らかにしたのが、1994年5月7日に始まる『ニューヨーク・タイムズ』の連載記事で、その情報源はブラウン&ウィリアムソン社内で厳重に保管されていた大量の機密文書——それを社内から無断で持ちだして公表した弁護士の名前を冠した通称「メレル・ウィリアムズ文書」^{ドキュメント}——だった。それによると、分類された窓口で募集されたのは「CTR研究課題」、「法律事務所研究課題」、そして「タバコ会社研究課題」で、CTR研究課題が1966年に設置されて以降、ほかの課題も順次くわわって助成の審査が行われるようになった。

まずCTR研究課題であるが、その主な目的は「1964年報告書」の公表を機に件数が増加しはじめた「タバコ訴訟」において、業界を弁護するために役立つと思われた研究を支援したり、またすでに公表されていたさまざまなデータを効率的に収集することだった。そもそも、喫煙によって自らの健康を損ねたとして個人がタバコ会社に損害賠償を求めて起こした製造物責任訴訟^{プロダクト・ライアビリティ}は1954年に始まり、その後およそ40年間に提訴件数は数百にのぼった。しかし、事前審査の段階で証拠が十分にそろっていないことや手続き上の不備を理由に裁判所によって訴えが却下されたり、資金不足などを理由に原告自らが取り下げたため、その多くは事実審理にいたらなかった。たとえ法廷で審理が行われるようになったとしても、資金が豊富で有能な弁護士を数多く抱えることのできたタバコ会社が、敗訴して賠償金を実際に支払った事例は20世紀中に1件たりともなかったのである。⁴²

いずれにしても、法廷闘争を重視したタバコ業界は科学諮問委員会のような研究者グループではなく、法律の専門家たちが中心となってCTR研究課題に応募してくる研究提案の審査を行った。メレル・ウィリアムズ文書によると、1991年までに約1500万ドルがこの研究課題に投入されたが、これは各タバコ会社が市場占有率にしたがって拠出した資金によって賄われた。⁴³ 今も述べたように、長期にわたってタバコ会社に敗訴の判例がなかったことは、ここで収集されたデータなどが少なからず影響したものと考えられる。

次に法律事務所研究課題についてであるが、ここでは連邦議会や「食品医薬品局」のような行政機関が開催する公聴会での対策をたてることが主要な目的になったため、それに資するものが求められた。この研究課題でも、法律の専門家が応募されてきた研究提案を審査したのだが、とりわけ「ジェイコブ & メディンガー」や「シュック、ハーディ & ベーコン」などの法律事務所が中心になってそれは行われた。公聴会対策には、さまざまな事例に関連する情報や知識が必要とされたが、その多くは新たな研究を推進するというよりも、すでに公表されていた研究成果の収集やその分析が主な作業だった。そのため、法律事務所研究課題には同じ期間に250万ドルが配分されただけだった。⁴⁴

最後にタバコ会社研究課題についてであるが、これはタバコ会社が個別に助成する場合と複数の会社が共同で助成する場合があり、どちらも大学などの研究機関を通して行われることが多かった。この課題でも、審査過程で弁護士が大きな影響力をもつことになり、実際に採択された研究のなかにタバコ使用と直接関係のないものが少なくなかったため、共同で資金を提供することになっていたタバコ会社が参加を辞退する事例もあった。

例えば、セントルイス・ワシントン大学へ1971年から1991年までに総額810万ドルが、またカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）へ1974年から1982年までに総額275万ドルがそれぞれ助成されたが、どちらも当初予定されていたいくつかのタバコ会社が参加を取りやめている。⁴⁵ ちなみに、前者では糖尿病に関する研究、そして後者では遺伝標識や免疫反応に関する研究がそれぞれ課題として含まれており、それらが辞退したタバコ会社にとって求める成果を生み出すものとは考えられなかったのである。それでも、多くの大学はタバコ会社研究課題を通して助成を受けており、結果としてタバコ会社もハーバード、ジョンズ・ホプキンズ、イエールのような名門大学への助成によって「^{カシエイ}権威」を獲得し、自己のイメージアップが図れると考えた点は見逃されてはならない。⁴⁶

このような研究機関に対するタバコ業界からの助成は、1970年代末から80年代にかけて減少していったが、研究者個人やグループに対するものはその後も長期にわたって継続された。確かに、喫煙と疾病の因果関係を認める研究結果が増えるなか助成件数は徐々に減少していったが、大気汚染、アスベスト、放射能など喫煙以外の病因を探る研究、喫煙にはストレスを解消させる効果があるとする研究、紫煙に含まれる発ガン性物質の特定とそれらを除去する方法の研究など、タバコ業界にとって好ましいと考えられたものを中心に助成は継続された。⁴⁷

助成を受けた研究者の多くは、当然のことながら親タバコ派と見なされており、実際に彼らは研究を行うこと以外にも公聴会、公開討論会、記者会見、またときには国際会議などへ出席し、喫煙に対して肯定的な証言や意見を陳述することが求められた。そのような研究者の1人にサイモン・フレーザー大学(カナダ)のセオドア・スターリング(Theodor Sterling)がいた。

岡本 勝

彼は、CTR研究課題による助成を1973年から1990年までに7件で合計600万ドル近くを継続して受けており、個人の研究では期間と金額に関して際だっていた。病因学を専門とするスターリングは、肺ガン発症の主たる原因が喫煙ではなく遺伝であると主張し、喫煙説を「混乱させることに貢献した」と評された。⁴⁸

また彼は、1981年4月に開催された「職場における健康」をテーマにした学会の年次大会で、「喫煙を理由にした差別」と題する講演を行った。このとき、会場で参加者の発言などを「監視」していたCTRの関係者は、「彼（スターリング）がタバコに反感をもつ多くの参加者に説得力のある話をし、[特に] 喫煙が疾病発症のリスクを高めるという考えかたに疑問を投げかけるこれまでに公表されてきたエビデンスを分かりやすく論評した」とメモに書きのこしている。いずれにしても、そのようなメモの存在は、CTRが助成した研究者の言動に注目していたことを示すものだった。⁴⁹

スターリングと同様に、CTR研究課題で助成を受けて、すでに公表されていた肺ガンやその他の呼吸器系疾患に関する研究論文を、精査し分析する作業を行ったハーバード大学のゲリー・ヒューバー（Gary Huber）医師は、1978年に「アメリカ胸部協会」とアメリカ肺協会ソラシックスオエティが共催する大会で講演し、タバコ業界の立場を代弁している。また彼は、「ガン、心臓疾患、慢性呼吸器系疾患などの専門家によって、タバコ研究の現状が議論される討論会」へも参加したのだが、公開で開催されるそのような論争の場を「支配」することも、業界によって期待されたのである。⁵⁰

第四章 依存関係の終焉

喫煙と疾病の因果関係を認めた「1964年報告書」が公表されて以降、タバコ研究はその関係を裏づけるものがさらに増え、また喫煙が肺や心臓など限られた臓器だけでなく、それ以外の臓器や器官へも悪影響をおよぼす可能性について議論されるようになった。その結果、喫煙が不健康につながるのではないかという「疑い」から、実際にさまざまな疾病を罹患させているという「事実」へと、医学界における認識は変わっていった。⁵¹

しかし、そのような研究動向にもかかわらず、AMAのタバコ業界に対する姿勢は1980年代になっても「妥協的」と言えるものが続いていた。そもそもアメリカでは、1960年頃から大気汚染、河川や湖沼などの水質汚濁、産業廃棄物の不法投棄による土壌汚染のような公害問題が、しばしばニュースとして取りあげられるようになった。1969年に成立した環境アセスメントを制度化するための「国家環境政策法」や、1970年に改正法として成立した自動車の排気ガスに含まれる有害物質を規制するための「大気浄化法」——通称「マスキー法」——などは、人びとに健康的な生活をする事への関心を高めさせた。

そのようなおり、多くの読者がいた『ニューズウィーク』は健康をテーマにした特集を組んだのである。1983年11月7日発行の『ニューズウィーク』は「個人による健康管理」というタイトルの記事を書いたのだが、それは雑誌社がAMAに監修を依頼して書かれたものだった。16ページにわたる記事では、疾病予防、食事、運動、ストレス解消、ウエート・コントロールなど自らの健康を維持するために注意すべき項目があげられていた。しかし、喫煙への言及はストレスの解消法であるという肯定的な評価を含めてわずかに四つの短い文章によって触れられただけで、それと健康被害を結びつける記述はなかった。ちなみに、この号には合計で12ページにタバコ広告があり、その広告料収入は100万ドルとされた。⁵²

この記事に対して、「雑誌社の姿勢と医師会の役割」を批判する見解が、各方面から示された。その一つに『ニューイングランド医学雑誌』による論評があり、それには喫煙に警鐘が鳴らされなかったことへの「失望」だけでなく、喫煙をストレスの解消につながるなどと肯定的に捉えたことへの「非難」が述べられていた。数多く寄せられた批判に対して、『ニューズウィーク』は喫煙問題を避けるようAMAに要請したことはないとし、AMAも「[[この記事が] スペースの関係上すべての健康問題に対応できなかった」ことと、健康維持のため「[とにかく] 何らかのメッセージを読者へ送るべき」と考えて記事を書いたと説明したのである。⁵³

しかし、そのような「弁明」に納得する者はほとんどなくその後も批判が続いたため、結果として両者はタバコ業界との関係を見直す方向へ動きだすことになった。翌1984年10月29日、『ニューズウィーク』は再びAMA監修のもと「個人による健康管理」の改訂版を掲載したのだが、今回は紙巻きタバコの喫煙が健康に良くないことを明確に指摘するものとなった。それにともない、タバコ広告は4ページに減っていた。

先ほど述べたように、医学界には組織としてのAMAと同様に、タバコ業界との関係を維持しようとした個人が少なからずいた。AMAの検証作業によって「1964年報告書」への反論がもはや行えないことが明らかになっても、そのような研究者による論文が公表されている。その一例として「国立ガン研究所」で喫煙問題を専門としていた医師ジオ・ゴリ（Gio Gori）と、共同研究者のコーネリアス・リンチ（Cornelius Lynch）による論文「より安全な紙巻きタバコへ向けて——近年の進歩——」があり、それは検証作業の終了直後だった1978年9月15日発行の『JAMA』に掲載されていた。⁵⁴

ゴリ＝リンチ論文によると、AMAやCTRを經由して行われたタバコ業界の助成事業などによって、低タール・低ニコチンのタバコ製造にくわえ、紫煙に含まれる窒素酸化物、シアン化水素、一酸化炭素、アクロレインのような有害物質の含有量を減少させる研究が、特に1970年代の中頃に大きく前進したというのであった。その結果、各社ともより安全な紙巻きタバコを製造することが可能になったとして、彼らは合計で27銘柄とそれぞれの本数をあげながら、

それらを健康上「許容^{トセラフル}できる」ものと位置づけた。具体的には、1960年以前の製品と比較して、ニコチンやタールの含有量を減少させたり有害物質が一定量取りのぞけたとして、例えば「カートン・メンソール」では1日に23本まで、また「ナウ・メンソール」では18本までなら許容できるとしたのである。⁵⁵

医学専門誌におけるこのような論文の掲載は、すでに始まっていた「タール・ダービー」と呼ばれた低タール・低ニコチンの製品作り競争をいっそう激しいものにした。その一方で、多くの医師や研究者は安全なタバコなど存在しないと確信しており、そのように考える人たちは時間の経過とともに増加していった。彼らは、タバコ業界寄りの論文にしばしば反駁したのだが、例えばゴーリと同じ研究所に籍をおいていたアーサー・アプトン (Arthur Upton) もその1人で、彼は安全なタバコなどないため非喫煙^{ノンスモーキング}を実践すべきという考えかたから、ゴーリ＝リンチ論文に対する否定的な意見を『ワシントンポスト』に寄せている。それによると、喫煙がどの程度の量までなら安全なのかは科学的に証明されていないため、「健康被害を100%免れる銘柄などありはしない」というのが、「[ゴーリたちを除く] 国立ガン研究所のような専門機関に共通する立場」であった。余談だが、ゴーリはその後研究所を退職してタバコ業界のコンサルタントになっている。⁵⁶

AMAがタバコ業界と曖昧な関係を続けていた時代、アプトンのような反喫煙の立場にたつ医師たちは、州や郡の医師会における活動によって喫煙に対する警告を発していたが、なかには全国レベルでAMAに対抗するための組織を結成した者がいた。その事例として「注意をうながすべき医師たち」(Doctors Ought to Care 以下、DOC)があった。この組織は、AMAの会員でもあった弱冠30歳のアラン・ブラム (Alan Blum) を中心とした3人の掛かりつけ医によって1977年にマイアミ市で結成され、10年後には3500人の医師、公衆衛生の専門家、医学部生などが全国から参加するものになった。

DOCは、会費や寄付で集めた資金を新たな研究へ注ぎこむのではなく、例えば、AMAが警鐘を鳴らしたものの積極的には行動してこなかった未成年者による喫煙をなくすための活動、具体的には小・中学生用の反喫煙カリキュラムや啓蒙用冊子の作成などに力を入れた。それ以外にも、未成年者を標的にしているとされたタバコ広告、例えば市場占有率第一位を争っていたマルポロをパロディー化して「マルポロ・カントリーへようこそ」と書かれたものが、フロンティアを連想させる大自然の山々を背景にしたのではなく、都会の古びたビルの裏口を出たところに置かれた灰皿に群がり、冬の寒さに背中を丸めて震えながら喫煙する人たちの、哀愁に満ちた姿を描くというような「対抗^{カウンター}広告^{アドヴァイジング}」として作成された。⁵⁷

さらに、DOCが行った活動でAMAに関連するものとして、前章で触れたタバコ会社の株式を売却させるための働きかけがあった。それは、1981年にブラムによって「紫煙のない社会づ

くり」の一環として始められたもので、彼は多くの若手医師による賛同意見を後押しにしてAMA執行部に売却を迫り、年末までにそれを実現させたのである。実は、タバコ会社の株式を資産運用のために保有していたのは広範囲におよんでおり、そこにはハーバード、ジョンズ・ホプキンス、イリノイ、ニューヨーク市、テキサスのような医学や公衆衛生学の研究施設をもつ大学も多く含まれていた。AMAによる株式売却を実現させたDOCは、1984年に「ストップ/ネシス/ニコチン/タバコ/ファンディング/フォー/エグザ大学有害財源永久禁止プロジェクト」を立ちあげてそのような大学への働きかけを始めたのだが、興味深いことに1986年にはAMAがそのプロジェクトへくわわっている。結局、ほとんどの大学は1991年までにタバコ会社の株式を売却し、それと並行して一部に残っていたタバコ会社からの助成を受けとらなくなった。⁵⁸

このように、AMAは1980年代の中頃になってようやくタバコ業界との関係を見直そうとするのだった。この動きの背景には、DOCのようなAMAに批判的な組織が医学界に誕生したことだけではなく、地方の医師会のなかでAMAに方針転換を求める声が大きくなった状況があった。そもそも、医務長官諮問委員会において報告書の作成が検討された1963年に、タバコ業界と一線を画す姿勢を取りはじめていた州医師会は少なくなかった。その姿勢とは、喫煙と疾病の因果関係を認めたくて、それぞれの州に住む住民へ喫煙——当時その多くは「過度の喫煙」——を控えるようにうながす決議を採択することを意味した。

この時期には、前年末に開始されていた医務長官諮問委員会による関係論文の精査作業がある程度進んでおり、因果関係を認めるという方向性がすでに見えていたのである。その結果、関係を認めることに消極的だったAMAに圧力をかけるため、カリフォルニアやニューヨークなどいくつかの州組織は順次決議を採択し、その後公表されることになっていた報告書を全国組織として承認すべきとする決議案が、AMAの年次大会で提出されようとしていた。実際、1963年の大会ではフロリダ州の代議員がそのような決議案を提出したのだが、このときそれは否決されている。⁵⁹

1963年8月の時点で、カリフォルニア、デラウエア、フロリダ、ハワイ、アイダホ、メイン、マサチューセッツ、ミシガン、ミネソタ、ニューメキシコ、ニューヨーク、ノースダコタ、オハイオ、ペンシルヴァニア、サウスダコタ、テキサス、ユタ、ヴァーモント、ワシントンの19州と首都ワシントンの医師会は、細部は異なったものの因果関係を認めて喫煙に注意をうながすこと、そして未成年者の喫煙に反対することという決議を採択していた。このうち、カリフォルニア、メイン、ペンシルヴァニアの3州では前年すでに決議されており、またジョージアのように、郡レベルの医師会が行ったところもあった。⁶⁰

一方、そのジョージアにおいては州レベルで否決されており、さらにノースカロライナ、サウスカロライナ、ヴァージニア、ケンタッキー、テネシーを含めた葉タバコ生産州を中心に半

数を超える州医師会では、喫煙と健康被害の因果関係を認めるそのような決議案が否決されたり、そもそも議題にされないなど州によって対応は分かれた。⁶¹ その結果、1964年に開催されたAMAの大会でも、因果関係を認める内容の決議案は前年と同様に採択されず、また公表されたばかりの「1964年報告書」には、支持も不支持も表明されないというあやふやな対応がとられた。

しかし、その後も続いた因果関係を認める研究結果の発表によって、前章で考察したように、1978年にはAMAも「1964年報告書」を追認せざるをえない状況になっており、決議案に反対していた多くの州医師会も徐々にその流れに従っていったのである。ただし、AMAがただちにタバコ業界と敵対するようにならなかったことは、タバコ会社の株式を1981年の末まで保有しつづけた事実や、1983年に『ニューズウィーク』へ掲載されたAMAの監修による最初の特集記事が物語っている。そのように曖昧な姿勢が続くなかで、最終的に袂を分かち意思表示となる出来事が起こったのだが、それは1985年にAMAがタバコ広告の全面禁止を連邦議会に求めたことだった。

そもそも、AMAと州医師会は成人の喫煙について意見の対立が一部であったものの、未成年者の喫煙では両者とも警鐘を鳴らしつづけてきた。これに関して、広告は未成年者をターゲットにして新規の利用者を増やすためではなく、他社製品を使用する成人に自社製品へ変更させる目的で行われていると、長年タバコ会社は説明してきた。しかし、そのような説明を信じる者はほとんどいなかったのである。⁶²

確かに、1971年発効の連邦法——「公衆衛生紙巻きタバコ喫煙法」——によってテレビやラジオのような電波を媒体としたタバコ広告は禁止され、その後通学路や公園などに面したビルの側壁や屋上に設置された看板を使ったものも、自治体条例によって姿を消した。しかし、新聞や雑誌での広告やタバコ製品の無料配布が継続されるなか、新たにロゴマークや銘柄名が印刷されたTシャツやマグカップのようなグッズの販売や配布、さらにはスポーツや音楽イベントなどに対するスポンサー活動も始まり、1971年以降も若者を標的にしたと思われる広告は巷に溢れていたのだった。

そのような状況で、AMAの会員だったシカゴ大学の医学部生ロナルド・デーヴィス (Ronald Davis) が、1979年にタバコ広告の全面禁止を求めて行動を起こすのだった。彼は12月にホノルル市で開催されたAMAの全国大会に出席して、「AMAはすべての紙巻きタバコ広告を禁止する連邦法を成立させるための活動に邁進すべき」という決議案を提出しようとしたのである。しかし、それが事前に議題を決定する代議員会を通過することはなかった。それでもデーヴィスは、このときの行動力が評価されて翌年24歳の医学部生として初めてAMAの代議員に、そして1984年には、最初の掛かりつけ医として16名で構成されるAMAの理事会メンバーに選

出されており、喫煙問題を中心に発言力を強めていった。⁶³

彼のような反喫煙・反タバコ業界の立場にたつ若手の医師が組織の中核メンバーに選ばれるようになった背景に、それまで行われてきた業界寄りの運営に批判的な会員が、AMAのなかで多数を占めるようになったという変化があった。それに拍車をかけたのが受動喫煙の問題だった。喫煙によって、使用者自身の健康が損なわれるという研究が増加するなかで、周囲にいる非喫煙者にも被害をもたらすという研究が、1970年頃から医学誌などで取りあげられるようになり、1980年代になってその数は増した。

その結果、連邦レベルでは州境を越える航空機、鉄道、バス、フェリーで、また州や自治体レベルでは映画館、デパート、飲食店、オフィスビルのような不特定多数の人が集まる屋内空間や、地域内を結ぶ近距離の交通機関などで喫煙規制が始まり、当初は「分煙」だったものが徐々に「禁煙」へと変わっていき、さらには公園や野外のスポーツ施設でも灰皿が撤去されるようになった。1986年に公表された公衆衛生局医務長官報告書は、受動喫煙の危険性を政府が公式に認めるものになったのだが、この頃には世論の喫煙に対する反発は決定的になっており、そのような状況がAMAとタバコ業界の関係にも影響をおよぼしたと考えられる。⁶⁴

1980年代の中頃、AMAのなかで反タバコ派の会員が多数になったことを示すものとして、次のような見直しがなされたのである。それは「1964年報告書」以降、連邦議会や政府機関によって開催された喫煙やタバコ業界に関連する公聴会での証言をほぼすべて避けてきたAMAが、1985年に開催された連邦タバコ税の引き上げや、連邦政府の施設内における喫煙規制の法案に関連する公聴会へ代表を送り、それぞれに賛成を表明したことであった。

同様に、タバコ広告の全面禁止についても、AMAは1979年のホノルル大会とは異なった対応をとった。AMA、厚生省公衆衛生局、反喫煙の任意団体などが働きかけた結果、1985年にオクラホマ州選出の民主党連邦下院議員マイク・サイナー（Mike Synar）を提案者として、すでに禁止されていた電波広告以外のあらゆる広告——そこには自動車レース、テニスやゴルフのトーナメント、ロックコンサートなどへの後援活動も含まれた——を禁止する連邦法案が提出されることになった。このとき、「サイナー法案」に関連して開催された公聴会へは、AMAを代表してデーヴィスが出席して賛成の立場で証言している。

しかし、この法案は雑誌や新聞での広告を含んでいたため、合衆国憲法修正第一条で保障された言論の自由の観点からの反対意見が強く最終的に成立しなかった。ただし、タバコ広告はその後も州法や自治体条例、さらにはタバコ会社による自主規制によって減りつづけ、21世紀の初頭には一部の雑誌をのぞいてはほぼ見かけられなくなった。⁶⁵

おわりに

これまで述べてきたように、長年相互依存の関係にあったタバコ業界とAMAは、多額のタバコ資金を使って行われた後者による「1964年報告書」の検証作業が、前者にとって思わしくない結果に終わった頃から徐々に疎遠になりはじめた。それでも、その後しばらくの間は曖昧な関係が続いたものの、『ニューズウィーク』が喫煙問題に触れなかった1983年のAMA監修による特集記事を修正して、翌年それをあらためて取りあげた改訂版を掲載した頃には、「対立」と言える関係になりかけていた。そのような状況のなかで注目されたのは、タバコ広告全面禁止法案の連邦議会への提出に、AMAが中心的役割を果たしたことだった。

そもそもタバコ製品は、人びとが生活するのに不可欠な必需品ではなくあくまでも嗜好品だったため、タバコ業界は使用者を安定的に増やすうで広告の果たす役割とその必要性を、時代を超えて認識してきた。しかし、1980年代の中頃にはそれまで表だった対立を避けてきたAMAと業界の間にそれをめぐって溝が生じることになったのである。事実、1985年12月にABCテレビの報道番組「ナイトライン」へ出演したAMA副会長ジェームズ・サモンズ(James Sammons)は、広告全面禁止法案の提出が「タバコ業界との断絶」を意味すると発言している。⁶⁶

研究助成金を提供しても否定的な結論が多くなっていったため、それをやめるよう進言する弁護士もいたが、それでも業界の指導者たちは研究者を反タバコ派にさせないためにも助成は必要と考えつづけた。1995年の時点でも助成金を受けとる者はおり、それに対してAMAは受けとらないよう会員たちに求めたことが新聞で取りあげられていた。⁶⁷ いずれにしても、タバコ業界とAMAが組織としてお互いのために依存しあう関係は1985年に終焉を迎えており、それ以降は対立するものになったのである。

註

- 1 Jack J. Gottsegen, *Tobacco: A Study of Its Consumption in the United States* (New York: Pitman Publishing Co., 1940), tables on 34, 36, 39, and 43.
- 2 Alan Blum, "Medicine vs Madison Avenue: Fighting Smoke with Smoke," *Journal of the American Medical Association* 243 (1980), 739.
- 3 Gerard S. Petrone, *Tobacco Advertising: The Great Seduction* (Atglen, PA: Schiffer Publishing Ltd., 1996), 249.
- 4 Unsigned editorial, "The Advertising of Cigarettes," *Journal of The American Medical Association* 138 (1948), 652.

- 5 Ccssandra Tate, *Cigarette Wars: The Triumph of "The Little White Slaver,"* (New York & Oxford: Oxford University Press, 1999), 120 & 144.
- 6 Alan Blum, "When 'More doctors smoked Camels' : Cigarette advertising in the Journal," *New York State Journal of Medicine* 83 (1983), 1347; Martha N. Gardner and Allan M. Brandt, "The Doctors' Choice is America's Choice: The Physician in US Advertisements, 1930-1953," *American Journal of Public Health* 96 (2006), 223-24.
- 7 Philip Morris, "Report on the Findings of a Group of Doctors Call for Philip Morris," 1937, <http://tobaccodocuments.org/ads_pm/2061014890.html> August 10, 2019.
- 8 Michael Mulinos and R. L. Osbourne, "Irritating Properties of Cigarette Smoke as Influenced by Hygroscopic Agents," *New York State Journal of Medicine* 35 (1935), 590.
- 9 Gardner and Brandt, 224.
- 10 P. Cruist et al., "Jones/Day Liability Summary ('Corporate Activity Project')," 379-81, <<http://tobaccodocuments.org/ness/37575.html>> August 10, 2019.
- 11 John E. Calfee, "The Ghost of Cigarette Advertising Past," *Regulation* (Nov./Dec.1986), 36.
- 12 Howard Wolinsky and Tom Brune, *The Serpent on the Staff: The Unhealthy Politics of the American Medical Association* (New York: Jeremy P. Tarcher/Putman, 1994), 145-47; Tate, 142.
- 13 Lloyd Stryker, "The endorsement of commercial products by physicians," *New York State Journal of Medicine* 27 (1927), 1264.
- 14 Elizabeth M. Whelan, *A Smoking Gun: How the Tobacco Industry Gets away with Murder* (Philadelphia: George F. Stickley Co., 1984), 79.
- 15 Blum, "When 'More doctors.....'," 1348.
- 16 Charles Marwick, "Many physicians following own advice about not smoking," *Journal of the American Medical Association* 252 (1984), 2804; Whelan, 58.
- 17 Blum, "When 'More doctors.....'," 1351; P. Lorillard Company, "Have you tried this experiment, doctor?," <http://tobacco.stanford.edu/tobacco_main/images_body.php?token1=fm_img11836.php> August 11, 2019.
- 18 B. DeVoto, "Doctors along the Boardwalk," *Harper's Magazine* (1947), reprinted in DeVoto, *The Easy Chair* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1955), 91; Philip Morris, "At the A. M. A. Convention: Make the Doctors' Lounge your Club," *Journal of the American Medical Association* 125 (1944), 93.

- 19 Ernest L. Wynder and Evarts A. Graham, "Tobacco Smoking as a Possible Etiologic Factor in Bronchiogenic Carcinoma: A Study of Six Hundred and Eighty-Four Proved Cases," *Journal of the American Medical Association* 143 (1950), 330. そのほかにも, 類似の結果を導きだした20編を超える研究が1950年代に国の内外で発表されたのだが, 特にリチャード・ドール (Richard Doll), オースティン・ヒル (Austin Hill), ダニエル・ホーン (Daniel Horn), カイラー・ハモンド (Cuyler Hammond) などによるものが注目された。Peter Taylor, *Smoke Ring: The Politics of Tobacco* (London: The Bodley Head Ltd., 1984), 3-5; Larry C. White, *Merchants of Death: The American Tobacco Industry* (New York: Beech Tree Books, 1988), 28.
- 20 Roy Norr, "Cancer by the Carton," *Reader's Digest* (December 1952), 7-8.
- 21 Jordan Goodman, *Tobacco in History: The Cultures of Dependence* (New York: Routledge, 1993), 110-11; Robert Heimann, *Tobacco and Americans* (New York: McGraw-Hill Book Company, Inc., 1960), 254.
- 22 Stanton A. Glantz et al., *The Cigarette Papers* (Berkeley, Cal.: University of California Press, 1996), 33; Paul Hahn, "Smoking & Lung Cancer — No Proof," November 26, 1953, <http://tobaccodocuments.org/ness/6746.html> August 19, 2019.
- 23 C. C. Little, *Report of the Scientific Director*, June 30, 1957, <http://legacy.library.ucsf.edu/tid/fof39d00> July 29, 2019; Tobacco Industry Research Committee, "A Frank Statement to Cigarette Smokers," *New York Times*, January 4, 1954.
- 24 Richard Kluger, *Ashes to Ashes: America's Hundred-Year Cigarette War, the Public Health, and the Unabashed Triumph of Philip Morris* (New York: Vintage Books, 1996), 166 & 569.
- 25 Glantz et al., 358; Tobacco Industry Research Committee, "Report on TIRC Booklet: A Scientific Perspective on the Cigarette Controversy," May 3, 1954, <http://tobaccodocuments.org/ness/10362.html> July 20, 2019.
- 26 Allan M. Brandt, *The Cigarette Century: The Rise, Fall, and Deadly Persistence of the Product That Defined America* (New York: Basic Books, 2007), 186; Little, 19; Kenneth E. Warner, "Tobacco Industry Scientific Advisors: Serving Society or Selling Cigarettes?," *American Journal of Public Health* 81 (July 1991), 839-40.
- 27 Diana K. Sergis, *Cipollone v. Liggett Group: Suing Tobacco Companies* (Berkeley Heights, N. J.: Enslow Publishers, Inc., 2001), 17; Evarts A. Graham to Ernest L. Wynder, February 16, 1953, Box 103, Folder 762, Graham Papers; Brandt, 172.

- 28 Tobacco Industry Research Committee, "TIRC Reports on Progress of Cancer, Heart Research," *Tobacco and Health* (June-July 1960), 1.
- 29 Kluger, 360; Glantz et al., 320.
- 30 Center for the Study of Tobacco and Society, "AMA Takes No Stand Against Smoking," <https://csts.ua.edu/ama/no-position-against-smoking/> July 18, 2019.
- 31 「1964年報告書」は387ページにおよんだが、以下にあげる2点が断定的に述べられており、特に注目された。まず第一点として、紙巻きタバコ喫煙は「肺ガン発症の原因としてほかのものとは比較にならないほど重要である。……非喫煙者と比較して、平均的な喫煙者の肺ガン発症の危険性は9倍から10倍、そして過度の喫煙者のそれは少なくとも20倍にたつする」こと、そして第二点として、喫煙は「慢性気管支炎発症に関して最大の原因であり、……肺気腫とのあいだに因果関係が存在しており、……心臓疾患での死亡率は非喫煙者よりはるかに高くなる」ことが述べられていた。U. S. Department of Health, Education and Welfare, *Smoking and Health: Report of the Advisory Committee to the Surgeon General of the Public Service* (Washington D. C.: U. S. Government Printing Office, 1964), 31 & 38-39; Thom Marshal, "Gone in a puff of smoke," *Houston Chronicle*, April 18, 1997, A37.
- 32 A. Lee Fritschler, *Smoking and Politics: Policymaking and the Federal Bureaucracy* (Englewood Cliff, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1983), 31. ちなみに、『JAMA』でのタバコ広告は1953年に、また『ニューヨーク州医学雑誌』でのそれは1955年に、それぞれヴァイスロイのフィルターを宣伝するものが最後となったが、医学雑誌のなかには、例えばミネソタ州医師会発行の『ミネソタ・メディスン』のように、1960年代まで継続されたものもあった。Blum, "When 'More doctors.....'," 1352; Victor Cohn, "State Medical Journal Drops Cigarette Ads," *Minneapolis Tribune*, October 10, 1963.
- 33 Jessica Rosenberg, "The AMA tackles smoking," *New York State Journal of Medicine* 83 (December 1983), 1363; Morton Mintz, "Like Twin Serpents on the Caduceus," *Legal Times* (May 1990), 19.
- 34 連邦取引委員会によって提案されていた「警告表示」に関して、AMAの筆頭理事ブラシンゲーム (F. J. L. Blassingame) は「おそらくそれ (警告表示) は人びとによって無視されるだろうから、[AMAは] 表示よりも喫煙に関連する研究に心血を注ぐべきである」と述べて、表示の必要性に否定的だった。F. J. L. Blassingame, "Full Text of AMA Letters of Testimony to F. T. C.," *Journal of the American Medical Association* 188 (1964), 31; John Makeig, "AMA spent decades aiding tobacco firms, local doctor

- claims,” *Houston Chronicle*, June 12, 1997, A36; Mintz, 20; Rosenberg, 1364.
- 35 Unsigned editorial, “Tobacco firms contribute to AMA-ERF smoking study,” *Journal of the American Medical Association* 187 (1964), 27; Unsigned editorial, “Cigarette Producers Donate \$10 Million to AMA Research,” *Tobacco: The International Weekly* 158, (February 14, 1964), 9.
- 36 Rosenberg, 1363.
- 37 Howard Wolinsky, “When researchers accept funding from the tobacco industry, do ethics go up in smoke?,” *New York State Journal of Medicine* (July 1985), 453; Unsigned editorial, “Cigarette Smoke’s Gas May Be a Big Hazard to Health, AMA Told,” *Wall Street Journal*, June 19, 1968, 12.
- 38 The American Medical Association, “News Release,” July 17, 1978; Mintz, 20; Kluger, 447-48.
- 39 Alan Blum, “AMA rewrites tobacco history,” *The Lancet* 346 (July 29, 1995), 261.
- 40 AMAとタバコ業界の関係を示唆するエピソードはほかにもあった。それは、AMAの会長経験者のハリソン・ロジャーズ (Harrison Rogers) や執行部の一部が、1980年代の中頃まで葉タバコ栽培の経営に関わっていたことや、シカゴにあったAMAの本部には、反喫煙派が長年批判してきたにもかかわらず、1985年までタバコの自動販売機が設置されていたことなどであった。Blum, “AMA rewrites,” 261; Wayne Stayskal, “Stung by press criticism, AMA jettisons tobacco stock,” *Medical World News*, October 26, 1981, 16.
- 41 Unsigned document, “Detailed discription of CTR,” in *Brown and Williamson Documents* (1989), 6.
- 42 喫煙によって健康を損ねたと考えた喫煙者やその家族・遺族が原告となり、タバコ会社に製造物責任を問うために起こした訴訟については、拙著『アメリカにおけるタバコ戦争の軌跡——文化と健康をめぐる論争——』（ミネルヴァ書房、2016）の第八章（293-331）を参照されたし。
- 43 Unsigned document, “Master Summary for B & W Subjective Document Review,” in *Brown and Williamson Documents* (1989), 13.
- 44 Ibid., 1 & 44.
- 45 Lisa Bero et al., “Lawyer Control of the Tobacco Industry’s External Research Program,” *Journal of the American Medical Association* 274 (1995), 242-43; Unsigned document, “Washington University Special Project,” in *Brown and Williamson*

- Documents* (1989); Glantz et al., 310-11.
- 46 David Kessler, *A Question of Intent: A Great American Battle with a Deadly Industry* (New York: Publicaffairs, 2001), 207; Wolinsky, "When researchers accept.....," 455; Whelan, 23.
- 47 Lisa Bero and Stanton Glantz, "Tobacco industry response to a risk assessment of environmental tobacco smoke," *Tobacco Control* 2 (1993), 105; Richard Durbin, "The tobacco industry strategy: new subject, same tactics," *Tobacco Control* 2 (1993), 8-9.
- 48 Glantz et al., 296.
- 49 W. Shinn, "An Investigation of Office Building Syndrome: Letter to T. Ahrensfeld, M. Crohn, J. Greer, A. Henson, E. Pepples, and A. Stevens," in *Brown and Williamson Documents* (1981), 2-3.
- 50 W. Shinn, "Encouraging attendance at scientific meeting: Letter to General Counsel," in *Brown and Williamson Documents* (1978), 2.
- 51 "Beyond Any Doubt," *Time*, November 30, 1953, 60-61.
- 52 Kenneth E. Warner, "Cigarette Advertising and Media Coverage of Smoking and Health," *The New England Journal of Medicine* 312 (1985), 384-85; Elizabeth M. Whelan, "When Newsweek and Time Filtered Cigarette Copy," *The Wall Street Journal*, November 1, 1984.
- 53 Warner, 385.
- 54 Gio B. Gori and Cornelius J. Lynch, "Toward Less Hazardous Cigarettes: Current Advances," *Journal of the American Medical Association* 240 (1978), 1255-59.
- 55 *Ibid.*, 1256.
- 56 Victor Cohn, "Some Cigarettes Now 'Tolerable,' Doctor Says," *Washington Post*, August 10, 1978; A. Fairchild and J. Colgrove, "Out of the Ashes: The Life, Death, and Rebirth of the 'Safer' Cigarette in the United States," *American Journal of Public Health* 94 (2004), 192-204.
- 57 Alan Blum, "DOC — counter advertising has impact: Physicians group launches innovative prevention campaign," *Focus*, (March/April 1979), 22; Constance Crrelka, "Doctors Fight the Effects of Tobacco Ads on the Young," *Health Link* (July 1987), 15-16.
- 58 Doctors Ought to Care, "DOC Efforts Spark Major Universities to Divest Tobacco Holdings," *The Journal of Medical Activism* 6 (Summer 1991), 1 & 3; Alan Blum,

- “Ethics of Tobacco-Funded Research in U. S. Medical Schools,” *Tobacco Control* 1 (1992), 244-45.
- 59 Unsigned editorial, “Medical Society Tells Smokers to Stop,” *New York World Telegram*, May 15, 1963; Unsigned editorial, “Congratulations California Doctors !,” *Desert News* (Salt Lake City, Utah), April 8, 1963.
- 60 Unsigned editorial, “Survey Summarizes Medical Societies Actions on Smoking,” *Medical Bulletin on Tobacco* 1-3 (Fall 1963), 1; “Following a Trend,” *The Wall Street Journal*, May 3, 1963.
- 61 “Physicians Refuse to Convict Cigarettes,” *Atlanta Constitution* (Atlanta, GA), May 9, 1963; “Doctors Back Fund Drives: Refuse to Condemn Cigarettes,” *Evening World Herald* (Omaha, Neb.), May 15, 1963.
- 62 そもそも、長年タバコに依存してきた年配者はその使用が原因であろうとなかろうと、いずれそう遠くない時期に亡くなるため、タバコ会社は自らの存続のために新規の喫煙者を常に必要とした。したがって、未成年者をターゲットにして広告を打つことは、経営戦略上の必然であった。また、未成年者の銘柄に対する「忠誠心」は成人よりも強く、最初に喫煙した銘柄をその後も長期間使用しつづける傾向にあって、たとえ変更する場合でも、他社の製品ではなく同じ会社の別の銘柄を選択することが少なくなかったという調査結果もあった。なお、未成年者をターゲットにしたタバコ広告に関しては、拙著『タバコ広告でたどるアメリカ喫煙論争』（丸善出版、2017）の第二章（30-58）と第六章（147-75）を参照されたし。Richard W. Polly, “Targeting Tactics in Selling Smoke: Youthful Aspects of 20th Century Cigarette Advertising,” *Journal of Marketing Theory and Practice* (Winter 1995), 1; Brian Kelly, Jonathan Weiser, & Jeffrey Parsons, “Smoking Attitudes on Smoke-Free Air Laws among Club-Going Young Adults,” *Social Work in Public Health* 24 (2009), 447.
- 63 Mintz, 20; Kluger, 569.
- 64 AMAのタバコ業界に対する姿勢の変化に影響を与えた受動喫煙および喫煙規制法、さらには喫煙量を減少させることに効果的と考えられたタバコ増税に関しては、拙稿「アメリカ合衆国における『現代タバコ戦争』の転換点としての一九八〇年代——ニコチンの依存性と受動喫煙の危険性に関する史的考察——」『文明科学研究』第八巻、2013年、1-18；同「二〇世紀第四期四半世紀のアメリカ合衆国における喫煙の政治問題化——公共空間での喫煙規制を中心に——」『中・四国アメリカ研究』第七号、2015年、115-42；岡本、前掲書（ミネルヴァ書房）第六章（203-38）および第七章（239-92）を参照されたし。

- 65 Mintz, 20-21; Kluger, 569. 確かに、通常の紙巻きタバコ広告は大幅に減少したが、21世紀になって、電子タバコの広告が若者むけの雑誌を中心に行われるようになってきている。
- 66 Mintz, 22.
- 67 Sabia Russell, "AMA Denounces Tobacco 'Scourge'," *San Francisco Chronicle*, July 14, 1995; Doug Levy, "AMA: Public 'duped' by tobacco firms," *USA TODAY*, July 14, 1995.

History on the Relation of the Tobacco Industry and the American Medical Association

OKAMOTO Masaru

In the second quarter of the 20th century, cigarette smoking became the norm for men and women in the United States, and a majority of physicians also smoked. At the same time, however, there was rising public anxiety about the health risks of smoking. One strategic response of tobacco companies was to devise advertising referring to physicians. As ad campaigns featuring physicians developed through the early 1950s, tobacco executives used the doctor image to assure the consumer that their brands were safe.

Moreover, through advertisements appearing in the pages of medical journals for the first time in the 1930s, tobacco companies worked to develop close, mutually beneficial relationships with physicians and their biggest national organization — the American Medical Association (AMA). These advertisements became a source of income for organizations and medical journals. At the same time, physicians' approval of their products could prove to be essential, since patients often brought smoking-related symptoms and health concerns to the attention of their family doctors. Tobacco executives expected them to recommend their respective brands as a healthier cigarette. Advertisements in the medical journals also suggested that the individual physicians' clinical judgment should continue to be the arbiter of cigarette smoking even as systematic health evidence accumulated. By 1954, however, industry strategists deemed physician images in advertisement no longer credible in the face of growing concern about the health evidence implicating cigarettes.

Despite pressure from the tobacco industry and its political allies in Congress to do

nothing, the U. S. government was forced to do something to protect public health from legal but allegedly harmful product — cigarette. In 1962 Luther Terry, the U. S. Surgeon General, was instructed by President John F. Kennedy to set up an advisory committee to evaluate the research papers on tobacco and its effects upon human health.

On January 11, 1964, the committee made public its 387-page report, which “officially” admitted that cigarette smoking, the cause of such diseases as lung cancer, emphysema, and heart disease, was “a health hazard of sufficient importance in the United States to warrant appropriate remedial action.” The AMA, however, did not endorse the report, avoiding committing itself on it.

On the contrary, the AMA accepted 10 million dollars from the tobacco industry for research in 1964 and additional 8 million dollars in 1968. At that time, the AMA badly needed support from Senators and Congressmen from the so-called “Tobacco States,” to kill a bill to set up “Medicare,” a public health care system for the elderly. Those politicians were the friends of the tobacco industry. Moreover, the AMA invested several million dollars in tobacco companies’ stocks for retirement benefits. It, therefore, did not want a fall in those share prices. In the middle of the 1980s, however, the AMA suddenly broke off its relations with the tobacco industry, because of pressure from within and without the organization to do so.

ポピュリズム時代のアメリカ史研究

—— 課題と展望 ——

中野博文

1 トランプ時代のアメリカを理解するパラダイム

「個々の対象をはっきりと見るのではなく、一般的な事実を洩らさず、しかと捉えたい。旅人が大都市の城壁を出て、近くの丘に上るように振舞うのである。町から離れるにつれて、後にしてきた人々の姿は目から消える。家々もひと続きになり、広場も見えず、道筋もはっきり見えない。だが、町の輪郭を目で追うことはずっとたやすく、初めて町の形をはっきり捉えられる。・・・この巨大な絵の細部はぼやけたままだが、全体が視野におさまり、全体についての一つの明確な観念をもてる」¹⁾。

これほどまでに現在のアメリカ研究にとって必要な態度を、的確に表現したものはない——異常な熱戦となった2020年大統領選挙を前に、私がつよく感じたことである。

言うまでもなく、これはトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』第1巻の結びにあらわれる言葉である。アメリカ合衆国のいまの眺望は、トクヴィルが訪米した19世紀中葉とまったく異なる。21世紀にこのような思いを抱くのは、古典信仰のアナクロニズムなのかもしれない。

しかし、4年前の2016年大統領選挙の開票直前、私はアメリカ政治の学徒としてドナルド・J・トランプの敗北をマスメディアで語っていた。トランプのような人物をリベラルな政治風土を持つ米国が許すはずはないと思っていたのである。そうした身にとっては、トランプ政権期の四年間、自らの学問の根本を問い直さずにはおられなかった。米国社会の実像を見誤った失敗を再度犯すのを避けるためである。

この稿は、そうした問い直しのなかで、私が考えたことを綴ったものである。考えるにあたって前提としたのは、次の二つある。

一つは、トランプの台頭と大統領としての統治を、先進国全体の動向に位置づけることである。トランプの常軌を逸したと思える行動と異常な政権運営に振り回されて、研究者はトランプを生んだ米国特有の風土に注目しがちである。しかし、トランプが予備選挙で快進撃を続けた時期、英国では国民投票でヨーロッパ連合（EU）からの離脱を決することとなり、そのための選挙キャンペーンが華々しく展開されていた。そして、6月24日、大方の予想を裏切り、僅差で離脱派が勝利したのである。中東欧に目を向けると、2014年にクリミアを併合したロシアのプーチン大統領が西欧や米国のリベラリズムへの批判を強めていた。また、ハンガリーの

オルバン政権による人権を軽視する統治も2010年代初頭から問題になっていた。リベラルな価値観に支えられた国際協調を打破するトランプの行動は、ヨーロッパの動きと軌を一にしていたのである。

いま一つは、そうしたリベラルな国際秩序を揺り動かすきっかけになった多文化主義への批判である。英国のEU離脱運動もトランプの台頭も、移民の増大により、キリスト教を柱とした伝統社会が揺らいでいるのを懸念した人々を扇動するかたちで進められた。ロシアや東欧の反リベラリズム運動も、同性愛の権利に強烈な拒否感を示し、キリスト教の価値観を擁護する点で、米英の動きと共通する部分があった。国際的な反リベラリズム運動の核は、移民や有色人種、性的マイノリティなどの権利を承認したり拡充したりするのをめざした「アイデンティティの政治」を嫌悪する文化的保守派なのである²⁾。

今日のアメリカ研究にとって肝要なのは、このグローバルな動きを米国の風土との関連で正しく捉えることであろう。しかし、残念なことに、これまでのアメリカ研究では、「アイデンティティの政治」に敵対的な勢力を客観的に評価することが難しかった。トランプやEU離脱派などを一括してポピュリストと呼ぶことが、しばしばある。ポピュリズム理解はアメリカ研究の基礎となったものの一つであり、優れた研究蓄積が多いものの、その反動性もっぱら強調される傾向があった。

しかし、いかなる失態を演じ、国内外からの容赦ない非難を浴びようとも、トランプは4割前後の大統領支持率を維持してきた。また、彼の政権の四年間の信を問う2020年大統領選挙では7300万票と、2008年大統領選挙でオバマが記録した史上最多の得票数6949万票を大きく塗り替える数字をたたき出した。もとより、この支持をトランプへの信頼と単純に考えることはできない。民主党政権を選ぶよりもトランプで我慢する方がよいという消極的な者も多くいたであろう。しかし、それでもなお、トランプ流のポピュリズムでも良しとする米国国民が、これほどまでに存在するのである。アメリカ研究者が直視するように迫られているのは、トランプ政権期を自由主義からの一時的な逸脱としてではなく、21世紀の一つの大きな潮流の具現化と認めることであろう。

そして、「トランプ的なもの」を現在の米国文化の一部と率直に認めるとき、より大きな問題が見えてくる。それは、アメリカ研究のパラダイム転換の必要である。

冒頭に紹介したトクヴィルがアメリカ研究の古典となっているのは、封建時代を経験しなかった米国では、ヨーロッパと異なる自由主義社会が育っていることを見事に描いたからであった。トランプの政権獲得が研究者の盲点を突く想定外のものとなったのも、一つには、トクヴィルが指摘したアメリカの特殊性が20世紀中葉、思想史家ルイス・ハーツの洗練された手法によって再提示されて、自由主義以外の価値観が米国では育たないという考えが広まった

ことがある。リチャード・ホフスタッターもまたハーツとともに、自由主義を信奉する国民文化が米国に根付いていることを強調した。コンセンサス学派として知られる、この二人の著作によって、米国は自由主義の国であり、ポピュリズムはその逸脱という「常識」が形成されたのであった³⁾。

ただ、私が大学で教鞭を執るようになった1990年代初頭になると、米国の大学で定評のあるアメリカ政治の教科書に、米国の政治が自由な選挙で動いているのか、さらに言えば民主主義と本当に言って良いのか、疑問が呈されるようになっていた⁴⁾。アメリカの政治秩序が、それまでの自由主義を基礎とした民主主義体制から離れて、何か異なるものに移り変わる臨界点に達していたことは、20年前には教科書的な「常識」になっていた。

そして、トランプ時代が到来した。それを予想できなかったのは、「自由主義の国アメリカ」という枠組みでしか米国社会を観察できない者が陥った知的退嬰があったと言われても仕方ない。誤解を恐れずに言えば、20世紀後半から進んだグローバリゼーション、そして「アイデンティティの政治」が言祝ぐ多文化主義を歴史の当然の流れと満足し、それらに内在する矛盾に無頓着になっていたのではなかろうか。人々がその矛盾に抱いた不満や不安を、研究者は正視していなかったように思うのである。

要するに、アメリカ研究の視角が偏っていたのである。そうした偏向と関連して、自由で公正な議論を尊ぶ風土が、米国では揺らいでいた。この点、『ハーパーズ・マガジン』に掲載された2020年7月7日の文化人による公開書簡が示唆的である。そこでは、トランプとその支持者だけでなく、トランプ主義者に抗議する人々も、言論の封殺に加担していることが批判されたのであった⁵⁾。差別主義者のポピュリスト的行動は米国の異端であると情動的に反応し、その背景を客観的に考慮せずに非難だけする態度が広がっていたのなら、私にはそれもまた、トランプの台頭を予想しがたいものにした一因ではないかと思える。

以下は、こうした関心のもと、アメリカ理解の学問的あり方について探ったものである。はじめにまず、ポピュリズム時代の到来で動揺するアメリカ研究の状況を概観する。つづいて、20世紀末からの研究潮流を取りあげ、グローバリゼーションのなかで台頭したマイノリティを重視する研究姿勢が、研究者の間に、感傷主義的で真理を軽んじる姿勢を広げていたことを示す。筆者の力不足によって、取りあげるのが、もっぱら政治や歴史を考察した研究だけになっている点については、あらかじめ読者のご寛恕を請いたい。私としては、この稿の議論がそうした専門分野を越えて、他の領域でアメリカ研究を行う方にも資することを願っている。

2 失われていく史的文脈——21世紀ポピュリズムをいかに捉えるべきか

冒頭に記したトクヴィルの一節を取りあげて、トクヴィルのアメリカ理解の手法を高く評価

した一人に、シェルドン・ウォリンがいる。ウォリンは、それを「政治的印象主義」と名付けて、その革新性を論じたのであった。

トクヴィルはアメリカの全体像をくつきりと捉えるために、一般的な事実を洩らさず把握せねばならないとしているが、ウォリンによれば、それは事実の科学的考究のためではない。トクヴィルにとって事実とは単なるデータではなかった。事実を重視するのは、民主政が人類文明の進むべき道であることを読者に確信させるメタファーとしてなのである。

個々の事実を明瞭にすることは求めず、アメリカ全体をくつきりと見渡す視点の獲得を強調しているのは、空間をくまなく把握しようとしてのことではない。大切なのは、時の流れである。一つ一つの事実が不明瞭でよいのは、未来の米国にとって重要なものは大きく、さほど重要でないものは小さく見えるようにしているからである。過去から現在、そして未来へと向かう時間軸のもと、トクヴィルは個々の事実や微細な出来事に、ふさわしい重みづけをしていると、ウォリンは論じている⁶⁾。

現在のアメリカ史研究で、まさに揺らいでいるのは、こうした歴史的道程を理解する視角であろう。試みに邦語で出版された直近のアメリカ史の通史を見てみよう。岩波新書の『アメリカ合衆国史』のシリーズである。そこには、20世紀が過ぎ去ってゆくなかで噴出した社会不安とともに、トランプを生み出した米国社会への戸惑いが生々しく描かれている。福祉国家の拡充、マイノリティの社会的地位の向上といった、これまでは歴史の進歩として自明のように語られてきたことを否定する動向を前に、困惑する歴史研究者の姿が、そこには感じられる⁷⁾。

この進歩への歩みを打ち壊した張本人こそ、ポピュリストにはかならない。「ポピュリズムという妖怪が世界を徘徊している。それは政党政治や民主政のいかなる変調や危機を示唆しているのか」。これは政治学者である佐々木毅氏の言葉である。佐々木氏は1970年代にはラテン・アメリカの反エリートの大衆運動であったものが、先進国の政体をも呑み込んだことへの驚きを、率直に述べている。米国ポピュリズム史研究の第一人者である横山良氏が指摘するように、妖怪とポピュリズムを表現するのは、1967年にロンドンで開催された国際シンポジウム以来、繰り返されてきた。ただ、これほどまでに先進国の民主体制を動揺させ、リベラル派の人々に戦慄を与える存在になったことはなかった⁸⁾。

研究史を紐解けば20世紀末から、今日のトランプ政治につながる保守派の社会運動に、研究者は関心を寄せはじめ、ポピュリズムを自由主義に比肩する米国の主要な文化と位置づける研究も現れた。その代表作は、1995年に公刊されたマイケル・ケイズンの『ポピュリストの信条』である⁹⁾。しかし、この書の出版以降、米国のポピュリズム文化をめぐる史的理解が変わったかといえば、そうではない。

ケイズンの著作は19世紀末以降をもっぱら扱っており、19世紀以前のアメリカについてポ

ピューリズムを考察した研究書は、わずかにロナルド・フォルミサノのものだけである。また、米国の自由主義文化に対する革新的見解を示したケイズンも、2017年に出版された同書の補訂版では、トランプを差別主義ポピュリストと論じており、米国政治の病弊とする点では、従来のリベラル知識人と大きく変わらない態度をとっている¹⁰⁾。ポピュリズムを植民地から現在にいたるアメリカの文化と捉えて、その起源と発展をたどる作業は、いまだ緒に就いたばかりと言わざるをえない。

ところで、そうしたポピュリズム研究を始めるとき、その出発点となるのは、右翼や保守勢力だけでなく、左翼や革新派についても視野に収めることであろう。トランプ支持者のポピュリスト性を理解した上で、それが、左翼や革新派に共有されていたのかを、しかと見ることが重要に思えるのである。ポピュリズムを米国文化として位置づけるには、国民全体への浸透を考慮すべきであるし、またそうした文化が、どのようにして生まれて発展していったのか、その経路をたどることが大切なためである。

思い出せば、トランプを支持する右派の源流ともなったティー・パーティー運動は、2008年に誕生した。その後、2011年には左派のウォール・ストリート占拠運動が台頭し、2016年選挙ではバーニー・サンダースを応援する民主党員によって「社会主義」の訴えが起こる。これらは一例に過ぎない。左派であるか右派であるかを問わず、20世紀のリベラルな秩序の革新を求めて、民衆を糾合する運動が立ち上がったのである。

こうした左右の動きを考える上で参考になるのが、古矢旬氏の指摘である。古矢氏は2008年大統領選挙におけるバラク・オバマの当選と2016年選挙におけるトランプ当選に共通点を見いだす。両者はともに、大統領選挙での大本命であったヒラリー・クリントンを経営的メディアの効果的利用と民衆の支持で打ち破ったのである。古矢氏は、「彼女が代表しようとした連邦政治の基本路線が2008年以降のアメリカの政治社会の実情とそぐわなくなっていった経緯に着目しなければならぬ」としているが、オバマの改革路線とトランプの反国家主義は、同じ土壌に花開いたものと見て良いであろう¹¹⁾。

こうした左右の共通性に目を向けるのは難しい。リベラルな視点を超えて、リベラル陣営の一翼を担っている左派のポピュリスト性を批判することになるためである。もともとアメリカ研究という学問そのものに、研究者の立場は違いこそすれ、自由と民主主義の発展を、歴史の進歩と信じて解釈する傾向がある¹²⁾。民主党支持の左派とトランプ主義者の共通性を浮き上がらせれば、アメリカ研究がその基礎としてきた歴史発展の枠組みを突き崩しかねない。

他面、現在の学術研究の状況を素直に考えると、リベラルな秩序を攻撃する右派のポピュリズムが20世紀末に台頭するのに前後して、アメリカ研究という学問のあり方は大きく変化してきた。「アイデンティティの政治」の広がりを受け、20世紀初頭から米国の体制イデオロギー

となったりベラリズムとは、質の異なる立場から、研究を進める人々が増大したのである。

大学や研究所という学問の世界も、政府や社会運動の政策形成を支える組織である以上、政治情勢と連動して、アメリカを研究する視座が変容するのも当然である。ただ、問題なのは、そうした情勢が反映されるなか、学問に必要な科学的基礎が十全に保てたかどうかである。次に見るように、こうした懸念が、現在、まさに浮上している。

3 グローバル化のなかで生み出された歴史研究の功罪

20世紀末からの学問の変化を考えると、その最大の要因としてあげねばならぬのは、グローバリゼーションである。その波に乗り、学術研究もめざましい成果をあげてきた。海外調査は頻繁におこなわれるようになり、海外との交流も盛んとなった。多様な文化に等しい敬意を払おうとする多文化主義の広がりを受け、人種、エスニシティ、ジェンダーなどについての歴史記述も豊穡になった。

「グローバリゼーション」という言葉が学術用語として初めて使われたのは、1983年の『ハーバード・ビジネス・レビュー』に掲載されたセオドア・ロヴィットの論文からと言われている¹³⁾。ソ連と東欧の民主化の波、そして冷戦終結後の好景気のなかで、歴史研究もまたグローバリゼーションをキー・タームとした研究が流行した。それは日本で「国際化」が叫ばれた時期でもあり、国境や地域を越えた研究が各国でもはやされたのであった。

こうした流行は「トランスナショナル」や「インターナショナル」な視座からの考察を標榜する学術雑誌を新規に生み出した。米国はもちろん、各国の大学で、そうした立場から研究する者を採用するところが次々と現れた。それまでの研究のグローバルな、あるいはトランスナショナルな転回を目指す動向は、アメリカ史全体へと広がっていく。実りある成果を生み出した分野の一つが初期アメリカ史である。カリン・ウルフによれば、30年前とはまったく相貌を異にする建国期の理解が現れ、まったく別の大地と化してしまったかのような植民地社会の様相が描かれるようになったのである¹⁴⁾。

しかし、20世紀末からのグローバリゼーションのなかで生み出された研究には、固有のもろさが存在した。エレズ・マネラが鋭く指摘するように、国境や地域を越える研究が必要な点でコンセンサスが得られていたとしても、それをどう越えるかについてまで、答えが得られたわけではなかった。学問の枠組みが定まらないなか、若手研究者がナショナルな理解を越える歴史を大学で担当するようになったこともあいまって、2010年代に入っても、新しい学問のあり方をめぐり混乱が続いたのである¹⁵⁾。

もちろん、こうした研究動向は米国に限らず、他国にも及んでいた。ここで、日本の状況に目を向けると、米国の学界が新しい動向に敏感に反応し、萌芽的な試みに注力したのに対して、

日本では研究のあり方をめぐって内省に傾きがちで、伝統的な研究スタイルがよく保持されていた。

そうした事情をよく示しているのは、2003年の『アメリカ研究入門』における有賀夏紀氏の文章である。そこでは、「今日のアメリカ研究の中心的要素は、民族・人種、ジェンダー、階級によって異なる集団の文化を尊重し、差別の完全な撤廃を目指す多文化主義である」と指摘した上で、米国アメリカ研究学会の1998年年次大会におけるジャニス・ラドウェイの会長講演が紹介されている。ラドウェイの提唱した、グローバルとローカルを関連させる複雑な視点に立った「文化的社会構造的両側面」からの考察の重要性に、有賀氏は注意を促したのである¹⁶⁾。

2009年の『アメリカ史研究入門』でも、油井大三郎氏が米国の大学におけるエスニック・スタディーズやジェンダー・スタディーズの活性化を指摘したうえで、個別の社会集団ごとにおこなわれた考察を統合的に理解することが大切であるとしている。社会史的・文化史的枠組みの重要性、ナショナリズムの歴史的構築性や文化のハイブリッド性に注目した研究のほか、ボーダー・スタディーズやディアスポラ研究などの紹介があった後、グローバル・ヒストリーや帝国を理解する理論的枠組みに注意が促されている¹⁷⁾。

このように理論の重要性が強調されたのは、日本の大学や研究機関における学術的基礎の堅実さをよく示すものである。しっかりした理論的裏付けがなければ、多様で大量の資料を用いた研究は史的文脈を探ることに失敗する。多文化主義の中核になっている差別根絶の訴えのみが前面に出れば、社会的主流派の専横をスキャンダラスに暴くだけのニュアンスを欠いた平板な叙述になる。要するに、歴史を扱っているものの、歴史研究としての枠組みを欠いた考察にならないための要諦が、日本では早くから説かれてきたのであった。

一方、米国では、まさに、こうした非歴史的研究の横行が問題となる。最近の例を挙げれば、2020年のアメリカ国際関係史学会（Society for Historians of American Foreign Relations）での論争がある。同学会のこの年の年次大会は新型コロナウイルス危機により中止を余儀なくされたが、その大会では、ダニエル・ベスナーとフレデリク・ログヴォルのセッションが早くから注目されていた。

両者はこの年の春に発表した共同論文で、1990年代初頭以降の米国外交史を回顧していた。そこでは、インターナショナル・ヒストリーが強調されるあまり、米国の国内事情に対する適切な配慮を欠いたまま研究する者が増えたと指摘されたのである。そして、ヴェトナム戦争の研究状況を例に、「この戦争をめぐり、あまりに多くの解釈が非歴史的になっている。戦争の成り行きを決めた要因を、現地の人々や国境を越える勢力に、あまりにも大きく割り当てているのである」とした¹⁸⁾。

この論文で強調されたのは、対外政策が生み出され実行される過程において、米国政府が格段に大きな力を持っていたことが、見落とされがちになっていることである。実態を正確に把握しようとするなら、歴史の登場人物に、歴史を動かす力に応じた注目をする必要がある。注目度合いの適切な割り振りが、歴史解釈の中心的作業であると言ってもよい。しかし、近年の研究では米国のエリートを中心に歴史が動くことを否定しようとするあまり、そうした作業を軽視する者があるというのである。

ベスナーとログヴォルは、インターナショナル・ヒストリーという取り組み自体は、その意義を認めている。問題にしているのは、研究者の一部が、自身が抱く価値観で歴史をゆがめていることである。両者は歴史研究の本来のあり方を取り戻すように訴えたのである。

4 学問の危機か、それともパラダイム・シフトか？

外交史は、いまだに政治家や外交官、軍関係者といったエリートの資料を中心に解釈がなされることが多い分野である。それでも、2010年代末になると、人種やジェンダーの問題、他国の現地勢力やNGOの役割を重視するあまり、バランスを欠いた解釈の台頭が問題視されるようになった。

こうした傾向が、米国の内政を対象とした歴史でより強く、またより早く現れはじめたのは当然である。それは、米国国民の形成と成長を描いてきた分野であったからである。建国史では、1990年代には問題化していた。

建国期の社会文化史を描いた作品として今日では古典となっているのが、ゴードン・ウッドが1992年に発表した『アメリカ革命のラディカリズム』である。この著作をめぐりアメリカ史学会（Organization of American Historians）の1993年度年次大会で開催されたセッションでは、ウッドに対する批判が展開された。そのセッションの記録が『ウィリアム・エンド・メアリ・クォーターリー』に掲載されているが、ウッドは批判者への回答の一部で、「・・・批判者たちの言うことをみるかぎり、革命の捉え方がとてつもない時代錯誤に陥っている。過去のアメリカ人に対して、現在の我々のように考えていない、あるいは今日の我々が振る舞っているように振る舞っていないという理由で攻撃しているのである」¹⁹⁾としたのである。

ウッドの著作は、フランス革命に比較して保守的と評されてきたアメリカ独立革命が、デモクラシーの文化を切り開いた点で急進性を備えていたことを解き明かした作品である。一方でそれは、改革劇に登場する人々を、もっぱら白人男性にしていたため、今日的価値観から言えば、白人男性中心主義の制約があると攻撃されたのであった。

21世紀に入っても、ウッド批判は続く。若手研究者がウッドに対して行った攻撃は、鱈淵秀一氏が詳細に紹介しているので、その一部を見ると、『ウィリアム・エンド・メアリ・クォー

タリー』の編集を務めたジョシュア・パイカーは2016年、ウッドのような初期アメリカ史へのアプローチを、視野狭窄と斬って捨てた。「排他的とまではいなくても自民族中心主義」で、「支離滅裂かつ恣意的で、ウッド自身が好む「合衆国の起源」という観点から見ても自滅的」としたのであった²⁰⁾。

このパイカーの発言はブログに掲載されたものである。発言のもととなったのは、ウッドが『ウィリアム・エンド・メアリ・クオータリー』の編集方針を批判して、「この学術誌はもはや合衆国の起源だけを考究するものではなくなってしまった。歴史的GPSのようなものがなければ、迷子になってしまいかねない状況に見える」と述べたことへの反論であった²¹⁾。パイカーは売り言葉に買い言葉とも思える態度で、ウッドの発言に「進んで迷子になってしまえ」と応じたのであった。

鰐淵秀一氏は、感情的な対立とも思える以上のやりとりで、1990年代前半を分水嶺とした研究のパラダイム・シフトを見て取っている。そのシフトは、「『アイデンティティの政治』の影響を受けた研究動向に、大西洋史や大陸史といった広域圏アプローチの興隆が合流したことにより生じた」との見立てである。ウッドも加わっていた建国期の政治文化研究に代わるパラダイムとなったのは、「白人男性中心のナショナルな枠組みに囚われた既存の革命のナラティブを相対化する」ものであるという。先住民や奴隷、女性を前面に出した解釈、また辺境地や後に米国となる地域の外まで含めた空間を考察対象とすることで、ウッドらの解釈を超克することが目指されたと、鰐淵氏は論じている²²⁾。

もともと私は、国民史観や一国中心主義といった歴史研究におけるナショナリズムに否定的であった。2000年に発表した論文では、当時公刊されたアメリカ史の教科書の書評として、国民史・国家史に代わる歴史像を模索すべきと提唱したことがある。そこでは、「人種・エスニシティ、ジェンダーなどの記述を増やしただけでは、「政治と経済を軸とし、文化を付け足しとするかたちでつくりあげられてきた近代の歴史像」を再生産したに過ぎない」と指摘した。何より求められるのは、国民国家の発展を歴史の進歩と捉える近代主義の歴史認識を克服することであり、「自由な主体による創造的政治活動が研究者にとって予想もつかなかった仕方では政治を変えていく姿を描いてゆく洗練した手法」を追求すべきであった²³⁾。

こした私の歴史観のもとになったのは、斉藤孝氏の教えであった。国境を越えた国際政治史を描くことの大切さを説いた斉藤氏は、「どんなに小さいテーマであろうと、それは歴史という巨大な暗黒にスポット・ライトを当てることになる²⁴⁾」と述べている。社会の権力関係の全貌を解き明かす糸口になるのがテーマであって、テーマで新奇さを競うことに意味はなく、権力の実証的解明の貢献こそ重視すべきとの主張である。

そのように歴史を把握する立場から見ると、21世紀にウッドを越えるパラダイムが登場した

とは思えない。新しいパラダイムとされる研究動向のなかで、代表作を選ぶとすれば、それはアラン・テイラーの『アメリカ革命』であろう。この書の書評でウッドは、こうした解釈が「ネイションのインスピレーションになり得るのか」と問いかけた²⁵⁾。

ここでウッドの言うネイションとは米国国民へと成長する人々のことである。ウッドは革命のなかで自由と平等の価値観を身につけた国民がうまれたことを高く評価した。テイラーの著作は、そうした国民が持つ差別的な暴力性に焦点を当てた歴史像を提示したものの、実のところ、自由と平等といった理念が、アメリカ革命で新たに息吹を吹き込まれたことを否定してはいないように、私は思う。考察する対象がより多様なマイノリティを含めるようになったり、考察する地域がより広域になったりしても、米国社会の権力関係の形成と変容をめぐる解釈が変わっていないからである。革命で生まれ、その後に変遷を遂げていく公共の文化を歴史的に理解しようとするとき、現在でもウッドの研究はテイラーの著作以上の重要性を持っている。

この点、新しい研究動向で、どのような権力をめぐる議論がなされているかを見るため、建國期研究でも重視されている帝國的転回の動向を見てみよう。大雑把に言うと、帝國的転回とは経済的分析に重きを置いていた、これまでの帝国主義研究とは違い、文化史的観点から歴史を捉え直すものである。こうした新しい帝国理解は、日本でも貴堂嘉之氏と戸邊秀明氏が2006年の著作でその意義を説いていた²⁶⁾。米国において帝國的転回が何を目指したかは、ポール・クラマーが2016年に『アメリカン・ヒストリカル・レビュー』に掲載した論考に詳しいので、その文章の一部を引用してみよう。

「1990年代末から2000年代はじめにかけての展開で、もっとも注目すべきでありながら、語られることがなかったことの一つは、合衆国のトランスナショナル・ヒストリーと多様な新帝国史研究との深刻な不整合である。後者はポストコロニアル研究、ジェンダー分析、文化史によって、英国、フランス、ドイツ、スペイン、ロシア、日本の歴史学界で豊かに方向付けされたものである。米国の新しいトランスナショナル・ヒストリーを呼びかけたマニフェストを見ると、そこには、アメリカ地域でのヨーロッパの植民地帝国や1898年までの時期に言及する場合を除いて、「帝国」はほとんどまったく見当たらず、皮肉なことに、表面的には主な攻撃対象であった「アメリカ」例外主義を再生産していた²⁷⁾。

このように、ポストコロニアル研究などのカルチュラル・スタディーズの功績を高く評価するクラマーにとって、帝國的転回を目指す研究者が取り組まなければならないのは、米国国民が抱く政府への信条であった。それは、国民が立ち上がり、帝国主義を打破せねばならないという思いである。歴史的に言えば、イギリス帝国の支配を打ち砕いた独立革命の伝統を尊ぶ共和主義の精神であるが、それは米国を他の国と違う例外的な存在と位置づける例外主義、世界を救う特別な使命が米国にあるという独善的発想につながると、クラマーは問題視するのであ

る²⁸⁾。

先に見たウッド批判は、白人男性が中心となった歴史の語りを打ち砕こうとするものであった。クラマーの説く帝國的転回も、グローバルな権力の暴虐性を暴くため、米国国民文化を重視しないように求めている。こうした見解は、ベスナーとログヴォルが外交史で指摘した非歴史的研究を正当化することになりはしないであろうか。白人男性主体の運動であったとしても、また米国に伝統として根付いたナショナリスティックな文化に基づく運動であったとしても、時代の変革に貢献したのであれば、その貢献の意義と全体への影響に応じて、当該社会の文脈での確に位置づけるべきと、私は思う。

この点、ウッドは2009年の著作で、歴史を道具化する非を唱えている。過去の出来事をいま生きる人々に役立つかどうかで判断し、史的な文脈から切り離して時代像を描く姿勢を問題にしたのである。彼は「過去は錯綜したすべてとともに、その時代の文脈で描くべき」と述べている。これはまさに歴史研究の正統的立場であろう²⁹⁾。

5 多文化主義の陥穽——専制への誘惑とポピュリズムの衝動

20年前に国民史観を批判した私が、ナショナリスティックな立場で歴史を解釈するウッドに共鳴する理由は、国民の形成と発展をたどる作業に歴史的意義があると考えためである。イギリス人国家として誕生したアメリカ合衆国に暮らす人々が、幾多の困難に直面しながら、より自由で平等で、開かれた国民秩序を発展させてきたと解釈することに、私は反対しない。アメリカ合衆国の人々は、共和主義理念に支えられて、連邦という新しい単位で公共の枠組みを創造し、その枠組みを北米大陸に拡大していった。このことの世界史的な意義を否定できない。

こうした私の考えのもとになっているのは、多文化主義の自由主義的理解である。1990年代に私が多文化主義に関心を持ったとき、その基礎になったのはチャールズ・テイラーの理論である。ただ、私はテイラーに触れる前に、アイザイア・バーリンの文化多元主義に親しんでおり、テイラーの多文化主義を見るときも、バーリンの影響下にある。そして、この二人の対論が掲載された1994年公刊の『多元主義時代の哲学』は、今日でも読む価値があるものと思う。

そこでバーリンは、テイラーの多文化主義を賞賛する一方で、「テイラーと同意見でも、より心の狭くて、人に意見を押しつけたがる者」を批判している。すべての文化を尊重すべきとする点で、バーリンも多文化主義者と同意見である。しかし、「時代ごと、社会ごとに、正しいとされる理想が存在し、それらは矛盾したものである」と述べ、それら異なる文化間の衝突が政治の力で解決されるなどとは信じないと断言した。そのような解決を目指すのは、フランス革命やロシア革命と同じテロと専制を招くとするのが、バーリンの基本的立場である。社会秩序の抜本的な革新を性急に求めるのではなく、市民が異なる価値観の調和のために責任感と

分別のある行動を取ることを提唱するのである³⁰⁾。

一方、こうした主張に対してテイラーは、バーリンの立場が主流派の道徳哲学よりも、しっかりとした行動規範になると認める。その上で、個人であれ社会であれ生活の様式を変えるために努力することは可能であるし、努力すべきであると応じた。そして、「歴史のなかでのそうしたいくつかの進歩をわれわれは達成してきた」と強調したのである³¹⁾。

国民にせよ国家にせよ、時々の状況のなかで生まれた歴史的なものであり、常に抑圧や差別を引き起こしている。現在生きる人々の自尊心やエンパワーメントのために役立つ事実を発掘するのは良いが、いま生きている集団に寄り添うことを感傷主義的に標榜して、過去に起きた事実を、歴史の文脈を無視して断罪していくことは、歴史研究の態度ではない。ときどきの状況のなか、よりよき社会を目指して努力した人々の営為を、功罪両面で正当に判断することが、正しい多文化主義の立場と思う。

マイノリティに寄り添う姿勢を分別のない形をとった場合、公共の秩序は腐食する。その危険は早くから説かれていた。1991年に『アメリカの分裂』を刊行したアーサー・シュレジンジャーが先駆者である。彼はすべての文化の尊重という意味での多文化主義は認めていた。ただ、エスニシティや人種で分離されたコミュニティができあがり、その分離が永続化することを恐れたのであった。多様な背景を持つ人々が自由に交流することで、米国国民としての公共意識が涵養されることを重視すべきとしたのである³²⁾。

ちなみに、バーリンとシュレジンジャーの交流はよく知られている。政治の世界と深いつながりを持った両者が懸念したのは、マイノリティの擁護の動きが、政府権力の専制的な行使につながることであった。この点、思想史家エルドン・アイゼナハが鋭く指摘するように、異なる文化間の交流を促さないままに、個々の文化を等しく重視するように教条主義的に迫るなら、集権化され規則化された支配を国家が強制的に行うしかなくなってくる³³⁾。

民主主義体制では、人々が自己の属する集団の利益を優先して、国家の専制支配に無関心になる傾向がある。このことを、いち早く見抜いた思想家はトクヴィルであった。まさしく、1950年代以降の権利革命として知られる事態のなかで、米国の国家は専制化の度合いを強めた。

権利革命では、マイノリティの地位と利益を擁護するため、議会ではなく裁判所を通じて法がつくられるようになっていった。これは国民の合意形成という観点から見たとき、議会による多数派の支持獲得を放棄した「専制」的な政策形成の手法なのである。不満を持った主流派の人々がコミュニティの問題は多数決で決すべきであるとして、裁判所を政治的に攻撃するようになったのは自然であった。それは、民主政の文化史を著したロバート・ウィービの言う民主主義勢力同士による「内戦」の勃発であった³⁴⁾。

20世紀末から台頭するアメリカのポピュリズムを考察するとき前提となるのは、政府によ

る専制的支配である。それをもとに右派のポピュリズムが成長するが、実はそれに先行して、民主党左派もマイノリティの権利擁護のために、政府権力の積極的行使を求めようになっていた。1992年の共和党全国大会でパット・ブキャナンが民主党に対する文化戦争を唱えたとき、一面でそれは防衛戦の性格があった。同性愛の権利を実現しようとする民主党に対抗するため、キリスト教徒の結束を促していたからである。ブキャナンらは大統領職を獲得し、議会を支配することで、「正統」なアメリカ文化の擁護を試みたのであった。

ちなみに、現在、米国で国家権力がいかに行使されているのかを観察するとき、興味深い事態が出現している。トランプと民主党では国家機構がどうあるべきかについて見解が真っ向から対立している。しかし、ニコラス・ジェイコブスらの論文によれば、自らの掲げた目標を実現しようと国家権力を積極的に行使する点では、トランプと民主党に違いはない³⁵⁾。見方を変えれば、権力行使ではコンセンサスがあるため、敵対する勢力に政府の要職が掌握されるのを阻止すべく、両者の間で、異常なまでに加熱した選挙戦が戦われるのである。

ポピュリズムとは、国の主権者である人民の権威を持ち出して、腐敗した政治エリートの一掃のために可能な限り多数の人々を糾合しようという運動である。21世紀アメリカのポピュリストは、トランプ主義者であれ、マイノリティの権利を擁護する民主党左派であれ、自己の敵対勢力を圧倒する「専制」的な政府権力の行使を望んで、必死で味方を糾合しようとしていると言って良い。

周知の通り、トクヴィルが民主政下の専制を防ぐものと指摘したのは、人々の自由で自発的な交流、そして市民の結社活動である。そうした専制の防波堤が、いかに米国で失われているのかは、20世紀末には学界で大きく取りあげられていた。2000年に刊行されたロバート・パットナムの『孤独なボウリング』は、詳細なデータを示して、人々が社会参加を忌避するようになったことを明らかにしたのである³⁶⁾。ソーシャル・メディアの普及が、他者との十全な交流のないまま、感情的に自分の意見を吐き出す行為を蔓延させたのは、言うまでもない。

もし、学問の世界で、歴史的文脈を歪めて歴史を解釈しようとしたり、自分とは違う解釈をイデオロギー的に断罪したりするようになっては、研究者もまたポピュリズムに染まっていると言われても、否定のしようがない。なすべきことは、特定の社会集団の価値観を前面に押し出した解釈が真実であるかのように語られるとき、そうしたイデオロギーで隠蔽された出来事の実態を明るみにだし、理性的議論を通じて、より複雑でニュアンスに富んだ解釈を導いていくことであろう。科学的営為を貫いてこそ、学問である。

6 結びに代えて——現代アメリカを理解するために何をなすべきか

この稿の冒頭で述べたとおり、今日のアメリカを正しく理解するためには、グローバルな文

脈が重要であり、先進国全体に広がった多文化主義への反対運動の一つとしてトランプ政治を位置づける必要がある。平然とウソをつき、人種や宗教による対立をあおって、社会の分断を広げるトランプの時代を理解しようとするなら、事実を正しく認識し、適切な文脈に沿って考える態度を堅持せねばならない。

私はあまりに当然なことを述べているのかも知れない。一方、マイノリティに対する差別が横行し、暴動が頻発するなか、冷静な認識を行うことは難しい。そのことをわかったうえでなお、マイノリティに感傷主義的に寄り添う姿勢は拒否すべきと思う。感傷がもとになって事実を歪めた考察を許す潮流があれば、それは、フリードリヒ・ニーチェが嘆いた19世紀後半のドイツと似た状況に陥ってしまうからである。

ニーチェはカルチュラル・スタディーズにも影響を与えた哲学者である。彼は、ドイツ第二帝政の設立を喜ぶ者が、民族の夢が果たされたたと自己満足にひたっているの嫌悪した。そして、真に未来を創造するための奮起を促し、時代に背を向けて考え、行動することが肝要と述べた。「なぜなら、私は、時代が正当に誇りとしている或るもの、すなわち時代の歴史的教養をここではっきりと時代の害悪、疾病、欠乏として理解しようと試みるからであり、それどころか、われわれすべてが身を焼き尽くす歴史熱に罹っており、これに罹っていることを少なくとも認識すべきであると信じるからである」³⁷⁾ と言うのである。

事実を尊び、公共の利益を第一にすべきとする主張は、トランプ時代に入ると、多くの人々が説くようになっていく。政治学界では、特定の社会集団に肩入れする「アイデンティティの政治」の偏狭さを打ち破ろうと、アメリカ社会の問題解決に多様な集団を巻き込む取り組みが進んでいる。アメリカ政治学会の会長ロジャーズ・スミスもその一人である。彼は社会参加が人々に新たなアイデンティティを身につけさせると訴えている。目指しているのは、自由と平等を掲げたアメリカ独立宣言の理念のもと、リベラルな「人民 (Peoplehood)」アイデンティティが育つことである³⁸⁾。個々の社会集団のアイデンティティを超えた「人民」の連帯が、差別主義者のポピュリズムを打破する鍵になると、スミスは考える。

歴史にはあらかじめ定められた進歩の方向はない。進歩とは、個々の状況のなかで生きる人々が、偶然に翻弄されながらつかみ取っていくものと、私は考えている。とくに米国の場合、植民地社会が独立し、イギリス以外からの移民の増大、奴隷制の拡大、先住民の排斥などの様々な出来事を生みだしながら、国の形を整えてきた。このため、その社会は流動的で、常にどう変化するかわからない不安定さを抱えている。

国民意識の形成も、1776年の独立宣言の後、常に合衆国分裂の危機を抱えていたため、未成熟の状態が続いた。南北戦争の前夜には、同じイギリス人国家といっても、北部はアングロ・サクソンの伝統を、南部はノルマンの伝統を引き継いでいるので、分裂するのが当然であると

いう意見も、世論で影響力を持ったのである。また、仔細に米国文化の実態を見れば、一つのイギリス文化が伝播し発展したわけではない。コリン・ウッダードの論じるように、植民地期から存在した地域ごとの文化が、その特徴をとどめながら、今日まで米国内で併存すると見た方が正確なのである³⁹⁾。

アメリカ史とは、イギリスから移植された文化が新世界の状況のなかで単線的に発展したものではない。複数の文化的基層が地域ごとにまだらに積み重なったものであり、安定を欠いて混沌とした状態が平常な多元的世界なのである。

そうであるからこそ、米国社会の経験を探ると、事前には誰も予想がつかなかった形で、人々が新たな歴史のページを開いていった場面に、しばしば出会う。トランプ政治を生み出したポピュリズムが、今後どのようになるかは、わからない。しかし、差別と専制が克服されるべきものであるなら、それらを生み出す原因となった、公共性の腐敗はただされるべきであろう。

そして、学問の世界もまた公共秩序の一部である以上、アメリカ研究でも、堅実なアメリカ理解を得るため、個々の社会集団に注目するとともに、米国全体の公共利益を視野に収めたいうえで、落ち着いた議論を積み重ねていくことが大切であろう。グローバル化のなか、日々増大していく様々な研究成果を前にするとき、そうした成果を共有するための学会活動の大切さを痛感する。文学、歴史、政治経済の専門家が集まってアメリカとは何かを自由に議論し、事実の誤りや適切な社会的文脈を指摘する場が、今以上に必要とされることはない。

強烈な反発にあっているとはいえ、多文化主義的な価値観は、米国や日本といった既存の国家の枠組みを超えて共有されるようになった。そうした価値観のなかで問題のあるものを修正しつつ、基本的人権や人間の尊厳を守るためのグローバルな連帯自体は守っていくことも、アメリカ合衆国の地域研究に専念する者の使命と思う。

ポピュリズムの時代、アメリカの経験を事実に基づき功罪両面で論じることは、政治活動家からもメディアからも退屈と思われるに違いない。保守の人々から見れば、プラグマティックな態度でグローバルな連帯を進めようとするのは、典型的なりべラルの偽善と優柔不断に映るであろう。けれども、アイザイア・バーリンの言うように、仮にそれが真理であるなら、たとえ関心を駆り立てるものでも美しいものでもなくとも十分なのである。

註

*この文章は、科学研究費助成事業（基盤研究（B）「抗争と肅正のアメリカー19世紀北米ポピュリズムの起源をめぐる史的考察」課題番号20H01335）の研究成果である。

*この文章の一部は、2020年11月15日開催の関西アメリカ史研究会大会において「アメリカ現代史研究における時代区分 小野沢透氏の『思想』（2020年第1号）論文への応答として」

のタイトルで報告をおこなった。討論者として登壇いただいた小野沢透氏、司会を務めていただいた倉科一希氏をはじめとして、筆者の報告に貴重なコメントを寄せていただいたフロアの方々に心より感謝申し上げます。

- 1) トクヴィル著, 松本礼二訳『アメリカのデモクラシー』第1巻(下)(岩波文庫 2005年), 410-411頁。
- 2) ロシアでのファシズム思想の広がりや東欧の保守化, そしれそうした動きにキリスト教の伝統主義があることについて, Timothy Snyder, *The Road to Unfreedom: Russia, Europe, America* (New York: Tim Duggan Books, 2018)
- 3) Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America: An Interpretation of American Political Thought since the Revolution* (New York: Harcourt Brace, 1955) [有賀貞訳『アメリカ自由主義の伝統』(講談社学術文庫 1994年)]; Richard Hofstadter, *The Age of Reform : From Bryan to F. D. R.* (New York: Alfred A. Knopf, 1955) [清水知久ほか訳『改革の時代——農民神話からニューディールへ』(みすず書房, 1988年)]
- 4) Theodore J. Lowi, Benjamin Ginsberg, *American Government: Freedom and Power* the fifth edition (New York: W.W. Norton, 1998), p. 464.
- 5) “A Letter on Justice and Open Debate,” in *Harper’s Magazine*. <https://harpers.org/a-letter-on-justice-and-open-debate/> 最終閲覧日 2020年11月3日)
- 6) Sheldon S. Wolin, *Tocquville between Two World: The Making of a Political and Theoretical Life* (Princeton: Princeton University Press, 2001), pp. 140-141.
- 7) 古矢旬『グローバル時代のアメリカ 冷戦時代から21世紀』(岩波新書 2020年)。中野耕太郎『20世紀アメリカの夢 世紀転換期から1970年代』(岩波新書 2019年)
- 8) 佐々木毅「はじめに」佐々木毅編『民主政とポピュリズム ヨーロッパ・アメリカ・日本の比較政治学』(筑摩選書 2018年), 11-12頁; 横山良「Populismとpopulism——アメリカ・ポピュリズム研究のアポリア——」『アメリカ史評論』第35号(2018年), 1頁。なお, 同論文は2017年7月8日に南山大学アメリカ研究センターにおける横山氏の講演をもとにしており, その内容は英文で *Nanzan Review of American Studies* vol.39 (2017) に掲載されていることを付記しておく。
- 9) Michael Kazin, *The Populist Persuasion: An American History* (Ithaca: Cornell University Press, 1995; revised edition 1998; revised edition with a new preface 2017)
- 10) Ronald P. Formisano, *For the People: American Populist Movements from the Revolution to the 1850* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2008); *The Populist*

*Persuasion*の2017年版への序文を参照。

- 11) 古矢旬『グローバル時代のアメリカ』, 239頁。
- 12) アメリカ研究の各国での発展については, 拙稿「アメリカ精神の対外航路」『アメリカ史研究』 no.30 (2007年), 12-21頁。
- 13) Alfred E. Eckes, Jr. and Thomas W. Zeiler, *Globalization and American Century* (Cambridge; Cambridge University Press, 2005), p. 1.
- 14) Karin Wulf, “No Boundaries?: New Terrain in Colonial American History,” *OAH Magazine of History* vol.25, no.1 (January 2011), p. 7.
- 15) Erez Manela, “International Society as Historical Subject,” *Diplomatic History* vol.44, no.2 (April 2020), pp. 188-189.
- 16) 有賀夏紀「アメリカ研究の変遷『タイガー・ウッズの縞模様』に至るまで」五十嵐武士, 油井大三元編『アメリカ研究入門』第3版(東京大学出版会 2003年), 8-9頁。
- 17) 油井大三元「総説」, 有賀夏紀, 紀平英作, 油井大三元編『アメリカ史研究入門』(山川出版社 2009年), 10-14頁。
- 18) Chester Pach, “Much Ado about Nothing New,” *Passport* vol.51, no.2 (September 2020), p.39; Daniel Bessner, Fredrik Logevall, “Recentering the United States in the Historiography of American Foreign Relations,” *Texas National Security Review*, vol.3, issue 2 (Spring 2020), p. 49.
- 19) Gordon S. Wood, “Equality and Social Conflict in the American Revolution,” *The William and Mary Quarterly* vol.51, no.4 (October 1994), p.707.
- 20) 鰐淵秀一「ポスト共和主義パラダイム期のアメリカ革命史研究」『立教アメリカン・スタディーズ』第42号(2020年3月); Josh Piker, “Getting Lost,” *Uncommon Sense the blog* (21 January 2016) (<https://blog.oieahc.wm.edu/getting-lost/> 最終閲覧2020年10月21日)
- 21) Gordon S. Wood, “History in Context,” *The Weekly Standard* (February 23, 2015) (<https://www.washingtonexaminer.com/weekly-standard/history-in-context> 最終閲覧2020年10月21日)
- 22) 鰐淵秀一「ポスト共和主義パラダイム期のアメリカ革命史研究」, 101, 111-112頁。
- 23) 中野博文「二つの政治史」『アメリカ史研究』23号(2000年), 11, 15頁。
- 24) 斉藤孝『歴史学へのいざない』(新曜社 1993年), 118頁。
- 25) Alan Taylor, *Americann Revolutions: A Continental History, 1750-1804* (New York: W. W. Norton, 2016); Gordon S. Wood, “How the American Revolution Worked against Blacks, Indians and Women,” *The New York Times* (6 September, 2016) (<https://www>

- nytimes.com/2016/09/11/books/review/alan-taylor-american-revolutions.html 最終閲覧
2020年10月21日)
- 26) 貴堂嘉之, 戸邊秀明「日米のナショナリズム・国民意識に関する研究史」樋口映美, 中條
献編『歴史の中の「アメリカ」 国民化をめぐる語りと創造』(彩流社 2006年), 382-384
頁。
 - 27) Paul A. Kramer, “Power and Connection: Imperial Histories of the United States in the
World,” *The American Historical Review* vol. 116, no.5 (December 2011), pp. 1359-1360.
括弧内は筆者。
 - 28) *Ibid.*, pp.1390-1391.
 - 29) Gordon S. Wood, *The Purpose of the Past: Reflections on the Uses of History* (New York:
The Penguin Books, 2008), pp. 8-10. 引用は10頁から。
 - 30) Isaiah Berlin, “Introduction,” James Tully, ed., *Philosophy in an Age of Pluralism: The
Philosophy of Charles Taylor in Question* (Cambridge: Cambridge University Press,
1994), pp. 1-3.
 - 31) Charles Taylor, “Charles Taylor Replies,” *ibid.*, p. 214.
 - 32) Schlesinger’s letter to Alan Singer on 3 December 1993 in Andrew Schlesinger and
Stephen Schlesinger, eds., *The Letters of Arthur Schlesinger, Jr.* (New York: Random
House, 2013), p. 543.
 - 33) Schlesinger’s letter to Mary Haws on 2 March 1893, in *ibid.*, p. 472; Eldon J. Eisenach,
*The Next Religious Establishment: National Identity and Political Theology in Post-
Protestant America* (Boston: Rowman & Littlefield, 2000), pp. ix-x.
 - 34) Robert H. Wiebe, *Self-Rule: A Cultural History of American Democracy* (Chicago: The
University of Chicago Press, 1995), pp. 223-246.
 - 35) Nicholas F. Jacobs, Desmonde King, Sidney Milkis, “Building a Conservative State:
Partisan Polarization and the Redeployment of Administrative Power,” *Perspective on
Politics* vol.17, no.2 (June 2019), pp. 453-469.
 - 36) Robert D. Putnam, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*
(New York: Simon and Schuster, 2020) [柴内康文訳『孤独なボウリング 米国コミュニ
ティの崩壊と再生』(柏書房 2006年)]
 - 37) F・ニーチェ著, 小倉志祥訳『反時代的考察』(ちくま学芸文庫 1993年), 120頁。
 - 38) Rogers M. Smith, “What Good Can Political Science Do? From Pluralism to Partnerships,”
Perspectives on Politics vol. 18, No. 1 (March 2020); Rogers M. Smith, *That Is Not Who*

We Are!: Populism and Peoplehood (New Haven: Yale University Press, 2020)

- 39) Ritchie Devon Watson, Jr., *Normans and Saxons: Southern Race Mythology and Intellectual History of the American Civil War* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2008); Colin Woodard, *American Nations: A History of the Eleven Rival Regional Cultures of North America* (New York: Viking, 2011) [肥後本芳男ほか訳 『11の国のアメリカ史 分断と相克の400年』 上下 (岩波書店 2017年)]

American Historical Studies in a Populist Age:
Sentimentalism, Anachronism, and the Quest for
the Historical Profession

NAKANO Hirofumi

Under the Trump administration, the U.S. landscape has dramatically changed. Liberal America, which Americanists all over the world were fascinated with, seems to go away. This shifting political climate encourages academicians of the American Studies to reexamine their theoretical perspective. One of the most urgent issues is to acquire a clear understanding about the increasing power of movements and leaders labeled as “populist.” My article reviews recent historical literature, and outlines a methodological approach that properly situating populism in an American historical context.

In the 1990s, historians have taken a methodological turn towards a more egalitarian global society. Identity politics fostered by a body of philosophical works helped them to accept new moral codes to describe American experience. In essence, this trend of the historians was created within a liberal creed, for their goal was to liberate oppressed minorities, such as colored, women, sexual minorities and so on. It has had a beneficial effect upon the scholarship.

Nevertheless, the methodological turn with the help of identity politics produced two serious problems. First, the turn contributed to create new educational posts of global history in universities and colleges. Without scholarly methods enough to differentiate their own teaching subject from other established fields, some global historians keep away from solid analysis and put a focus almost exclusively upon minorities' suffering. Second, with this

中野博文

minority-oriented writing, traditional respect for a well-balanced interpretation was losing ground to a sense of indignation at social injustice. Sentimental narrative often ignores a historical context, and innocently introduce present-day ideas to the past. In other words, nowadays, historical writing tends to become ahistorical. In Japan, a journalistic attitude is hated in an academic circle, for the methodology have been taken seriously. Meanwhile, historians in the United States witnessed anti-historical, anachronistic works produced by sentimental writers.

Facing irrationally populist outbursts under the Trump administration, scholars of American studies should be determined to conform to their professional norms.. The most important thing is that Trump's right-wing populism has a common ground with Democrats' minority-oriented activism. Both of them avoid a scientific inquiry into a historical occurrence, and easily overemphasize convenient facts.

The scholars who examine 21st century populism, have to soberly sail against a turbulent current of this divided and polarized America. If they yield to sentimentalism and give up their pursuit of the truth, they lost the *raison d'être* of their own. The idea and ideal of the objectivity is at the center of their profession. It's self-evident that maintaining an anti-populistic attitude toward the U.S. historical experience is one of their obligations, and an essential way to illuminate American populism.

亡霊的な表象体 ——『若草物語』とごっこ遊び

本 岡 亜沙子

はじめに

多種多様な遊びに興じる少女を描いた類例の少ない19世紀アメリカ小説の一つにルイーザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott, 1832-88) の『若草物語』 (*Little Women, or, Meg, Jo, Beth, and Amy*, 1868-69) が数えられる。そのなかで彼女たちは、カードゲーム¹ やチェス、スケート、ごっこ遊び——たとえば小説の登場人物になり切る遊びや人形ごっこ——などに親しんでいる。

批評家アン・K・フィリップス (Anne K. Phillips) は本作の魅力を遊びという点に感じ取ってはいるものの、本稿で注目していくごっこ遊びとその他の遊びを混同している点には課題が残る。たとえばフィリップスは、「彼女らの遊びのほとんどは、家庭内で大人が果たす義務をメグ、ジョー、ベス、エイミーに経験させるものではない。」 (Phillips 413) と述べ、その後の議論でも四姉妹のごっこ遊びに内包された社会規範を度外視している。しかし、母親になった自分を想像している子どもが母親の行動のルールに従うように、ごっこ遊びの特徴はなによりその社会性の強さにある (Vygotsky 10)。

社会規範を内包するごっこ遊びの特徴については、次に挙げる哲学者・美学者のケンダル・ウォルトン (Kendall Walton) によるごっこ遊びの定義にも示されている。

表象体 (representations) は、ごっこ遊びの小道具 (props) として働くという社会的機能を備えた物体である。表象体は、いろいろな想像を促したり、ときには想像のオブジェクトとなったりもする。小道具とは、慣習化された生成の原理の力によって、想像の仕方を命令する物体である。想像するように命令される命題は、虚構的である。与えられた命題が虚構的であるという事実は、虚構的真理である。虚構世界は、虚構的な諸真理の集合と結びついている。虚構的なものは、与えられた或る世界——例えば、ごっこ遊びの世界や、表象的藝術作品の世界——において虚構的なのである。(ウォルトン 70, 強調は原文)

ウォルトンによれば、ごっこ遊びは、表象体が発する社会規範や役割を鑑賞者が引き受け反

復的に演じる遊びのことを意味する。『若草物語』に登場する四姉妹の「お母さまごっこ」(Alcott, *Little Women* 40) を例に挙げると、姉は、表象体である妹を子どもに見立て、大人から世話をされる役割を与える。他方、姉はその子どもを支える良き母という役割を引き受ける。母親にまつわる時に不可視で、時に虚構でもある文化背景や社会規範を参加者全員で共有することが、ごっこ遊びの成立には不可欠となる。

先の引用において加えて重要なのは、ウォルトンがフィクション作品の鑑賞行為をごっこ遊びの一種と捉えている点である。彼によれば、読者というのは、書き手と想像力を共有し、共通の了解に沿いながら（作品の虚構空間に織り込まれたルールを引き受けながら）作品を読み進めていくものだからである。ウォルトンの論に沿っていくとすれば、果たして『若草物語』にはどのような役割が織り込まれ、どのように読者にそれを提示しているのか。本稿では、『若草物語』におけるごっこ遊びに光を当てることで、出版より150年以上経った現在でも本作が読み継がれている理由を探ってゆきたい。

1. 物語内物語としての『天路歷程』

「『天路歷程』ごっこ」(“Playing Pilgrims,” 第1章), 「重荷」(“Burdens,” 第4章), 「バス、美の宮殿を見いだす」(“Beth Finds the Palace Beautiful,” 第6章), 「エイミーの屈辱の谷」(“Amy’s Valley of Humiliation,” 第7章), 「ジョー、魔王に遭う」(“Jo Meets Apollyon,” 第8章), 「メグ、虚栄の市に行く」(“Meg Goes to Vanity Fair,” 第9章), こうした章題を抜粋しただけでも分かるように、『若草物語』の物語構成はジョン・バニヤン(John Bunyan, 1628-88)の古典的寓話『天路歷程』(*The Pilgrim’s Progress*, 1678-84)になぞらえたものである。²『天路歷程』において、聖書を読み、自分の住む「滅亡の町」が神の裁きに遭うと知った主人公クリスチャン(Christian)は、家族の反対を押し切り、神の救いを求めて「天の都」を目指す。他方、『若草物語』では、父から届いた手紙を読んだ娘たちは、各自、仕事に励み、欠点(虚栄心、激情、臆病、高慢)を克服することで、彼の希望に沿った「小婦人」(“little women” 17)になるよう努める。そして、この「小婦人」になるための手段として用いられているのが、母の提案する『天路歷程』ごっこである。

“We never are too old for this, my dear, because it is a play we are playing all the time in one way or another. Our burdens are here, our road is before us, and the longing for goodness and happiness is the guide that leads us through many troubles and mistakes to the peace which is a true Celestial City. Now, my little pilgrims, suppose you begin again, not in play, but in earnest, and see how far on

you can get before father comes home.” (18)

重荷を背負う娘たちは「落胆の沼」「屈辱の谷」「虚栄の市」など、クリスチャンと同じルートを通り、敵と戦いながら「天の都」を目指してゆく。だが、双方の巡礼には相違点が大別すれば二つある。一つは、批評家エリザベス・カイザー (Elizabeth Keyser) が指摘するように、人格の向上による父親からの承認を目的に彼女たちが巡礼している点である (Keyser 63)。そのことは、母の提案を受けた長女マーガレット (Margaret March, 以下メグ) が、その遊びを “only another name for trying to be good” (Alcott, *Little Women* 18) と言い換えていることから明らかであろう。つまり、マーチ四姉妹は、物理的な労働 (家事手伝いや家庭教師、勉強) と各自の性格上の欠点をクリスチャンの抱える重荷に喩え、金持ちを羨やむことなく自分の仕事に勤しむよう心がけてゆく。このように、彼女たちの巡礼はあくまで生活に根差したものであるため、巡礼ルートは自宅や友人知人宅、学校など生活圏内に限られ、登場人物も自分たち自身や家族、友人知人のみとなっている。具体的に言えば、自分たちをクリスチャンに、母親を落胆の沼から彼を救ってくれたヘルプ (Help) に、美の宮殿前にたたずむライオンを隣家に住む強面の富豪ジェームス・ローレンス (James Laurence, 以下ローレンス氏) にと、姉妹は各々の性格や行動に照らして『天路歷程』の登場人物名をあてはめているのである。

そうした生活に密接した巡礼は、その途中で彼女たちを危険に晒すものではない。『天路歷程』のクリスチャンのように沼に転落して全身泥だらけになることもなければ、ライオンとの遭遇や、巨人との戦いやそれに続く捕囚などの数々の困難や事件に遭遇することもないのである。むしろ、ライオンに喩えられるローレンス氏自ら、彼女たち巡礼者の自宅に食事やピアノといった贈り物を届けるといった、姉妹にとっては逆転現象に思えることまで現実世界では起きている (26, 55)。このように、姉妹の『天路歷程』ごっこでは、原作の枠組はそのままに、内容が “the thoroughgoing domestication” (Rasmussen 601) として改変され、巡礼の目的が神からの救いではなく父からの承認 (「父が帰って来る前に」) にすり替わっている。³

『天路歷程』ごっこの特徴の二つ目は、姉妹が世俗的成功を目指して巡礼している点であろう。作品中盤に当たる第13章「空中楼阁」(“The Castle in the Air”) で、近所の丘を『天路歷程』の「楽しき山」に喩え登った姉妹が、ローレンス氏の孫息子セオドア (Theodore Laurence, 以下ローリー) とともに、空中楼阁を語り合う場面がある。ここで三女エリザベス (Elizabeth, 以下ベス) は、天使に歓迎され、門番も扉もない天の都にクリスチャンが着く場면을想像している (117) のだが、原作では、その都に入るための条件が巡礼者に課せられている点には注意が必要であろう。すなわち、クリスチャンのように招待状を持つ者は、ヘルプの派遣や、罪の赦し (重荷の取り除き)、懷疑城脱出を叶えた「約束と呼ばれる鍵」(Bunyan

94) の授与など、さまざまな神の加護の下に巡礼をし、最終的に天の都入りを許される。ところが、招かれざる巡礼者は、かりに天の都に辿り着いたとしても、その直後に地獄へ通じる道に連行されるのである。そうであるとすれば、巡礼者が全員救われるベスの『天路歷程』ごっこからは、原作に描かれた選民思想が抜け落ちている。

さらに興味深いのは、『若草物語』の巡礼者に与えられる「鍵」の表象である。彼女らがこれを将来の成功を叶える手段に読み替えている場面を紹介しよう。以下は、極秘で自作を出版社に持ち込み、雑誌掲載の知らせを待つ作家志望の三女ジョセフィン (Josephine, 以下ジョー) が発したセリフである。

“I want to do something splendid before I go into my castle,—something heroic, or wonderful,—that won’t be forgotten after I’m dead. [. . .] I think I shall write books, and get rich and famous; that would suit me, so that is *my* favorite dream.” [. . .] “I’ve got the key to my castle in the air; but whether I can unlock the door, remains to be seen,” observed Jo, mysteriously. (Alcott, *Little Women* 117–18, 強調は原文)

ジョー以外の参加者たちも、絵筆で画家として大成すること、大学進学を経て海外で著名な音楽家になること、美貌を生かして結婚し幸せな家庭を築くことを夢みている。ここでも彼らは、表象体である『天路歷程』が発するメッセージや役割をそのまま受け取るのではなく、恣意的に改変していると言えよう。

先行作品の宗教性や暴力性が『若草物語』において抑制、もしくは削除されている点については、批評家の中でも賛否が分かれている。⁴ たとえば、批評家ジョン・マタソン (John Matteson) は、“the character formation that takes place in kitchens and parlors is every bit as important as the soul-making that takes place during Christian’s masculine odyssey” と、“a realistic, female-dominated setting” (Matteson, *Eden’s* 339) へと書き換えられた『若草物語』を好意的に評価している。他方、『若草物語』出版時の書評の中には、同書が『天路歷程』の宗教的要素を軽視しているとして酷評するものもある。

We dislike the despiritualizing in it of Bunyan’s great Allegory. No child should be taught any less evangelism than that. The fight with Apollyon is reduced to a conflict with an evil temper, and the Palace Beautiful and Vanity Fair are made to be only ordinary virtues or temptations. We cannot commend the book as its quality merits. It is without Christ, and hence perilous in proportion to its assimilation to

Christian forms. Don't put in the Sunday School library. (*Zion's Herald* 3)

この書評を載せたのはボストンのメソジスト派による雑誌なのだが、マーチ四姉妹による古典のアレンジは、このような禁書扱いを受けてしまうほど大胆なものであった。では、この延長線上において、その物語内物語を抱える『若草物語』やその作者オルコットの解釈も、鑑賞者（読者）によるごっこ遊びのなかで恣意的に捉えられている可能性はないか、次節で検証してゆきたい。

2. 虚像としての『若草物語』

ごっこ遊びは、鑑賞者と表象体が社会規範などを相互補完的に顕在化させながら演じられるものである。これは、本稿のはじめにでも書いた特徴ではあるが、改めて確認しておこう。人形ごっこが成立するためには、母親役を引き受ける子どもが、人形に子どもという役割を与え、大人から世話される子の振る舞いをさせることが必要となる。もし双方のいずれかが役割を逸脱、もしくは放棄すると、それは子どもではなくただの物体になってしまう。芸術作品の鑑賞行為も同様で、作品が喚起する物語を鑑賞者（読者）が引き受け読まない限り、絵画は画布上に付いた絵具の染みの配置、小説はページ上に並ぶ単なる言葉と化す（ウォルトン 38）。つまりウォルトンは、文学作品が表象体として機能する可能性をも示しているのである。

そこで本節では、このような文学作品を表象体としたごっこ遊びについて考えていく。その特徴を捉えていくうえでまず取り上げたいのが、三女ベスの人形遊びである。

There were six dolls to be taken up and dressed every morning [. . .]. Not one whole or handsome one among them; all were outcasts till Beth took them in [. . .]. Beth cherished them all the more tenderly for that very reason, and set up a hospital for infirm dolls. [. . .] [A]ll were fed and clothed, nursed and caressed, with an affection which never failed. One forlorn fragment of *dollanity* had belonged to Jo; and, having led a tempestuous life, was left a wreck in the rag-bag, from which dreary poor-house it was rescued by Beth, and taken to her refuge. (Alcott, *Little Women* 38, 強調は原文)

人形を子どもに見立てるベスは、母親として読み聞かせをしたり、洋服を着せたり、子守唄を歌ったり、優しい言葉をかけたりしている。ここで目を向けるべきは、dollとhumanityを組み合わせたオルコットの造語dollanityであろう。この言葉は、ベスの人形遊びは人形自体を対

本岡亜沙子

象にしたものではなく、それに内包された物語であることを端的に表しているからである。言い換えると、怪我や病気、持ち主との離別など彼女が人形に投影した物語をベスは母親の役割を引き受け慈しんでいるのであり、人形そのものはその物語を補強する外殻としての小道具に過ぎない。

ベスが人形に付与する孤児や病弱な子どもという物語は、ディケンズの作品を始めとする19世紀の英米文学作品でよく描かれたものである (Sanders 41-44; Hetrick 58-62)。その代表例はディケンズの『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1841) に出てくる孤児ネル・トレント (Nell Trent) であろう。祖父は孫娘の将来を案じ、一攫千金を夢みて賭博に手を出すも借金をこしらえてしまう。そのような祖父を懸命に支える彼女も、彼との放浪生活の果てに衰弱死してしまう。『若草物語』のベスも同様に、家族や近隣住民を支えながらも早逝するために、ネルとの類似性を指摘されることもある⁵。

また、ローリーも病弱な孤児として『若草物語』に登場する。マーチ母娘は、彼と知己となる以前に、彼の境遇に憶測を巡らせ “how romantic!” (51) と話を弾ませていた。こうした噂話に花が咲くのも、孤児や病弱な子どもを感傷的に描く物語に彼女たちがなじみを持っており、か弱い (vulnerable) 子ども表象をローリーにも反復させているからではないか。そうであるとすれば、ベスが人形に与えた物語も、個別の人形から喚起されるイメージというよりも既存のものであると捉えられる。

そしてそれを敷衍すれば、『若草物語』の読者も、作品自体ではなく、物語内物語を読んでいる可能性も多分にある。批評家マタソンによれば、『若草物語』には60以上の先行作品が織り込まれているのだが (Matteson, “Little”), ディケンズやシェイクスピアの作品、ならびに前節で述べた『天路歷程』はその代表的なものである。

たとえば、マーチ四姉妹が手がける家庭新聞『ピクウィック雑報』(*The Pickwick Portfolio*) は、ディケンズの『ピクウィック・ペーパーズ』(*The Pickwick Papers*, 1836-37) を手本にしたものである。文学好きなジョーが詩を愛でるオーガスタス・スノッドグラス (Augustus Snodgrass) を演じるなど、四姉妹は各々の性格に合ったキャラクターになりきって家庭新聞作りに励んでいる (85-91)。

同様に、シェイクスピア作品も多分に顔を覗かせる。特筆すべきは、ジョーが執筆し、姉妹と演じた『魔女の呪い、悲歌劇』(*The Witch's Curse, an Operatic Tragedy*) であろう。これはシェイクスピアの『オセロ』(*Othello*, 1622) に登場するロドリゴを中心に据えた改編劇である。ロドリゴが恋人ザラ (Zara) をめぐる恋敵との関係に翻弄されながらも、最終的には彼と恋人が結ばれる (Alcott, *Little Women* 14-15, 23-25)。

また、たとえば、第一幕の最終場面で、大鍋を火にかける魔女がその後の展開を予告する場

面があるが、これは『マクベス』(*Macbeth*, 1623)を連想させるものである。そして、ジョーの創作劇には、森の妖精から手に入れた恋の媚薬を使い、ザラの心を奪おうとロドリゴの宿敵が企む場面もある。これは『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*, 1600)からの着想である。さらに言えば、縄梯子を使って塔の上階にいる恋人とロドリゴが会う場面は『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*, 1597)の借用となっている。極めつけは、二人の密会を知り激怒したザラの父親が、娘に尼寺に行くよう促した場面で、これは『ハムレット』(*Hamlet*, 1603)におけるハムレット(Hamlet)がオフィーリア(Ophelia)に言い放った台詞“Get thee to a nunnery”(*Hamlet* 243, 244)と似ている。悲恋の結末を迎えるかと思いきや、ジョーの改変作では、この父親が『から騒ぎ』(*Much Ado about Nothing*, 1600)で男女の縁結びを試みるドン・ペドロ(Don Pedro)に設定されているためか、ロドリゴのカップルも最終的には結婚に至る。

ここで興味深いのは、その『魔女の呪い、悲歌劇』の練習風景を観た妹ベスが、“I don't see how you can write and act such splendid things, Jo. You're a regular Shakespeare!”(*Alcott, Little Women* 15)と姉ジョーに感想を漏らしている点である。同様に、若手作家の誕生を期待するローリーも、“Hurrah for Miss March, the celebrated American authoress! [. . .] Why, Jo, your stories are works of Shakespeare, compared to half the rubbish that is published every day. Won't it be fun to see them in print; and sha'n't we feel proud of our authoress?”(124)と、ジョーの作品が第一級であることをシェイクスピアに喩えて賞賛している。しかし、ジョーの作品がシェイクスピアからの寄せ集めであることに鑑みると、「ほんとうにシェイクスピアね！」や「君の物語はシェイクスピアの作品だ」という彼らの褒め言葉は、途端に皮肉な様相を帯びてくる。ジョーの作品自体ではなく、そこから浮かび上がってくるシェイクスピア作品を楽しんだベスやローリーの姿が前景化してくるからである。

こうした物語内物語のなかでもいっそう際立っているのが『天路歷程』である。⁶本作が『若草物語』の骨格を成していることは前節で確認したが、そうであるとすれば、ジョーの作品を通してシェイクスピアを観劇するベスやローリーと同様、『若草物語』の鑑賞者(読者)もそれ自体ではなく、そこに随所に織り込まれた物語内物語を受容しているのではないか。その証拠に、本作出版100周年を祝すコーネリア・メイグス(Cornelia Meigs)の紹介文は、終盤から『天路歷程』の紹介文に様変わりしているのである。

Young readers of our own time may occasionally be puzzled by the chapter heads, which had direct reference to Bunyan's book [. . .]. There is no more terrible battle described in English literature than that when Christian is attacked by Apollyon

which his darts of temptation. Young readers will go on, however, and look back at the end to see how a stout will and firm belief in the good can get the better of adversity. There are a multitude of figures in *Pilgrim's Progress*, so many that we can usually find the likenesses of ourselves and our friends in it. One need not look far to see that Louisa's counterpart was Mr. Valiant-for-truth. (Meigs xiv)

この紹介文に顕著に認められるように、『若草物語』では物語内物語の存在が浮き彫りとなってくる。この逆転現象は、『若草物語』が、先行作品を鏡として、読者の期待の地平が反射されてできた作品であることを明らかにしてくれるものであろう。

単独では先行テキストの後景に退きやすい『若草物語』ではあるが、その出版以降、続編やスピンオフ作品が数々世に送られてゆく。プロットの連続性とテーマやキャラクターの反復性を特徴とするシリーズ本 (Newland 192) が大量に創作・出版されることで、「家族ほど美しいものはない」(Alcott, *Little Women* 375) に代表される家庭讃美の世界観が漠然とではあるものの形成されていき、次第に強化されていったわけである。

さらに興味深いのは、こうした反復によるイメージ形成に、オルコット自身が積極的に加担していたことだろう。たとえば、1854年2月に書かれた彼女の日記には、長期講演の旅からわずか1ドルしか持たず帰宅した父親ブロンソン・オルコット (Bronson Alcott, 1799-1888) を、妻が温かく迎えたエピソードが残されている。以下は、その“dramatic scene” (Alcott, *Journals* 71) を見た娘ルイザの感想である。

I shall never forget how beautifully Mother answered him, though the dear, hopeful soul had built much on his success, but with a beaming face she kissed him, saying, “I call that doing *very well*. Since you are safely home, dear, we don't ask anything more.”

Anna and I choked down our tears, and took a little lesson in real love which we never forgot, nor the look that the tired man and the tender woman gave one another. (71, 強調は原文)

夫婦愛をことさらに持ち上げる一場面であるが、これはオルコットによる脚色であると批評家キャロル・ゲイ (Carol Gay) は指摘し、試算のうえで、実際にブロンソンが手にした講演料は少なくとも284ドルで、諸経費を引いても1ドルしか手元に残らなかったという娘ルイザの記述を疑問視する。その矛盾を突いたうえで、娘ルイザが両親の愛情を強調する物語を日記

にしたためたのは、家庭小説家として習作を積んでいたからだと言われている（Gay 187）。

とは言え、家族礼賛の児童文学を執筆することはそもそもオルcottの本意ではなかったという点は指摘しておくべきであろう。それは、“being tired of providing moral pap for the young. Long to write a novel” (Alcott, *Journals* 204) という彼女の日記を読めば明らかである。しかし、児童向けの“pot boilers” (192) は、比較的労力と時間をかけずに書くことを作者に許し、生活費を稼ぎたい彼女に稿料を保証するものでもあった。そうした公算もあり、彼女は『若草物語』シリーズを書き続けていたのだろう。そのひとつ『ジョーおばさんのお話かご』 (*Aunt Jo's Scrap-Bag*, 1872-82) は、『若草物語』のジョーが小説家になる夢を叶えたという設定で出版された6巻からなる短編小説集である。その第1作の巻頭言で、ジョーが読者との関係を擬似家族に喩えて表現していることは注目に値する。

As grandmothers rummage their piece-bags and bundles in search of gay odds and ends to make gifts with which to fill the little stockings that hang all in a row on Christmas Eve, I have gathered together some stories, old and new, to amuse the large family that has so rapidly and beautifully grown up about me. (Alcott, *Aunt n.p.*)

児童小説を金儲けの手段と考えていた彼女が、この序文では読者との親密な絆を大事にする作家のように振る舞っている。こうした自己演出もあり、オルcottは家庭小説家としての名声を得て、「子どもたちの友」とまで銘打たれてゆくことになる (Cheney)。⁷

ここで注意が必要となるのは、こうして形成されてゆく作家像・作品観に対するオルcott自身の振る舞いであろう。それと言うのも、彼女はそういったイメージが一人歩きすることを歓迎していなかったからである。具体的に言うと、『若草物語』が自伝的作品であり、ジョーのモデルが自身であることを彼女は日記や手紙でたびたび認めていたものの (Alcott, *Journals* 166; Alcott, *Letters* 194; Bok 1), そのキャラクターに飲み込まれることには強い抵抗を示している。『若草物語』の愛読者に宛てた1873年10月2日付の手紙を抜粋してみよう。

Why people *will* think “Jo” small when she is described as tall, I don't see: and why insist that she must be young when she is said to be thirty at the end of the book? After seeing the photograph it is hardly necessary to say that “Jo” and L. M. A. are *not* one, and that the latter is a tired-out old lady of forty-two with nothing left

of her youth but a yard or more of chestnut hair that *won't* turn gray, though it is time it did. (Alcott, *Letters* 185-86, 強調は原文)

「オルコット＝ジョー」を自身で吹聴しておきながら、それを他者から指摘されすぎると嫌悪感を露わにする。この手紙はそのようなオルコットの複雑な心境を物語っている。しかし、彼女がどれほど抗っても、鑑賞者（読者）によるごっこ遊びが反復される状況では、ジョーが浮上し作家の存在感が薄れるという現象は回避できなかったのかもしれない。そして、こうした構図は、物語内物語が前景化し『若草物語』が後景に退く物語自体の構図と皮肉にも一致するのである。

ここで参照したいのは、批評家クリスティーナ・ウエスト (Kristina West) による『若草物語』のファンフィクション論 “Who Owns *Little Women*?: Adapting Alcott in the Twenty-First Century” である。この論考のなかでウエストは、本作におけるオリジナリティの不在を指摘している。

After all, the reading of these adaptations and retellings highlights the impossible, ghostly, and retrospective idea of the whole that texts such as *Little Women* are often read to embody. In this absence of stability and troubling of origin, the question of who owns *Little Women* cannot be resolved. Yet, in the very ongoing tide of adaptation and reimagining, the value of Alcott's work is retained and assured. (West 419)

ファンフィクションの書き手は『若草物語』をもとに物語を二次創作してゆく。しかし、その原作自体がたとえば『天路歷程』のファンフィクションであった場合、『若草物語』は二次創作の基準枠としての役割を果たさなくなる。ウエストの議論は、先行作家からオルコットへ、オルコットから読者へと続く、原作に対する読者の反応を分析したものであり、作品自体が喚起する文化的・歴史的コンテクストをごっこ遊びの視座から論じる本稿とはアプローチが異なるものの、『若草物語』自体の空白を指摘する点では論が一致している。そしてそれを敷衍すれば、物語内物語の後景に退く『若草物語』という作品は、150年以上もの長きにわたって版を重ねているものの、何が特徴かと言われると何が特徴か分からない、そういう亡霊的な表象体と言えるのではないか。

おわりに

本稿では、表象体が発する文化的・社会的規範や役割を鑑賞者が反復的に演じるのがごっこ遊びであると措定したうえで、『若草物語』がどのような役割を読者に喚起していたのかを探ってきた。ジョーたち姉妹が『天路歷程』のプロットを単純化して『天路歷程』ごっこに興じていたように、『若草物語』の読者も、物語内物語や作家オルコットが流布した作品・作家のイメージを受容し反応を示していた。そしてその反応が、『若草物語』の後続作品群の執筆・出版や、家庭小説家という作家像の強化に結びついていたということになる。

こうした作家—作品—読者のあいだの循環構造の中で作家オルコットにキャラクターが憑依してゆくのだが、この状況は、『若草物語』が物語内物語の後景に退く状況と奇妙にも重なる。つまり、読者は『若草物語』を読み進めるうちに『天路歷程』やディケンズ、シェイクスピアの作品を連想せずにはいられなくなるわけである。『若草物語』を読んでいると『天路歷程』など他のテキストが浮かび上がってくるが、一方で、先行テキストを読んでいると『若草物語』の一場面が浮かび上がってくることもある。⁸ そのようなある意味で亡霊的な性質を、本作は持ち合わせている。

そうした意味で最後に着目したいのが、オルコットの未発表である扇情小説が20世紀半ば以降に発見されたことである。

The quotation is not by a writer associated with the gore of Gothic romance but by the future author of a domestic novel known to all the world as *Little Women*. [. . .] The fact that Louisa May Alcott—“The Children’s Friend”—let down her literary hair and wrote blood-and-thunder thrillers in secret is in itself a disconcerting if titillating shock to readers in search of consistency. “(Stern vii)

家庭小説の書き手が扇情小説を書いていたという意外性が読者や批評家の期待の地平から外れ、新たなオルコット像を模索する研究が盛り上がりを見せた。⁹ 家庭的でない物語という参照項が現れたとき、『若草物語』や作家の存在感が増した本事例は、作品や作家の解釈が今後変わってゆく可能性を多分に示してくれている。

註

本稿は、日本イギリス児童文学会第48回研究大会（2018年12月2日、於大阪樟蔭女子大学）のシンポジウム「『若草物語』——150年目の再検討」で発表した内容に、修正を加えたもので

ある。

- 1 『若草物語』ではAuthorsという名のカードゲームが紹介されている。これは、札に記された引用からそれを書いた作家名を当てる遊びで、1860年発売されたものである。紹介される英米作家13名のうち、唯一の女性作家がオルコットである（Guerra 179-82）。
- 2 『若草物語』の序文も、若干の変更はあるものの『天路歷程』第二部の冒頭から大幅に引用されたものである。
- 3 『天路歷程』は二部構成になっており、クリスチャンの巡礼が第一部に当たる。第二部では、夫の言葉を疑った自身に良心の呵責を覚えていた妻が、夫のいる天の都から招待状を受け、息子4名と隣人女性1名を伴い、夫のもとへ向かう。マーチ四姉妹は第一部に登場するクリスチャンになりきっているものの、家長からの承認を求めるプロットという点では第二部の内容に近い。
- 4 『天路歷程』の児童向け改変作が19世紀の英米両国で人気を博していた点については、歴史家ガレン・K・ジョンソン（Galen K. Johnson）の論文（Johnson 7-9）やパニヤン研究者のシャノン・マレー（Shannon Murray）のもの（Murray, “Playing” 91-98）に詳しい。
- 5 ネルとベスを重ね合わせる論考については、たとえばMasur 70-75やEvans 32を参照。
- 6 『天路歷程』の枠組みがなければ、『若草物語』は相互に関連性の薄い断章の連なりとなっているとの指摘もある（Matteson, *Eden* 337-38）。
- 7 「子どもたちの友」は、社会改革者で作家のエドナ・ダウ・チーニー（Ednah Dow Cheney, 1824-1904）によって出版されたオルコット初の伝記『ルイーザ・メイ・オルコット——子どもたちの友』（*Louisa May Alcott, The Children's Friend*, 1888）の副題に当たる。
- 8 『天路歷程』を児童文学だと捉えるパニヤン研究者のマレーは、本作に影響を受けた英語圏の児童文学作品の代表として『若草物語』を挙げている（Murray, “Bunyan” 650）。
- 9 レオナ・ローステンベルク（Leona Rostenberg）著「ルイーザ・メイ・オルコットの匿名および偽名によるスリラー」（“Some Anonymous and Pseudonymous Thrillers of Louisa M. Alcott,” 1943）の論文を皮切りに、『仮面の陰で——ルイーザ・メイ・オルコットの知られざるスリラー作品』（*Behind a Mask: The Unknown Thrillers of Louisa May Alcott*, 1975）、『V・V——あるいは策略には策略を——ルイーザ・メイ・オルコットの知られざるスリラー作品をもっと読む』（*V. V. Plots and Counterplots: More Unknown Thrillers of Louisa May Alcott*, 1976）、『仮面を外したルイーザ・メイ・オルコット』（*Louisa May Alcott Unmasked: Collected Thrillers*, 1995）、『フェミニストのオルコット——女性の力の物語』（*The Feminist Alcott: Stories of a Woman's Power*, 1996）、『もう

一人のオルコット』(Alternative Alcott, 1997) など、扇情小説の作品集が多数出版されている。

引用文献

- Alcott, Louisa May. *Aunt Jo's Scrap-Bag*. Vol. 1, Boston, Robert Brothers, 1872.
- . *The Journals of Louisa May Alcott*. Edited by Joel Myerson and Daniel Shealy. U of Georgia P, 1997. (ジョーエル・マイヤースン, ダニエル・シーリー編『ルイーザ・メイ・オールコットの日記——もうひとつの若草物語』宮木陽子訳, 西村書店, 2008年)
- . *Little Women, or, Meg, Jo, Beth, and Amy*. 1868-69. Edited by Anne K. Phillips and Gregory Eiselein, W. W. Norton, 2004.
- . *The Selected Letters of Louisa May Alcott*. Edited by Joel Myerson and Daniel Shealy, Little, Brown, 1987.
- Bok, Edward W. "Louisa May Alcott's Letters to Five Girls: Written by Her Twenty-four Years Ago." *The Ladies' Home Journal*, vol. 13, no. 5, April 1896, pp. 1-2.
- Bunyan, John. *The Pilgrim's Progress*. 1678-84. Edited by N. H. Keeble, Oxford UP, 1984.
- Evans, Abigail Rian. *Is God Still at the Bedside?: The Medical, Ethical, and Pastoral Issues of Death and Dying*. William B. Eerdmans Publishing, 2011.
- Gay, Carol. "The Philosopher and His Daughter: Amos Bronson Alcott and Louisa." *Essays in Literature*, vol. 2, 1975, pp. 181-91.
- Guerra, Douglas A. *Slantwise Moves: Games, Literature, and Social Invention in Nineteenth-Century America*. U of Pennsylvania P, 2018.
- Hetrick, Kristen M. *Writing Illness: Tuberculosis and Cancer in European and North American Literature*. 2012. Ohio State U, PhD dissertation.
- Johnson, Galen K. "The Pilgrim's Progress in the History of American Public Discourse." *LATCH*, vol. 4, 2011, pp. 1-31.
- Keyser, Elizabeth Lennox. *Whispers in the Dark: The Fiction of Louisa May Alcott*. U of Tennessee P, 1993.
- Masur, Margo. "Inhumanly Beautiful': The Aesthetics of the Nineteenth-Century Deathbed Scene." *English Theses*, paper 18, 2015.
- Matteson, John. *Eden's Outcasts: The Story of Louisa May Alcott and Her Father*. Norton, 2007.

本岡亜沙子

- . "Little Pilgrims." Introduction. *Little Women: An Annotated Edition*, edited by Daniel Shealy. Kindle, ed., Belknap P of Harvard UP, 2013.
- Meigs, Cornelia. Introduction. *Little Women, or Meg, Jo, Beth and Amy*. Little, 1968, pp. xii-xiv.
- Murray, Shannon. "Bunyan for Children." *The Oxford Handbook of John Bunyan*, edited by Michael Davies and W. R. Owens. Oxford UP, pp. 650-64.
- . "Playing Pilgrims: Adapting Bunyan for Children." *Bunyan Studies*, vol. 18, 2014, pp. 78-106.
- Newland, Jane. "Repeated Childhood Pleasures: Rethinking the Appeal of Series Fiction with Gilles Deleuze." *International Research in Children's Literature*, vol. 6, no. 2, Dec. 2013, pp. 192-204.
- Phillips, Anne K. "'Fun Forever'?: Toys, Games, and Play in Louisa May Alcott's *Little Women*." *American Journal of Play*, vol. 2, no. 4, Spring 2010, pp. 401-18.
- Sanders, Joe Sutliff. "Spinning Sympathy: Orphan Girl Novels and the Sentimental Tradition." *Children's Literature Association Quarterly*, vol. 33, no. 1, Spring 2008, pp. 41-61.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. 1603. Edited by G. R. Hibbard. Oxford UP, 1998.
- Stern, Madeleine. Introduction. *Behind a Mask: The Unknown Thrillers of Louisa May Alcott*. Morrow, 1975, pp. vii-xxxii.
- Vygotsky, L. S. "Play and Its Role in the Mental Development of the Child." *Soviet Psychology*, vol. 5, no. 3, 1967, pp. 6-18.
- West, Kristina. "Who Owns *Little Women*? Adapting Alcott in the Twenty-First Century." *Women's Studies*, vol. 48, no. 4, 2019, pp. 407-20.
- Zion's Herald*. Vol. 45, no. 22, Oct. 1868, p. 3.
- ウォルトン, ケンダル 『フィクションとは何か——ごっこ遊びと芸術』 田村均訳, 名古屋大学出版会, 2016年 (Walton, Kendall L. *Mimesis as Make-Believe: On the Foundations of the Representational Arts*. Harvard UP, 1990.)

Ghostly Representations: *Little Women* and Make-Believe Games

MOTOOKA Asako

In this paper, light is shed on make-believe games in Louisa May Alcott's *Little*

Women to explore why people still read the novel more than 150 years after its publication. It is one of the few nineteenth-century American novels that features young girls who engage in a wide variety of playful activities, including make-believe games.

According to psychologist L. Vygotsky, the hallmark of make-believe games is rule-bound. For instance, children who imagine themselves as a mother may imitate their mothers' behavioral rules. Philosopher and aesthetician Kendall Walton described reading fiction as a form of make-believe because those who read novels are expected to engage in imaginings with the author and read the work in accordance with a common understanding. Following Walton's argument, one may ask what rules are woven into *Little Women* and further question how the work evoked them to the readers.

In the first section, we examined the social and cultural norms embedded in *Little Women* by employing the example of the March sisters' "Playing Pilgrims." They enjoyed altering the messages that emanated from John Bunyan's *Pilgrim's Progress* to simplistic, domesticated ones. Their fanfiction suggests that *Little Women* and its author herself could be interpreted arbitrarily by the readers.

Consequently, in the second section, we discussed literary works as representations of make-believe games. After watching and reading Jo's play and short story, Beth and Laurie praise her talent as a (play) writer: "You are a regular Shakespeare!" However, because Jo's works are based primarily on Shakespeare's works, their passionate compliments immediately take on an ironic aspect. It is not Jo's works themselves that Beth and Laurie enjoy, but the Shakespearean plays. Furthermore, by extension of this reversal, one may deduce that readers of *Little Women* may not read the story itself, but stories within the story, that is, their embedded stories, similar to *Pilgrim's Progress*. In this sense, *Little Women*, which recedes into the background of stories within the story, is a ghostly representation.

Finally, we discussed the fact that Alcott's unpublished sensational novels were discovered after the middle of the twentieth century. The unexpected fact that a writer of domestic fiction had written incendiary novels was welcomed by scholars. Subsequently, the great deal of excitement in the study of Alcott's novels led to the search for a new image of Alcott. When the reference term of non-domestic narrative emerged, the presence of *Little Women* and its author increased. This may suggest the possibility that the interpretation of *Little Women* and its author may still change in the future.

文明化された異教国 ——福音派の日本人観とハワイ併合との関係

山本 貴裕

はじめに

1885年2月8日、943人の日本人移民——男性676人、女性159人、子ども108人からなる——がハワイ王国ホノルルに到着した¹。彼らは日本からハワイへの本格的な移民の第一波であった。この年から1894年までの10年間に日本からハワイへ渡った移民は、日本政府とハワイ王国政府が結んだ条約にもとづいていたため、「官約移民」とよばれる²。

官約移民が到着したころハワイ王国では、伝統的なハワイアンの文化の復興によりハワイアンにハワイアンとしての誇りを取り戻させようとしていたカラーカウア（Kalākaua）国王の率いる一派と、彼のそうした動きを「異教（heathenism）」の過去への「退歩」として非難する「宣教師派（missionary party）」とが対立していた。それは宗教と政治が一体となった宗教・政治的な対立であった。両者の対立は、官約移民第一団の到着から2年後の1887年に最初のピークを迎える。このとき宣教師派はホノルルの「福音派（evangelical）」教会の勢力を結集し、セントラルユニオン教会を設立するとともに、ハワイアン・リーグと呼ばれる秘密結社を組織化、さらには民兵組織のホノルル・ライフルズを味方につけたうえで、市民集会を開催し、カラーカウアに国王の権力を大幅に制限する「銃剣憲法（Bayonet Constitution）」への署名を強要した。その後も両者の争いは続くが、最終的には宣教師派がハワイ王国を乗っ取るかたちで決着がつく。ハワイ君主制の転覆（1893年）、ハワイ共和国（Republic of Hawaii）の樹立（1894年）、同共和国のアメリカ合衆国への併合（1898年）という一連の事件の連鎖がその結末である³。

このような政治的激動のなかで日本人移民はどのような立ち位置におかれることになったのであろうか。とりわけ、ハワイの未来を決定することになる宣教師派が有していた世界観のなかで、または彼らが描いたハワイ王国転覆・併合のシナリオのなかで日本人移民はどのような役割を割り当てられたのだろうか。

この問題に関して（それ以外のハワイ史関連のすべての問題と同様に）まず参照すべきは、ハワイ通史として定評のあるラルフ・カイケンドールの『ハワイ王国』シリーズのなかの第3巻（最終巻）であろう。カラーカウア政権時代を扱ったこの巻には、日本人移民について扱っている箇所があるが、カイケンドールはそこで、宣教師派と敵対関係にあったギブソン政権

(1882年～1887年)が日本人をハワイアンと「先祖が同じ (cognate)」人種とみなし、ハワイ社会の労働力として歓迎していたと指摘する一方で、銃剣憲法後に政権を握った宣教師派が日本人移民をどのようにみていたかについてはほとんど触れていない⁴。

この問題をより直接的に扱っている先行研究の一つが、キリスト教宣教師史の分野の吉田亮によるものである。吉田はハワイアンボード（正式名称はBoard of Hawaiian Evangelical Association）が1885年以降ハワイに到着した日本人移民に対して行った宣教活動について考察するなかで、同ボードの宣教師たちが日本人移民をどのようにみていたか、という問題を扱っている⁵。だがそこでの考察は、彼らが「伝道の対象として」日本人移民をどのようにみたかという問題に限定されており、彼らを含む宣教師派が自分たちの政治運動との関連で、あるいは自分たちの全体的な世界観のなかで、日本人移民をどのように位置づけていたかというより広い問題は扱っていない。

その一方で、政治史・外交史の分野の先行研究には、1893年のハワイ王国転覆から1898年のハワイ併合にかけて宣教師派が展開した併合運動において、彼らの日本人観の果たした役割に着目したものがいくつかある。そのうちの 하나가、合衆国によるハワイ王国「占領」の過程を描いたトム・コフマンの著作である。この著作においてコフマンは、ハワイの宣教師派がアメリカ本土の帝国主義者との連携のうちに、ハワイをアメリカ合衆国に併合しなければならない理由として吹聴した「日本人陰謀説」——もしアメリカ合衆国がハワイを併合しないなら日本が併合するだろう——に注目している⁶。そのほかにも1897年の「日本人移民ハワイ上陸拒否事件」を扱った兒玉正昭の研究⁷や、同年に米布間で結ばれた併合条約の成立の段階で「日本人脅威論」が果たした役割を指摘したウィリアム・モーガンの研究などがある⁸。これらの先行研究からはハワイ宣教師派の日本人観の一端がうかがえるが、こうした彼らの日本人観に養分を与え、それを背後から支えていた彼らの「世界観全体」については知ることができない。

この点について意外な方向から示唆を与えてくれるのが、ハワイアンの視点からハワイ史の記述の修正を試みる、ハワイアンの歴史家たちの研究である。そのうちの一人、ノエノエ・シルヴァはアメリカ人の植民地主義に対するハワイアンの抵抗を描いた著作において、ハワイアンたちが宣教師派の言説のなかで「野蛮な (savage)」「異教徒 (heathen)」と規定されることで文化的に従属的な位置におかれ、それが宣教師派の経済的・政治的支配の土台となったと指摘した⁹。彼女は宣教師派に抑圧された「異教徒」としてのハワイアンの抵抗運動に焦点を当てているが、実は当時のハワイで宣教師派から「異教徒」とよばれた人びとはほかにもいた。中国人、ポルトガル人、そして日本人である。

ハワイに到着した日本人移民は、「神の王国 (Kingdom of God)」¹⁰の到来を早めるために「福音化する (evangelize)」べき東洋の「異教徒」としてハワイの宣教師派に迎えられた。後者は、

終末の切迫感のなか、教派のかたちを守ることも、「回心 (conversion)」体験をはじめとする最小限の数の教義を共通項として他教派の教会員と結びつき、福音伝道や社会改革を超教派的に推進する「福音派」プロテスタントであった。彼らの世界観は福音派の伝統の構成要素の一つである終末論に彩られており、彼らはその終末論的な世界観のなかでハワイアンをあいだでの「異教」のリバイバルと戦いながら、もう一つの「異教」集団、すなわち日本人の到着という新たな課題への対応を迫られていた。福音派の終末論的世界観のなかでの異教との戦い、これこそが宣教師派の政治運動を背後から突き動かしていたものであった。日本人移民はハワイ王国転覆につながる、この壮大なドラマのなかで知らぬうちにある役割を与えられることになる。

本稿では1885年の最初の官約移民の到着から、1887年の銃剣憲法、1893年のハワイ王国転覆、1894年のハワイ共和国設立を経て、1898年のハワイ共和国のアメリカ合衆国への併合に至る13年あまりのあいだに、ハワイ福音派の機関紙、月刊『フレンド』に掲載された記事を主に参照しつつ、この間、ハワイ福音派共同体がその終末論的世界観のなかでどのように日本人をみたのかという問題を考察する。この考察を通して、彼らの日本人観と彼らの併合運動との関係性に光を当ててみたい。

本稿は以下のように構成する。第一章ではまず1880年代のハワイ王国における福音派の終末論的な世界観を概観する。第二章では1885年から1893年にかけて日本人移民または日本人が彼らの世界観のなかでどのように位置づけられたかという問題について考察する。第三章では1893年から1898年に起こった彼らの日本人観の変化（日本人陰謀説・脅威説の台頭）に注目しつつ、彼らの日本人観がハワイ併合の過程で果たした役割を分析する。

第一章 ハワイ福音派の終末論的世界観——エルサレムと異教

1880年代のハワイ王国では、同国の政治、経済、教育などの各領域における支配を築いてきた福音派共同体——1820年以降ハワイにやってきたハワイアンボード所属のアメリカ人宣教師の子孫を中心に形成される——が、ハワイアンの伝統的な文化の「リバイバル」を推進するカラカウア国王が率いる勢力の挑戦を受けていた。だがその一方で彼らは、世界は福音伝道や社会改革を通して「進歩」しており、まもなく「神の王国」がこの地上に設立される、と説く楽観的終末論——人間の改革努力を通じた千年王国の説立「後」にキリストが再臨すると説く後千年王国説 (postmillennialism) ——の信者でもあった。また、彼らがその重要な一部を構成していた海外伝道事業はこの時期、西洋諸国の帝国主義的膨張とともに最盛期を迎え、「この世代における世界の福音化」の旗印のもと、前例のない規模での展開をみせていた¹¹。

この章では、ハワイ福音派の日本人への眼差しを考察するための準備として、前者がその終

末論的な世界観のなかでこの時期のハワイ王国で起こっていた出来事全体をどのように捉えていたかという問題について考察してみたい。そのための史料として、1889年7月に『フレンド』紙上に掲載された、S・E・ビショップ (S. E. Bishop) 牧師の国内伝道に関する説教を中心に取り上げる。『フレンド』では1887年の「革命」前後から終末論的な色彩の記事が頻繁に掲載されるようになるが、とくにこの記事をその代表として選ぶのには二つの理由がある。一つは、この説教が、ハワイ福音派の代表者会議に当たるハワイアンボード年次大会の一環として、彼らがハワイのキリスト教の拠点とみなすセントラルユニオン教会において、しかも彼らのオピオニオンリーダーによって行われたものであるという理由である。つまり、この説教で述べられたことは当時のハワイ福音派の代表的見解とみてよい。いま一つは、この説教は筆者の把握する限り、この時期のハワイ福音派の終末論的な世界観をもっとも包括的なかたちで表現しているからである。

それではビショップの説教の内容を追ってみよう。ビショップはこの説教の冒頭でイザヤ書62章6節および7節から、「主を思い出させる役目の者よ、決して休んではならない。また、主を休ませてはならない。主がエルサレムを全地球の榮譽として確立されるまでは」という箇所を引き、それをハワイ諸島でキリストのために働く自分たちに当てはめて考えるようにと聴衆にうながす。この預言は「古きエルサレムにとっても、キリストの可視的教会のどの部分にとっても、まだ完全には成就していない」が、「世界中のキリスト教徒のうち、私たちほど明確なかたちで、この言葉に呼びかけられている共同体があろうか」、と。

ビショップはこう問いかけたあと、神がこれまでハワイにおいてなしてきた救いの業を振り返る。その際、彼はまず50年前の1839年に起きた「聖霊のほとばしり」——この出来事はしばしば「大リバイバル」と呼ばれた——に注目する。彼によれば、このとき人びとは大挙して教会に押しかけ、「全国民」がキリスト教徒になり、キリスト教の導きのもと、ハワイ国民は「文明社会や立憲政府の形式を瞬く間に自らのものとした」。こうして「純粹かつ高度なキリスト教文明の諸制度と秩序」がハワイの地に「植えつけられた」。この種はこれから「はぐくまれ、完成され、永続化される」。「人間と神の力 (agencies)」の協働によりもたらされた「すばらしい結果」は、ハワイ諸島が神に選ばれた「希有で特別な戦略拠点の一つ」、つまり「エルサレムあるいはシオン」である証拠だ。ビショップはこのように述べた。

だが現実のハワイはまだ完全に「全地球の榮譽」とはなっていなかった。その理由について彼は、ハワイアンが「以前の異教徒としての生活から受け継いだ不幸な習慣や慣行が、遺伝性の執拗さでもって、彼らのキリスト教徒としての生活の美を歪めている」からだと指摘し、「魔術 (Sorcery) や汚れ (Impurity) が広がる現状では、わが国の先住民の存続は見込めず、文明化・キリスト教化された社会がここに「設立された」とは言えないだろう」との見解を述べ

た。

次にビショップはハワイ王国内の光と影の分析から、「西洋のキリスト教世界」と「東洋の異教世界」との対決という、より大きな文脈に話を移す。

この島々は主が世界の諸々の王国を征服していくなかで占領し、要塞化されてきた、一大戦略拠点である。私たちは、巨大な諸帝国の商業航路が会い交わる、諸国の主要航路 (highway) に位置している。ハワイは、日の昇る諸領域に対して突き出すキリスト教世界の西端にある主要な前哨地である。私たちはすでに、自分たちがアジアの異教 (paganism) の旧制度との戦いの最前線にいることに気づいている。私たちのあいだではすでに、中国と日本から来た男子の数が先住民ハワイアンのそれをはるかに上回っているのだ。

「異教世界アジア」を視野に入れた、このような大きな文脈のなかでビショップはさらにアジア人がハワイに来たのは自分たちからキリストについて学ぶためであり、ハワイのキリスト教は「東アジアの闇へ光をもたらす、もっとも有効な手段の一つ」であると述べた。そしてビショップは最後に「ここをハワイのエルサレムとして確立し、全地球の栄誉とするまで [中略] 私たちは休んではならない」と説教の冒頭で引用した聖書の語句を繰り返した¹²。

ビショップはこの説教において、神の人類救済計画における「もう一つのエルサレム」としてのハワイに与えられた特別な地位と、それを完全なものにするためにハワイのキリスト教会が勝たなければならない国内外の「異教」との戦いを描いてみせた。それは、ハワイ版「救世主国 (Redeemer Nation)」¹³とでもいうべき、楽観的な終末論に彩られた世界観・歴史観であった。

ビショップのこの説教は1887年の銃剣憲法 (宣教師派の言うところの「第一の革命」) の2年後におこなわれたものであったが、ハワイ福音派の楽観的な終末論はその後、1893年の君主制の転覆 (宣教師派の言うところの「第二の革命」) に向けてますます現実的な色彩を帯びてくる。たとえば1891年6月号『フレンド』の第一面に掲載された「移行期」という見出しの記事では、「大きな変化につながる主な要素」として、人口構成の変化 (先住民が少数派に転じる)、外国人による事業の発展、教育や民主主義の成長 (それにより君主制は共和制に取って代わられる)、ニカラグア運河開通に伴う太平洋の商業的発展 (事業の拡大や実業家の移住をもたらす)、国際関係の変化 (とりわけ隣の帝国アメリカとのそれ) が挙げられている。国内外の状況からして「私たちはもうすぐ過去から脱し、やや鋭い曲がり角を曲がりながら、偉大なる物質的活動と繁栄の待つ新しい道を前進していこう」との観測もみられた¹⁴。

このような終末の切迫感の高まりと連動して、ハワイ福音派のあいだではハワイアン教会内に残る「異教」の影響力を根絶する必要性がますます強調されるようになる。この時期の『フレンド』には、「偶像崇拜抑制協会（Association for the Suppression of Idolatry）」¹⁵のジェームズ・ビックネル（James Bicknell）¹⁶によるハワイアン教会内の偶像崇拜に関する告発記事¹⁷や、プロロという名の魔女（Sorceress）がラナイ島で起こした殺人事件に関する記事¹⁸などが確認できる。

このように光と影のコントラストを次第に強める、ハワイ福音派の、基本的には楽観的な終末論に基づく世界観・歴史観のなかで、日本人はハワイアンや中国人と同様、福音化すべき「異教徒」としての役割を与えられることになるのであった。次章では、その具体的な様相を考察してみよう。

第二章 ハワイ福音派の日本人観——「文明化された異教国」

1885年2月から1894年6月にかけて、日布政府間の移民協定のもと26回にわたって計28,691人の日本人移民——23,071人の男性、5,487人の女性、133人の子どもからなる——がハワイに到着した。この間、1,422人の子どもが新たにハワイで生まれ、1,671人が死亡し、717人がアメリカ本土に移り、7,454人が日本に帰国したため、1894年末の時点でのハワイにおける日本人人口は20,271人であった。これは当時のハワイ人口の約20%に相当する¹⁹。官約移民開始「前」の1884年と官約移民開始「後」の1890年に実施された二度の国勢調査の結果にもとづくハワイ人口の国籍別内訳（次頁の表）をみれば、この間の日本人の急増ぶり——116人から12,360人へ——がひととき目立っている。

その一方で、この10年のうちにハワイ王国を転覆させた宣教師派の数は数百名、彼らに共感した人びとを含めてもその数はハワイ人口の数%に過ぎなかったといわれる²⁰。少なくとも数字の上では少数派でしかなかった宣教師派は、彼らのクーデターを計画・実行する最中にハワイに大挙して押し寄せた日本人移民たちをどのように迎えたのであろうか。

この時期のハワイ宣教師派の機関紙、『フレンド』紙上には日本人をテーマとした記事が散見される。本章ではそのうち代表的なものを選び出し、時系列に並べてみることで、日布双方で政治的状況が目まぐるしく変化するなか、ハワイ宣教師派が日本人移民や日本人一般、あるいは日本という国をどのような眼差しでみたのかという点を探ってみたい。なお、本章で扱う『フレンド』の記事は、官約移民第一団の到着直後の1885年3月号からハワイ王国転覆直前の1893年1月号までのものに限定する。この8年間は同紙上で表現された日本人観が比較的穏やかな時期と特徴づけることができ²¹、それは、その後の日本人脅威論が台頭する時期と一線を画している。後者については次章で扱うことにする。

COMPARATIVE TABLE OF NATIONALITY OF POPULATION OF HAWAIIAN ISLANDS AT VARIOUS CENSUS PERIODS SINCE 1866.

NATIONALITY.	1866.	1872.*	1878.	1884.	1890.
Natives.....	57,125	49,044	44,088	40,014	34,436
Half-castes.....	1,640	1,487	3,420	4,218	6,186
Chinese.....	1,206	1,938	5,916	17,937	15,301
Americans.....		889	1,276	2,066	1,928
Hawaiian born of foreign parents.....		849	947	2,040	7,495
Britons.....		619	883	1,282	1,344
Portuguese.....		395	436	9,377	8,602
Germans.....	2,988	224	272	1,600	1,34
French.....		88	81	192	70
Japanese.....				116	12,360
Norwegian.....				362	227
Other Foreigners.....		364	666	416	419
Polynesian.....				956	588
Totals.....	62,959	56,897	57,985	80,578	89,990

* This was the first census where the complete division of nationalities was noted.

Thomas G. Thrum, *Hawaiian Almanac and Annual for 1893* (Honolulu: Black & Auld, Printers, 1892), 11, <http://hdl.handle.net/10524/662>.

1885年3月号は、その前月に到着した「948人」（本稿の冒頭で挙げた数とは若干ずれがある）の日本人移民に関する記事を掲載し、ハワイのキリスト者には日本人移民に対して「キリスト教の指導・教育を施す義務がある」と説いた²²。1年後の1886年3月号の『フレンド』は、2月14日に約230人の女性を含む942人の日本人が蒸気船シティー・オブ・ペキン号でホノルル港に到着したと伝え、彼らの印象について「健康的で丈夫、品行よく、ハワイの貴重な労働力」と描写している。また、日本人が自ら海を渡ってハワイにやってきたという事実は、彼らの「魂に対する私たちの借り」と「神に対する私たちの責任」の大きさを示しているという、前年度3月号と同様の見解が繰り返された²³。

その約半年後の1886年10月の『フレンド』には同紙編集者のビショップによる日本人論が掲載された。このなかで彼は、日本人は「友好性や態度の誠実さ」の面でポリネシア人に近く、日本人の祖先とポリネシア人とのつながりを示すしるしが多くみられると指摘した。また彼は、日本人はキリスト教に対する「顕著な受容性」においてもポリネシア人との類似性を示しているとし、日本では30年前には徹底的に弾圧されていたキリスト教がいまでは統治者と民衆の双方によって歓迎されていることからして、日本人の福音化が達成される日は近いだろうとの希望的観測を述べた²⁴。

翌1887年はハワイが政治的に大きく動揺した年だった——同年6月末から7月初旬にかけて宣教師派がクーデターを起こし、カラーカウアに銃剣憲法を押し付けた——が、『フレンド』

紙上では日本人移民のキリスト教化の見込みに関する楽観論が保たれた。同年最後の月に掲載された記事のなかで、フランク・デイモン (Frank Damon) はハワイ島とマウイ島の日本人移民の出身地について次のように解説する。「日の昇る国」からやってきた彼らの大多数は「ホンドウ [本州] に位置するヒロシマおよびヤマグチと呼ばれる二つのケン」から来ている。この地域は「内海と呼ばれる場所に面しており、その素晴らしい自然美は日本人や、この魅力にあふれる地域を訪れる幸運な旅行者たちを喜ばせている」。この地域に住む人びとは、農民または漁民としての「忙しいながら素朴な生活」を送っていたが、一獲千金を夢見てハワイに渡ってきた。その様子は「まるで日本の田舎の生活の一部が奇跡的に海を渡って移植されたかのようである」。その一方で、この地域の人びとの大半は「外国人との接触をほとんど持ったことがなく、現在に至るまで、日本のなかでも彼らの住む地域ではほとんど宣教師の活動が行われていない」。つまり彼らは「西洋の生活・習慣・マナーについての最初の印象」や「キリスト教の最初のプレゼンテーション」をハワイのキリスト者から初めて受け取ることになる。日本人移民のあいだでの新しい仕事は「大変魅力的な可能性と素晴らしい約束に満ちて」おり、ハワイのキリスト者は「救世主の王国の利益を前進させる」ために立ち上がるべきだ、とデイモンは述べた²⁵。

1888年5月号『フレンド』のYMCAの欄には、前月のホノルルYMCA年次大会の際にC・M・ハイド博士が行った「エンマ王妃館 (Queen Emma Hall) における日本人部局の仕事の報告」が掲載された。この報告からはホノルルの日本人移民のキリスト教化が実際にどの程度進んでいたのかをうかがうことができる。具体的には、1885年2月8日の官約移民第一団の到着と同時に、ホテルストリートのYMCAで日本人の日曜礼拝がはじまり、出席者は5人から27人 (平均8人) で推移したこと、同年10月にサンフランシスコのメソジスト監督教会の美山牧師がハワイ入りしたのを機にデイモン (彼はそれまで中国人伝道に従事していた) が温めていた、日本人のあいだでの仕事の強化策が次々に実施されたこと、1887年3月12日のエンマ王妃館の開館 (YMCAはそれ以降、ここを拠点に日本人とハワイアンのあいだでの仕事を展開) とともに日曜礼拝は同館に場所を移し、出席者は18人から53人に増えた (平均20人以上) こと、日曜学校がはじまり平均17人が出席した (登録者は約30名) こと、日本人YMCAが結成され会員数は64人であったこと、「旭日節酒協会 (Rising Sun Temperance Society)」が約30人の創立委員によって結成され、会長は日本領事の安藤太郎が務めたこと、日本人のあいだでの仕事が順調に進み、「あまりにも多くの日本人」(10～12人) が受洗を希望したので日本人教会の結成が考慮されたが、いまだに実現していないことなどが報告されている。ちなみに、この記事が書かれた2年後の1890年に実施された国勢調査によると、この時点におけるホノルル在住の日本人の数は男子277人、女子111人、計388人であった²⁶。ハイドは報告の最後に「キリスト

者の親切な試み」に対する日本人の反応は良好で、「ここホノルルでなされることはハワイ諸島の各地区にいる4千人の日本人や日本国内の彼らの同胞のあいだに良い結果をもたらすであろう」と締めくくった²⁷。

このようにこの時期の『フレンド』は、ハワイの日本人のキリスト教化の見込みについて総じて楽観的であったが、その一方で時折、彼らのあいだでの「異教」の習慣の根強さを警戒する見解もみられた。例えば1888年12月号のハワイアンボード欄の記事には、その前月に到着した1,085人の日本人移民を「もう一つの異教徒の集団」と呼び、彼らのキリスト教化に取り組むようハワイのキリスト者に呼びかける箇所がある。財政的にも限りのある「少数のキリスト者が、何千人ものポルトガル人、中国人、日本人のあいだですべき仕事の量には圧倒される」ともある。ハワイ福音派にとってこれらの民族はすべて「異教徒」という範疇に入れられる人びとであった²⁸。

さらに翌月号、すなわち1889年最初の号では日本人の「異教徒」としての側面が強調され、彼らの福音化に関する安易な楽観論が厳しく批判される。同号に掲載された記事「海外伝道の仕事の本当の範囲」によれば、英米等のキリスト教国のキリスト者が「自分たちのキリスト教をマダガスカルなどの未開の異教国 (an uncivilized pagan nation) や日本などの文明化された異教国 (a civilized one) に分け与えようとするとき、自分たちの仕事の規模や範囲を過小評価しがちである」。これらの異教国への福音伝道においてはキリスト教による征服がはじまったばかりのときに、それが「ほぼ完成したと早合点してしまいがちである」。「福音化の永続的な結果を確実にものにする」ためには、福音伝道や教会建設だけではなく、「長期間にわたる忍耐強い労働が必要」である。

また記事は日本の状況をハワイの状況との比較において、次のように分析する。「ハワイの福音化がそうであったように「一つの国民が一日のうちに生まれるかもしれない」[イザヤ書66章8節からの抜粋]。日本の場合も同様の栄光に満ちた約束がみられる。だが、新生児には世話と栄養が必要である、ということを得ておくべきである」。一旦植え付けられた教会が「弱さや無知により、あるいは内在化した異教 (internal heathenism) や外国人の害悪 (vice) がもたらす腐敗に負け、自活不能となるなら、あるいは来たる世代において未熟なキリスト教が衰退し、腐敗や異教さながらの状態 (semi-paganism) へと退行するなら、その結果は期待した成功とはほど遠いものとなってしまふ」。たしかに日本は「偉大な約束の地」であり、日本人は「キリスト教を発展させ広める能力において未開の人種よりもはるかに優れている」かもしれないが、「長年にわたる遺伝性の行動を通して、国民生活や社会生活のさまざまな方面や、個人の人格の隅々にまで広がる異教のとてつもない力」を見誤ってはならない。外国人による長期的な監督を怠るといともたやすく異教へと退行してしまうという傾向は「ハワイアン教会

において十分示されたとおりでである」²⁹。当時、ハワイ福音派はハワイアンので「異教」のリバイバルと格闘していたが、この記事からは、そのことが彼らの日本人観にも影響を与えていた様子がうかがえる³⁰。

急速にキリスト教化されつつあるが、依然として異教の強い影響下にあるという両義的な日本人観は翌月号でも繰り返された³¹が、ハワイ福音派の日本人観を肯定的な方向へと大きく押しやる出来事がこの年、日本国内で起こった。大日本帝国憲法の公布である。『フレンド』は1889年6月号のトップ記事でこの件を取り上げた。記事はまず大日本帝国憲法の公布を「政治的・知的大進歩」と評価したうえで、同憲法の「信教の自由」を保証する条項——日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス——を紹介し、「宗教の実践において望まれる自由のすべてを与えているようである」、「40年前にあった厳しいキリスト教禁令からすれば驚くべき変化である」、「福音化されていない大規模な王国で、日本ほどキリストの宗教を快く受け入れたところはこれまでなかった、と言われる日も近いかもしれない」などと楽観した。

次に記事は日本の「進歩」から目を転じ、日本における「自由な代議政治」の「弱さ」を指摘する。記事によれば、その「弱さ」とはこの政治形態が「先祖伝来の感情や制度から派生したものではない」という点にあるとされた。記事は、日本人の「先祖伝来の感情や制度」にもとづく「精神」を「領主や独裁者への平民の服従や隷属」と特定し、それを英米人と対比し、後者は先祖から「自由人としての習慣・慣習」を引き継いでおり、彼らの憲法は「彼らの国民・社会生活から自然に発生したものである」と指摘した。さらに記事は日本人とハワイアンをひとくくりにし、彼らは「自由人の特権を自力で維持できるようになるまで、その行使についてゆっくり教育される必要がある」と論じた。

日本人の「弱さ」についての指摘は、日本人には福音が必要であると主張するための布石であった。記事は続ける。「日本人の精神を訓練し、引き上げ、自由な代議政治を行う能力へと導くことができるのは〔中略〕キリスト教の偉大な力だけである」と。記事はハワイアンの先例を挙げ、彼らが「1837- 8年の強力な霊的御業」(リバイバル)の10年後に代議政治を実現できたのは、「キリスト教の圧倒的な力がハワイアンの精神を支配したからである」と主張した。記事は最後に、新憲法は日本人がキリストによって完全に自由になる「前段階における必要かつ巨大な運動であり、主の福音の光の広がり軌を一にしている」と締めくくった³²。

当月の『フレンド』はさらに末尾の2ページにわたって「日本の大学リバイバル」に関するL・D・ウィシャード(YMCA国際大学部局書記)³³の書簡を掲載した。同紙の日本への高い関心がうかがえる。この書簡のなかでウィシャードはまず同志社を「日本最大のキリスト教系大学」かつ「アジア最大のキリスト教系教育機関の一つ」と紹介し、「この学校は日本でのキリ

スト教普及にもっとも貢献している」としている。彼はまた、同大学が「先住民（native）の支配下」にあり、「名高い学長、ニイジマ氏とともに働く有能な先住民の教授陣」と「高等教育を受けた外国人紳士からなる委員会」の連携により「日本のキリスト教系教育機関の最前線」に立っていると指摘する。

ウィシャーはまた同志社の位置にも注意をうながす。「同大学は帝国の旧都であり、かつ現在の仏教の中心地でもある京都に堂々と位置している。キャンパスの南側には歴代のミカドたちが千年間住んでいた旧宮殿に隣接する広大な公園が、北側には寺院の木立が広がり、これらが周囲を古典的な雰囲気の中で包んでいる」。書簡は、日本の政治的・宗教的伝統のただなかに位置するこの同志社大学において「アメリカの大学でのリバイバルと大変似かよった」集会が開催され、聖書の超自然的起源やキリストの神性の証拠などが説かれたと伝えた。だが、同志社でのリバイバルは決して順風満帆に進んだわけではなかった。ウィシャーによれば、学生たちがとりわけ関心をもったのが、西洋の知識階級のあいだでのキリスト教の評価であった。日本の学生たちの多くが「英独米出身の懐疑的な教授ら」によってキリスト教は西洋の知識人のあいだで影響力を失っていると信じ込まされていたという。こうした不利な状況のなかで自分は、アメリカでは若者全体のうち「福音派教会」の教会員の割合が20人に1人であるのに対して、大学生のあいだではその割合は2人に1人ないしは3人に1人である（つまり割合が大きい）と反論した、とウィシャーは書簡で伝えた³⁴。

1889年6月号『フレンド』の冒頭と末尾を飾った日本関連の二つの記事を通して顕著にみられるのが、「異教国」日本を救うキリスト教の力への楽観的な自信である。第1章でみたビショップ（同紙の編集者）の楽観的な終末論に基づく説教——そのなかで彼は、ハワイは「アジアの異教の旧制度との戦いの最前線にある」と言った——が同紙上に掲載されたのはその翌月であった。日本人のあいだでのキリスト教の普及（またはキリスト教による「異教」の制圧）に関する楽観論は、その後の同紙上でも繰り返された³⁵。

日本の状況が楽観的にみえたならば、ハワイの状況はそれ以上に楽観的にみえた。たとえば1890年12月号の『フレンド』では、アメリカ合衆国のメソジスト監督教会から日本人伝道のためにハワイに派遣されてきたA・N・フィッシャー³⁶が、日本人の福音化におけるハワイの利点を次のように指摘する。「ほかのどこに、1万3千人以上の偶像崇拜者が、首尾よく、彼らの寺院や僧侶や路傍の神々から離れた場所に集められているだろうか。ほかのどこに、これほど多くの異教徒が別々の集団に分断された状態で、支配的なキリスト教的感情と直に接しているだろうか」と。

その一方でフィッシャーは、日本人の「異教」の度合いがハワイに来る際に強化されるという側面にも注意をうながす。彼によれば、祖国では宗教に無関心であった者も、異国に向けて

出発する間際になると未知の世界への不安から神仏にすがりはじめるので、ハワイに来る日本人移民は「献身的な偶像崇拜者」となる。こう指摘したあと彼は、マウイ島で6人の回心者に洗礼を施したときに、彼らから「魔法のお守り」を預かったが、そのうちの一人が牧師にお守りを渡したことで「神の怒りに触れて死んでしまうのではないか」と心配していたというエピソードを紹介している³⁷。

フィッシャーが日本人からお守りを預かったという話は、半年後の1891年6月号でも繰り返された。そこでは「お守り」が「呪物 (fetish)」とも呼ばれ、日本人移民が「これらの異教の象徴にますますしがみつくと」原因として、「神聖なお守りを捨てて外国の神を信じないやうにと懇願する」親への「孝行心」, 「愛国心」, お守りを捨てると「悲惨な結果」になるのではないかという恐怖心などが指摘され、「魂を再生させる聖霊の力だけが、偶像への依存を断ち切ることができる」との見解が示された³⁸。

日本人の「偶像崇拜」に対するフィッシャーの戦いを、当時のハワイ福音派がハワイアンに対して展開していた偶像崇拜抑圧運動と比較してみるとその共通点が浮き彫りとなる。たとえば上の記事の9ヶ月前の『フレンド』に掲載された、偶像崇拜抑圧協会の会長ジェイムズ・ビクネル牧師による投稿記事には、「カフナ」と呼ばれる呪術師が「アウマクア [神々] との関係切ることは非愛国的である [中略] と教えている」という批判や、福音の説教に「聖霊の無敵の力」が伴わなければ「人びとをサタンに縛り付けている鎖を破る」ことはできない、などの指摘がみられる³⁹。さらに、1892年10月号のビクネルの死亡記事——彼は偶像抑圧協会の活動開始から3年後に急死した——には、彼が、先住民のキリスト者から構成される同協会の会員とともに、「カフナの恐るべき影響力と戦い、多くの家族に対して彼らの所持する呪物や他の迷信の対象物を明け渡すよう働きかけた」との記載がある⁴⁰。

フィッシャー執筆の記事をビクネル関連の記事に照らし合わせてみれば、アメリカのメソジスト派のフィッシャーは、ハワイ福音派（主に会衆派と長老派から構成された）がハワイアンのあいだで行っていたことを、ハワイの日本人のあいだで行っていたという事実が浮き彫りになる。つまり、当時のハワイには、ハワイアンと日本人を対象とした「超教派的」偶像崇拜抑圧運動が存在していたのである。

ここまで1885年から1892年にかけて『フレンド』に掲載された、日本人関連の記事のうち代表的なものをみてきたが、そこには日布の日本人に関して、「異教の過去」から「キリスト教の未来」に向かって「進歩」しはじめたことへの肯定的評価と、なおも根強い異教の影響のもとにあるという否定的評価の両方が混ざり合っていた。また、その両義的评价において、日本人はハワイ福音派によって——後者と協働関係にあったアメリカのメソジスト派によっても——ハワイアンと同じ括りに入れられていた。彼らにとって日本人はハワイアンと同様、ハワ

イが神の計画における特別な地位を成就するために福音化せねばならぬ「異教徒」であった。

だが全体的にみれば、この時期のハワイ福音派の日本人観は楽観的な基調を保った。ハワイ王国転覆の月、すなわち1893年1月の『フレンド』は同紙創刊50周年を祝うとともに、前月に開催されたセントラルユニオン教会の献堂式の模様を伝えた。それによれば、献堂式ではビショップがハワイ島ヒロの日本人回心者によって最近建設された「安上がりで小さな教会」にも触れ、神は同教会を「み目がより洗練されている」セントラルユニオン教会と「同じだけの榮譽をもって受け取られるだろう」と述べた⁴¹。ビショップのこうした発言からは、当時のハワイ福音派の自信や優越感がうかがえる。

このように楽観的雰囲気のうちにあったこの時期の『フレンド』には、「日本人陰謀説」らしきものはまったくみられないが、それは、同月に起こったハワイ王国転覆の直後に「突如として」同紙上に現れることになる。

第三章 女王と日本人の陰謀

本章では前章と同様、『フレンド』の記事を主に参照しつつ、1893年のハワイ王国転覆後に突如として現れた日本人陰謀説の中身がどのようなものであったか、それがそれ以前からハワイ福音派のあいだにあった両義的日本人観とどのような関係にあったのかという問題について考察する。さらに重要なのは、彼らの日本人観がハワイ併合に関する彼らの言説やその実現の過程とどのような関係があったのかという問題である。ここではとくにこの点を明らかにしてみたい。

1893年2月号『フレンド』はトップ記事で前月11日から19日にかけて起きたハワイ王国転覆事件を取り上げた。この事件では、宣教師の子孫らがアメリカ公使のJ・L・スティーブンスの協力を得て（彼はホノルル港に停泊中の米軍艦ボストン号の海兵隊を上陸させ、イオラニ宮殿近くに配置させた）、リリウオカラニ女王に対してクーデターを起こし、退位に追い込んだ。記事はこの事件を振り返って「歴史がつくられた」、「ハワイの自由と名譽の到来を告げる栄光の新時代がはじまった」と肯定的に評価し、この事件の原因は「カフナに焚きつけられた女王が〔中略〕憲法を破棄した」ことにあると指摘した。ここでいう「憲法」とはリリウオカラニの兄、カラーカウアが1887年のクーデターにより宣教師派によって押し付けられた銃剣憲法のことである。リリウオカラニは王位に就くとすぐにこの憲法を破棄したのであった。記事によれば、このとき「長いあいだ苦しんできた保守的な白人たちの怒りと力が一斉に吹き出し」、「腐りきった君主制を転覆させた」。その後、「私たちの臨時政府」が設立され、それが諸外国の公使により認知され、臨時政府代表がワシントンへ派遣された。記事はこのように伝えた⁴²。

上の記事にみられるように、この時期の『フレンド』には、ハワイ福音派の、自分たちは神

の側に立って歴史をつくっているという後千年王国説的な高揚感が顕著であり、その様子は「ハルマゲドン」における善（キリスト教）と悪（異教）の最後の戦いを彷彿させる⁴³。ちなみに、そのすぐあとの記事は併合の可能性について言及し、「ハワイと合衆国のユニオン」が「そう遠くない将来において起こりそうである」、またそれにより「ハワイは無知で迷信深い君主制のくびきから解放され、偉大かつ自由な共和国〔合衆国〕の文明諸州との高貴で名誉ある連帯へと昇格されることになる」、などの見解を述べている。これは第一章でみた「救世主国ハワイ」の「救世主国アメリカ」への包摂とでもいうべき見解である⁴⁴。

その一方で、このような終末論的高揚感のなか、この時点での『フレンド』紙上には依然として「日本人陰謀説」らしきものは見当たらない。翌月号にはその代わりに、「もしハワイがイングランドによって占拠されるような事態になれば、後者はアメリカの海岸を急襲するうえで大変有利になるであろう」という、以前からある「イングランド人陰謀説」が確認できる⁴⁵。

日本人陰謀説が初めて登場するのは、その1ヶ月後、すなわち1893年4月号においてであった。同号は第一面の二つの記事で、合衆国のブラウント特使がハワイの状況の視察に来たこと、ブラウントが到着から3日後の4月1日に、それまでの2ヶ月間、ハワイ政庁の上に掲げられていたアメリカの国旗を下ろし、ハワイの国旗を掲げるよう命じ、ボストン号の海兵隊も帰艦させたことを報じた⁴⁶。また2ページ後の記事では、宣教師派（福音派）と宗教的・政治的に対立していたハワイ聖公会のアルフレッド・ウィリス主教による宣教師派への痛烈な非難——宣教師派は父子2世代にわたってハワイ王国の転覆とハワイの合衆国への併合を一貫して追求して来た——が取り上げられ、それへの反論が行われた⁴⁷。

この号に掲載されたこれらの記事は当時の宣教師派が四面楚歌とでもいうべき状況に追い込まれていたことを示していて興味深い。日本人陰謀説が『フレンド』に初めて登場するのは、上のウィリスへの反論のあとにおかれた「日本への併合」と題された記事においてであった。そこではまず、エドウィン・アーノルド卿（知日家で仏教に傾倒しており、リリウオカラニとも親密な関係にあるとされた）が『ロンドン・デイリー・テレグラフ』紙で論じた、「ハワイを現在の不安定な政治状況から解放するために」ハワイを日本に併合すべきであるとの見解が取り上げられ、日本政府が「帝国をこちらの方向へ拡張する野望がないわけではないようにみえる」との観測が示される。

その根拠として挙げられたのが、「日本海軍が所有する最大級の戦艦」浪速が「私たちの革命の知らせが日本に届いた直後の8日に同国から出航した」こと、浪速には「ミカドの甥であり、日本陸軍元帥プリンス・アリスガワの息子でもある、プリンス・コマツが乗り込んでいた」こと、「プリンス・コマツ」は「カラーカウアがかつてカイウラニ王女との縁組を模索した相手であったと言われている」こと、浪速に乗ってやってきた日本政府の高級外交官が「航海練

習船コンゴウに乗ってヒロを訪問し、当地の日本人移民のあいだで忙しくしている」こと、などの「諸事実」であった。それに加えて、「ナニワは2千～3千人を武装するのに十分な数の携帯兵器を積載しており、この島〔オアフ島〕の日本人のうち従軍経験者は1,500人にのぼると言われている」との「噂」も取り上げられ、日本政府がハワイへの移民を奨励してきたことには「邪悪な意図はなかったかもしれないが、「周知の事実には驚くべきものがある」との指摘がなされた⁴⁸。

「日本人陰謀説」は次ページの「王室と日本人の策略疑惑」と題する記事でさらに肉付けされる。記事は4月1日付『ハワイアン・スター』紙で主張された「元女王と日本軍艦ナニワの司令官とのあいだにある陰謀」——アメリカ国旗の撤去後に日本軍を上陸させ、武器の扱いに慣れた大勢の日本人移民を武装し、ハワイを日本の保護領としたうえでリリウオカラニを復位させようと企んでいる——を取り上げ、断定は慎重に避けつつも、「私たちは、元女王の一味が〔中略〕その手の陰謀に関わっていたという見解に傾いている」と同調した。また「ハワイ諸島に対する日本の威嚇の態度をみる限り、現在の政治問題の究極の解決方法は合衆国への迅速な併合にあることは間違いないが、もしそれがだめなら、次に望ましいキリスト教国であるグレートブリテンを保護国とし、同国に割譲する案が考えられるだろう」と論じた⁴⁹。ここには日本の脅威をハワイの合衆国への併合の必要性に結びつけるとともに、それまでのイングランド人陰謀説を日本人陰謀説にとって代えた『フレンド』の見解の変化をみることができる。

翌月号以降、この種の陰謀説を含む日本人関連の話題はしばらくのあいだ同紙からほとんど姿を消す⁵⁰。次に『フレンド』紙上で日本人が大きく扱われたのは日清戦争勃発後の1894年10月号においてであった。それは、同紙がハワイ共和国の誕生——同年7月4日（合衆国の独立記念日と同じ日）、それまで18ヶ月間にわたって君主制転覆後のハワイを統治してきた臨時政府に取って代わる——を祝った2ヶ月後に当たる。同号においてはヨーロッパ文明とキリスト教を積極的に受け入れてきた日本の進歩性とそれをかたくなに拒んできた中国の保守性が対比され、この戦争により中国も日本と同様、西洋科学を受け入れざるを得なくなると指摘されたほか、中国は日本に韓国の統治を任せるべきであるとの見解もみられた⁵¹。

翌月号は「日本と中国」と題する記事において内村鑑三の論説を取り上げた。内村は日中間の戦争における日本の立場について「改革や進歩に向かおうとするあらゆる傾向を握りつぶそうとする中国の干渉から韓国を解放するため」としている。内村はまたこの紛争を「進歩と文明の大義を代表する小国」（日本）と「退歩と野蛮を擁護する大国」（中国）とのあいだで起こるべくして起こったことだと言っている。記事はこうした内村の論説を好意的に扱い、「文明世界はこの戦争における日本の行動を注視するだろう」と付け加えた⁵²。

その後、ハワイ共和国は1895年1月の王党派による反乱を鎮圧し⁵³、元女王をその反乱に加

担したかどで裁判にかけ「重罪犯隠匿 (Misprision of Treason)」の有罪判決を言い渡し、イオラニ宮殿に幽閉する⁵⁴。この頃、日本は中国に対して勝利しつつあった。1895年3月号『フレンド』は、前年10月号に掲載された日本の勝因に関する分析を繰り返したうえで、日清戦争での日本の勝利は「小国ハワイにとって恐るべき脅威」であると指摘し、次のように続ける。ハワイにはすでに「25,000人の熱心で落ち着きがなく進取の気性に富んだ日本人」がおり、彼らはハワイ「男子の約3分の1をなしている」。戦勝により日本人の「国民的誇りが呼び起こされ、大日本帝国が活発に彼らを背後から道徳的に支援しているいま、彼らの要求は「攻撃的になるだろう」し、「日本自体もハワイを戦略拠点として欲しがらないということはないだろう」。だからこそ「そろそろ合衆国が本来自分のものである太平洋上の前哨地 [ハワイ] を占領すべきであることは明らかである」と記事は結論づけた⁵⁵。

日清戦争に関するこれらの記事からは、自らを「文明」や「進歩」の側においていたハワイ福音派が、彼らが一様に「異教徒」と呼んだ日本人と中国人のあいだに、実は「文明と野蛮」または「進歩と退歩」の程度における高低の差をつけていたこと、またこの微妙な区別は日本人によっても共有されていたことがみえてくる。そしてそこには前章でみた「文明化された異教国」としての日本の微妙な位置づけとの連続性をみることもできる。日清戦争での日本の優位はハワイ福音派のあいだに、「文明化・キリスト教化された」日本への共感を呼び起こしたが、やがて日本がこの戦争に勝利を収めるにつれ、それは「文明化・キリスト教化された」日本に対する警戒心へと変わり、いまや日本は、アメリカがハワイを併合すべき理由として真っ先に引き合いに出される存在となっていた。

翌1896年、『フレンド』は日本人移民を主な標的とした「悪魔」の勢力との戦いを展開する。同年2月号のトップ記事は、ハワイの朝刊が、ヌウアヌ通り沿いのスラム街に日本人プランテーション労働者の「くず連中 (scum)」が流れ着き、「下劣な女性売買とも関わりのある、博打打ちとゴロツキの居住区を形成している」と報じ、「これらの煽動者たちの抑圧・制限」や「某国民のうちの犯罪者たちの国外追放」を叫んでいると伝えた。また「売春宿や阿片窟、博打宿、酒場」などに群がる「悪魔 (fiends) を抑制するのは法と役人の仕事である」との主張もみられた。記事は最後に、ハワイ福音派の「純潔・禁酒・正義のための戦い」を終末論的な文脈に位置づけ、「暗黒の勢力は来るべき救世主の王国の成長に対して常に死に物狂いの戦いを挑んで」おり、「ホノルル在住の私たちはこの世界的衝突において大きな役割を担っている」と締めくくった⁵⁶。

この時期のハワイでの禁酒運動も上の文脈に位置づけることができる。翌月の『フレンド』は「酒場の勢力の制限と縮小のための法制化」への支持を表明した。また、ハワイYMCAの一委員会とキリスト教婦人禁酒同盟 (WCTU) との合同会議で、ハワイでの酒類販売を制限

するための計画が提出され、「厳密な禁酒派」からも、より徹底的な禁酒に至る手段として「条件つきの賛成」が得られたと報じた⁵⁷。

こうした一連の流れに一見、逆行するかたちで出てきたのが「ワイン法案」であった。『フレンド』6月号は「アルコール含有率18%未満のカリフォルニア・ワインすべてを関税なしで輸入するための法案」が行政長官の一人によって上院に提出されたと報じ、そのことへの「驚きと悲しみ」を表明した⁵⁸。翌月号の「ワイン法案」に関する記事では、冒頭で、同法案が国の法律となったことに軽く触れつつ、この法案に対して「少数の敬虔な禁酒派 (temperance men)」からの反対があったことへの満足が表明された（『フレンド』は禁酒派であった）のち、残りのスペースのほとんどを割いて「酒法案」について報じられた。この法案は、アルコール含有量18%未満の「グレープジュース以外からつくられた非発泡性ワイン」に対して1ガロン当たり60セントの関税を課すものであったが、実のところその標的は「ライス・ワイン」、すなわち日本酒であった⁵⁹。記事によれば、日本酒が標的となった理由は、当時ハワイに大量に輸入されていた日本酒が「メチル・アルコールを多く含み、ハワイアンに有毒な影響を及ぼしている」からであるとされた。この「酒法案」はドール大統領による拒否権発動を覆し、満場一致で可決されるという「異例の事態」となった。大統領は、自分が拒否権を行使した理由について、「貧しい日本人が慣れ親しんだアルコール飲料の価格が高くなると彼らが大変だから」と言うが、「その真意はおそらく、この落ち着きのない人びとを挑発するのは賢明でないということであろう」と記事は指摘した。ワインに課される関税を撤廃する一方で、日本酒に課されるそれを引き上げたハワイ議会の意図は、上の記事が示唆しているように、日本人移民の挑発であったのは明白である⁶⁰。

かくしてハワイ福音派の「悪魔」の勢力との戦いは勝利に終わった。同号の『フレンド』は別の記事で、議会内の「道徳的改革」支持派の働きにより、複数の「改革法案」が通過したと報じた⁶¹。

この年の秋に実施された合衆国大統領選挙では、ハワイ併合を支持する共和党が勝った。共和党の勝利によりハワイでも併合の動きは加速し、併合クラブ（1887年のクーデターを推進した秘密結社ハワイアンリーグの別名）が復活した。1896年12月号『フレンド』は米布での併合に向けたこうした動きを伝えるとともに、日本人脅威論を再び登場させる。「日本人移民の脅威」と題した同月の記事はまず、11月28日付の『アドバタイザー』で報じられたハートウェル判事による併合論を引く。判事は併合を急ぐ理由の一つとして、ハワイで増え続ける日本人の数をあげ、「現在ホノルルには日本人移民会社が5社あり〔1894年に官約移民が廃止されたのち、日本の民間会社を通じた私約移民が行われるようになった〕、実質的な変化がない限り、これらの会社がこの国を支配することになるだろう」と言った、と。記事はそのあと、ハワイは「ア

ジア人によってではなく、キリスト教化された白人によって占領されるべきである」との見解を示し、安価な「アジア人契約労働者の輸入の継続」を希望するプランターを「目先の利益しか考えていない」と批判した⁶²。

1897年の『フレンド』は最初の3ヶ月間連続で前年度に実施された国勢調査の結果を報じた⁶³が、ここにも日本人脅威論を掻き立てようとする意図がうかがえる。たとえば同年3月号は「人種別」ハワイ人口内訳——ハワイ人口の42.2%がモンゴロイド系アジア人、36.2%がハワイアンまたは混血ハワイアン、20.6%がヨーロッパ人——に加えて、「国籍別」内訳を示し、日本人男性が中国人男性を若干上回っている（前者は19,212人、後者は19,167人）ことへの驚きを表明した。その2ページ後に「日本人のハワイへの関心」と題する記事がおかれている⁶⁴ことからしても、この記事は日本人脅威論を訴える性質のものであったと言ってよいだろう。

この時期のハワイ共和国では『フレンド』に限らず、世俗新聞紙上でも国勢調査の結果が繰り返し報道され、日本人脅威論を煽った⁶⁵。それは日本人移民ハワイ上陸拒絶事件の前触れであった。この事件について4月号『フレンド』は次のように伝えた。ハワイ政府は、少なくとも50ドル分の硬貨を所持していない外国人を排除することを定めた法律（2年前に施行）を、移民に一時的な貸付金を手渡し、ハワイ到着直後に返金させていた日本の会社の代理人の「詐欺行為」に対して適用した。その結果、3月5日「シンシユーマル」で到着した670人の移民のうち535人が入国資格を満たしていないとして強制送還されることとなった（最終的には再審査を経て535人中122人が入国を認められ、残りの413人が20日に強制送還された）。19日に「サクラマル」で到着した316人のうち163人も同様に入国を拒否された。ハワイの日本人移民は、ハワイ政府の排除政策は「非道」かつ日布間の条約違反であると憤慨しており、日本政府に対して救済措置を求める一方で、ハワイ政府の支持者たちは「深刻な結果を恐れている」と記事は報じた⁶⁶。

その2ヶ月後の6月号には日本人関係の記事が4つ掲載された⁶⁷。そのうちの一つ、「日本人の起源」と題された記事によれば、『フレンド』の編集者らがある日本の役人に「日本人シベリア起源説」について尋ねたところ、彼はその説に憤り、日本人は「人類の他の部分とはまったく無関係で」あり、「神々の直系の子孫である」と言ったという。記事はそうした見解を「非科学的」とし、その代わりに「イエス・キリストを通して神の子になるという希望や目的をもつ方がどれほど高貴であろうか」と説いた。ここで『フレンド』の編集者は、日本人の宗教的な民族観を自分たちの同じぐらい宗教的な人間観に対置し、前者を「非科学的」、後者を「高貴」と分類しているが、皮肉なことに、当時、伝統的な福音派の信仰の中身、すなわち「福音」もまた、「科学的」見地から挑戦を受けていたのである⁶⁸。

また「ハワイは日本化するのか、それともアメリカ化するのか」と題された記事では、ハワ

イは「完全にアメリカ化されている」のに、「人口の多い日本帝国からかなり知的で有能な臣民を急速に移住させようとする傲慢な試み」が行われており、この移民のペースが続けば「5年から10年のうちに彼らはハワイ人口の大多数を占めるようになるであろう」との危機感が表明された。そして「ハワイの急速かつ完全な日本化」から逃れる唯一の方法は、「合衆国またはヨーロッパの大国による早急な介入」である、との見解が繰り返された。今回はワシントンも、ハワイが「アジアの一部としての運命」ではなく、「アメリカの一部としての運命」を選ぶよう効果的な介入を行うであろう、との希望的観測で記事は終わっている。

『フレンド』の編集者ビショップは8年前の1889年にセントラルユニオン教会で行った説教（第1章を参照）のなかで、ハワイは「日の昇る諸領域に対して突き出すキリスト教世界の西端にある主要な前哨地」であり、かつ「アジアの異教の旧制度との戦いの最前線」に位置すると述べていた。そのことからすれば、上の記事でビショップが読者に、ハワイは「アジアの一部としての運命」を選ぶのか、それとも「アメリカの一部としての運命を選ぶのか」と迫ったとき、それは単なる政治的選択ではなく、ハワイは「異教」と「キリスト教」のどちらを選ぶのかという宗教的選択をも意味していたに違いない⁶⁹。

その後も『フレンド』は日本人脅威論を刺激し続けた。同年8月号は、リリウオカラニ（1895年9月に幽閉を解かれる）が6月17日ワシントンでハワイ併合に対して正式な抗議を行った——その前日にマッキンレー大統領は上院にハワイ併合条約を送付した——と伝えた次のページで、日本公使の星亨が6月19日ワシントンでハワイ併合に対して正式な抗議を行ったと伝えた⁷⁰。9月号には「ハワイの政府を占領するために、日本の軍艦から手に入れた武器で武装したニイガタ出身の兵士を労働者に見せかけてここに上陸させる計画」への言及や、「かつては見事であった私たちのバラを絶滅状態に追い込んだ日本の甲虫（beetle）を退治する」ために、その天敵がメキシコからハワイに輸入された、との報道もみられた⁷¹。

ときおり1893年の君主制転覆のときにもみられたような、ハワイ君主制を「異教」と結びつけ非難する記事も現れた⁷²が、1898年のハワイ併合に向けての動きが加速するなか、気づいてみれば『フレンド』の一番の標的は、すでに王位を奪われていた、「異教徒」の元君主ではなく、もう一つの「異教徒」の集団、すなわち日本人に変わっていた。同紙は、宣教師派がハワイを「異教」君主制から切り離そうとしたときには、ハワイアン教会が十分にキリスト教化されていないという点を繰り返し強調したのと同様に、同派がハワイを日本の東洋「異教」文明から切り離そうとしたときには、日本人教会が十分にキリスト教化されていないという点を繰り返し強調した。『フレンド』が1897年10月号から12月号まで連続掲載した日本のキリスト教会の現状に関する特集はまさにそうした意図を持っていたと思われる。これら一連の記事は当時、日本を旅していたハワイ福音派の牧師、C・M・ハイド博士が同紙の編集者からの要請に応え

て書いた書簡からなっていた。ハイドは同じ書簡をハワイの世俗新聞『アドバタイザー』にも投稿している⁷³。つまり、日本のキリスト教会の現状への関心はハワイの宗教新聞だけでなく世俗新聞にも共有されていたのである。

10月号に掲載されたハイドの書簡は、いったん聖職についたのち世俗社会の責任ある地位に就いた日本の若者たちの例を取り上げ、そのなかで日本人の性格に関する分析を行った。ハイドによれば、「日本人はハワイアンと同様、道徳的義務についての生まれつきの感覚を欠いている」。彼らにとって「真実性」は「絶対的原則」ではない。仏教によれば、「ある人に対して言われたことは、その人がそうでないと思うまで「その人にとっての真理」である」（強調は原文、以下同じ）。また日本人の「礼儀正しさ」の根底には、ハワイアンが「ポノ」（「正しい」の意味）を「オルオル」（「心地よい」の意味）と混同するのと同様に、「事を円滑にすませようとする欲求」がある。だから日本人に対して「あなたは罪人だ」と言うのは彼らの礼儀作法に反するが、「原罪」の概念を理解することなしに、イエス・キリストによる救済を正しく理解することはできない。また、原罪を理解できない日本人は、例えば財務管理の責任を持たされ、「債務不履行者」になってしまったとき、ハワイアンとまったく同じように、「そうなったのだから仕方がない」と言ってすませようとする。その感情は「神を敬い、罪を嘆く気持ち」というよりもむしろ「恥と屈辱」である⁷⁴。

11月号『フレンド』は全7頁（最初の2頁の広告を除く）のうち丸2頁を割いて、日本のキリスト教の現状に関するハイドの書簡2通を掲載した。ハイドは最初の書簡の後半部分で「キリスト教が日本人の国民生活やその性格に与えた影響」について述べているが、ここでの議論は、ハワイ共和国がなぜ日本化ではなく、アメリカ化すべきなのか、という議論とつながっている。なぜなら、もし日本がすでにキリスト教化しているのなら、ハワイは日本化すべきでないという議論は成り立たなくなるからである。

ハイドはこの報告のなかで、日本におけるキリスト教の影響力の浸透には長期の「訓練」が必要であるという、以前からある議論を持ち出した。彼はまた日本人の「虚栄心」や「愛国心」の反映である「自我」が「日本的キリスト教」をつくりあげ、日本における「福音の原理・精神の急速な普及を妨害している」と告発した。「霊的生活は依然として日本人キリスト教徒のものとなっていない」。これがハイドの結論だった⁷⁵。

この書簡のあとには「日本宣教の現状」についての彼の別の書簡がおかれた。彼はそのなかで当時の同志社大学の状況に言及し、同大学では経営権が創設者から取り上げられ、創設当初とはまったく異なる方向に進んでいると批判し、その原因を日清戦争の「悪影響」のなかにみた。戦勝気分が沸くなかで「日本人は自らの力を過大評価し、列強諸国や諸問題に対して自力で対処できると考えた。外国の影響は過小評価され、外国のやり方は捨てられ、外国の先生は

解雇された」。同志社の新学長は就任演説のなかで「個人主義・世界主義・国粋主義」を目標として掲げたが、これらは「ジョセフ・ニージマによって強調された福音主義的キリスト教の偉大なる目標からはほど遠い」。ハイドはこのように批判した⁷⁶。

彼の同志社批判は翌月にも持ち越された。ここで大きく取り上げられたのが、同志社の設立時に大きな役割を果たした「熊本バンド」の「不信と不道徳への退歩」である。ハイドによれば、かつてはこれら40人の若者たちが同志社に活力をもたらしたが、「彼らの一部は今日、同教育機関の運営や理想の面で最近もたらされた変化と密接な関係がある」。自分たちは同志社の創設者新島の「自由教会のための自由学校」という目的を実行しようとしているだけだ、と彼らは主張するが、彼らはこの言葉を「近代リベラリズムにしたがって解釈し、意見の採択や普及における限界や抑制の完全拒否の意味でとっている」。

ポール・ボラーによれば、この時期の同志社では、伝統的な福音派の信仰の普及を目指すアメリカ人宣教師と、リベラルな見解のアメリカ人、リロイ・ジェーンズの影響を受けた熊本バンドのメンバーとのあいだで深刻な対立が起きていた⁷⁷。ハイドは彼らのこうした行動について、それは「キリスト教の発展と成長」における一時的な段階であり、「子どものときの放っておけば自然治癒する病気のようなものである」と楽観的な姿勢を崩さなかった⁷⁸。

このように1897年最後の3ヶ月間において『フレンド』紙上に掲載された日本でのキリスト教の仕事に関する報告は、長期的な見地における楽観論はなんとか保持しながらも、全体的にみると、かつての「進歩」に対して、現在の「退歩」を強調する性格のものであった。そしてその「退歩」を象徴していたのが、かつては日本での福音普及のためにもっとも貢献したものの、いまでは伝統的な福音主義に反旗を翻しているかのようにみえた同志社であった。ハワイ福音派の目には、日本文明は「異教」の基盤の上に、国粋主義やリベラル神学という「過ち」を重ねており、この「東洋文明」がハワイを乗っ取ろうとしているように映ったのであろう。

翌1898年はハワイ併合の年であった。5月号『フレンド』は第一面で米西戦争の開始を伝えた。そこには「ハワイは合衆国の運命と切っても切り離せない関係にある」、「人類と正義の大義は明らかに合衆国側にあるようにみえる」、「この戦争は、古来の圧政の数々と、市民的・宗教的自由および正義の精神とのあいだで何世紀にもわたって繰り返されてきた戦いの歴史における、もう一つの章にすぎない」、「この紛争は来たる神の王国の前触れである」、「その日は近い」などの終末論的な見解がみられる⁷⁹。6月号はトップ記事に「共和国戦闘賛歌」——南北戦争のとき北軍を鼓舞した黙示録的内容の歌、「私の目は主の再臨の栄光をみた」という歌詞ではじまる——を掲げた⁸⁰。7月号は同じくトップ記事で、米西戦争を機に「アメリカの生命力の巨大な潮流が突如として太平洋を横切り東洋に押し寄せている」と伝えた。「キリスト教国アメリカ」の潮流が「キリスト教世界西端の前哨地」たるハワイを超えて「東洋の無気力

と暗黒とじかに接触する」なか、ハワイは「キリスト教世界の最前線で光り輝く道徳的・霊的灯台」としてあり続けることが大切である、とされた⁸¹。

そしてついに併合のときがやってきた。8月号は冒頭で、ハワイ併合決議が合衆国上院を通過したとの知らせが届き、「ホノルルが喜びに包まれた」と報じた。「長い闘いが成功裏に終わった」との表現もみられる⁸²。だがその直後の記事には、米西戦争は中国をめぐるヨーロッパ列強のあいだで熾烈な戦いが繰り広げられる「争いの時代の接近を告げる時代のしるし」であり、神は合衆国を「比較的小さな米西戦争」に導くことで、「来るべき大きな危機」に備えさせた、との見解もみられる⁸³。「神の王国」すなわち「千年王国」が間近に迫るなか、善と悪の最後の戦い、すなわちハルマゲドンが迫りつつあった。

以上、この章では1893年のハワイ王国転覆から1898年のハワイ併合までに『フレンド』紙上で扱われた日本人と併合に関する記事を参照しつつ、ハワイ福音派の終末論的世界観のなかでの日本人と併合の相関関係について考察してきた。1893年にハワイ福音派が「異教徒」のハワイアン君主の位を剥奪したあと、彼らの最大の関心は、もう一つの「異教徒」の集団、日本人となっていった。ハワイをアメリカに併合するための彼らの闘いは気づけば「反日」運動に変質していた。

だがこのような変質のなかで注目すべきことが一つある。少し前まで日本人に言及する際、頻繁に繰り返されていた「異教」または「偶像崇拜」という表現がすっかり影を潜めたという点である。その原因の一つとして考えられるのが、日清戦争での日本の勝利が、日本が西洋のキリスト教文明を受容した（中国はそれを拒んだ）結果であると評価された結果、日本の「異教国」としての側面を強調しづらくなったという可能性である。もう一つの原因としては、ハワイ併合を阻んでいた合衆国内の人種的偏見に対する対策としての側面が考えられる。金澤宏明によると、合衆国でハワイ併合を積極的に推進した上院議員モーガンは、ハワイアンはアメリカ人によって十分キリスト教化・文明化されたと主張することで、アメリカ国内に根強く残るハワイアンに対する人種的偏見にもとづく反併合論を克服しようとしたと指摘する⁸⁴が、それと同じ理由でハワイの日本人のあいだに残る「異教」もまた強調されなくなっていたのかもしれない。さらに言えば、「西洋のキリスト教文明」と「東洋の異教文明」の戦いという終末論的な文脈において、この戦いは前者の勝利のうちに終わらなければならなかった。したがって19世紀末にこの戦争がいよいよクライマックスに達するかにみえたとき、後者の根強さへの言及は避けなければならなかったとしても不思議ではない。

おわりに

1885年に官約移民の第一団がハワイ王国に到着したとき、ハワイ福音派はハワイアンのあい

だでの「異教」の復活と戦っていた。彼らにとってハワイは、神が福音の力を世界に知らしめるために選んだ戦略的拠点の一つであった。「ハワイ王国」は1830年代末のリバイバルを期に、急速なキリスト教化・文明化を経験しており、近い将来、「神の王国」がそこからはじまるはずであった。だが、彼らにはその前に戦わなければならない「異教」との最後の戦いがあった。ハワイ福音派の世界観のなかでハワイはこの戦いの最前線に位置していた。そこでは西洋のキリスト教文明と東洋の異教文明が真正面から衝突しており、いずれは前者が勝利するはずであった。

ハワイ福音派は、ハワイアンをあいだでの「異教」の復活を、終末論的な世界規模の最終戦争という文脈において理解していた。そんな彼らにとって、1885年以降ハワイ王国に到着しはじめた日本人移民は、彼らからキリストの教えを学ぶために送られてきた、もう一つの「異教」集団であった。当時の西洋社会では「文明」と「キリスト教」が、または「野蛮」と「異教」が同一視されていたが、そのなかにあって、日本人は「文明化された異教徒」というアノマリーとして彼らの前に立ち現れた。彼らの日本人理解においてはハワイアンとの類推が頻繁に持ち出された。日本人はハワイアンと同様に福音を受容しやすい反面、ハワイアンと同様に長年の「異教」の習慣が染み付いているため、長期間にわたる「教育」が必要である、と彼らは考えた。

1885年の官約移民第一団の到着から1893年のハワイ王国転覆に至るまでの8年間において、ハワイ福音派の日本人観は楽観的な調子を保っていた。ホノルルのエンマ王妃館を中心としたハワイの日本人移民のあいだでのキリスト教の普及や、大日本帝国憲法の発布、同志社大学でのリバイバルなどは、日本人の「進歩」を象徴するものとして歓迎された。また「異教徒」の日本人がキリスト教社会のなかでいくつかの集団に分かれて存在しているハワイは、彼らに絶好の福音化の機会を提供しているようにみえた。

ところが1893年1月に起きたハワイ王国転覆の直後に、ハワイ福音派のあいだで日本人陰謀説が突如浮上する。このクーデターはハワイ福音派がハワイの「異教」の過去に終止符を打つために実行したものであった。彼らの終末のシナリオにおける次の段階は、ハワイのアメリカ合衆国への併合であった。『フレンド』をはじめとするハワイの新聞は、日本政府がハワイに知的で戦闘能力のある移民を大量に送り込み、リリウオカラニ元女王と結託して後者の復位を狙っている、合衆国がハワイを取らないなら日本が取るだろう、などと書き立て、日本人陰謀説を煽ることで、ハワイの合衆国への併合を早めようとした。

日清戦争での日本の勝利は、日本が西洋のキリスト教文明を積極的に取り入れたのに対して中国はそれを拒んだ結果であると解釈されると同時に、日本はキリスト教文明を取り入れた分だけ余計に脅威と映った。このような状況下で展開されたハワイにおける「悪魔」の勢力との戦いでは日本人が主な標的となった。ハワイの新聞は国勢調査の結果を大々的に取り上げ、ハ

山本貴裕

ワイ全人口における日本人の比率の高さを強調した。日本におけるキリスト教の仕事の進捗状況の報告では、日本人は十分にキリスト教化されていない、日本人は道徳的義務についての感覚を欠いている、日本人のあいだで広まっているキリスト教は日清戦争の勝利がもたらした愛国心の高揚によって我流に捻じ曲げられている、などと批判された。こうした日本のキリスト教の批判において槍玉に挙げられたのが、以前は日本のキリスト教化にもっとも貢献しているとされた同志社の福音主義からの「退歩」であった。日本人のキリスト教化の不十分さを強調するこうした言説は、ハワイが日本化すべきではない理由を提供した。

ハワイ福音派による併合運動が最終局面を迎えるなか、気づいてみれば、日本人は「異教徒」のハワイ君主に代わる最大の標的となっていた。1893年の君主制転覆に向けた彼らの運動は、ハワイアンのあいだの「異教」の復活に楔を打つことをその大きな目標としていたが、1898年について実現することになる彼らの併合運動は、「異教」の基盤の上にキリスト教を取り込む一方で後者を国粹主義やリベラル神学によって歪曲する、日本の東洋文明との戦いとしての性格を帯びていった。

註

- 1 Ralph S. Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom, 1874-1893, The Kalakaua Dynasty* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1967), 165.
- 2 兒玉正昭『日本人移民ハワイ上陸拒絶事件——領事報告を中心に』不二出版, 2011年, 5頁。
- 3 山本貴裕「1887年「革命」前後のハワイ福音派による宗教・政治的運動」『中・四国アメリカ研究』8号, 2017年。
- 4 Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom, 1874-1893*, 153-172.
- 5 吉田亮「ハワイアン・ボードの初期日本人移民伝道」『キリスト教社会問題研究』30号, 1982年, 127-146頁。
- 6 Tom Coffman, *Nation Within: The History of the American Occupation of Hawai'i* (1993; repr., Kihei, HI: Koa Books, 2009), 183-204.
- 7 兒玉『日本人移民ハワイ上陸拒絶事件』。
- 8 William M. Morgan, "The Anti-Japanese Origins of the Hawaiian Annexation Treaty of 1897," *Diplomatic History* 6-1 (Winter, 1982): 23-44.
- 9 Noenoe K. Silva, *Aloha Betrayed: Native Hawaiian Resistance to American Colonialism* (Durham, NC: Duke University Press, 2004); ハワイアンの宗教性および政治性についての分析は以下に詳しい。Lilikalā Kame'eleihiwa, *Native Land and Foreign Desires: Pehea*

- Lā E Pono Ai? How Shall We Live in Harmony?* (Honolulu: Bishop Museum Press, 1992).
- 10 “Kingdom of God” は通常「神の国」と訳されるが、本稿では「ハワイの王国」、すなわち「ハワイ王国」との対比を意識して、それをあえて「神の王国」と訳すことにする。
 - 11 William R. Hutchison, *Errand to the World: American Protestant Thought and Foreign Missions* (Chicago: University of Chicago Press, 1987), 191-95.
 - 12 “Annual Sermon on Home Missions,” *Friend*, July 1889; 以下で参照する『フレンド』の記事は Hawaii Mission Houses 所蔵のデジタル・コレクションの一つ <https://hmha.missionhouses.org/collections/show/8> から取り出したものである。
 - 13 この言葉はもともと、アメリカ人の千年王国説的國家観をさして用いられたものである。Ernest Lee Tuveson, *Redeemer Nation: The Idea of America’s Millennial Role* (Chicago: University of Chicago Press, 1968).
 - 14 “A Period of Transition,” *Friend*, June 1891.
 - 15 「偶像崇拜抑制協会」は1889年9月9日に結成された。“Origin of the Association for Bible Reading and for the Suppression of Idolatry, as Told by the Rev. James Bicknell,” *Friend*, Oct. 1892; 「偶像崇拜抑制委員会」という名称は、同時代にアンソニー・コムストックが率いた「ニューヨーク害悪抑制協会 (New York Society for Suppression of Vice)」を彷彿とさせるが、実際に『フレンド』紙上には後者への言及もみられる。“Untitled”, *Friend*, Apr. 1891.
 - 16 ビクネルの両親はロンドン宣教会によってイングランドから派遣された宣教師であった。“Rev. James Bicknell: Obituary,” *Friend*, Oct. 1892.
 - 17 “Hawaiian Kahunas and Their Practices,” *Friend*, Sep. 1890; “Kahuna Wrathful,” *Friend*, June 1891; “A Plea for Hawaiians,” *Friend*, Aug. 1892.
 - 18 “The Lanai Horror,” *Friend*, July 1892; Untitled, *Friend*, Sep. 1892.
 - 19 Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom, 1874-1893*, 172.
 - 20 山本「1887年「革命」前後のハワイ福音派による宗教・政治的運動」, 55, 64頁。
 - 21 カイケンドールによれば、1886年から1894年にかけてのハワイ社会全般の「反日本人感情」は「中国人を主な標的とした反アジア人運動全般のなかにあっては比較的小さな声」であったという。Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom, 1874-1893*, 172.
 - 22 “Our Duty to the Japanese,” *Friend*, March 1885.
 - 23 “The Japanese,” *Friend*, March 1886.
 - 24 “The Japanese,” *Friend*, Oct. 1886.

- 25 “Among the Japanese on Hawaii and Maui,” *Friend*, Dec. 1887.
- 26 当時のハワイで日本人人口がもっとも集中していたのがハワイ島のヒロで、男子2,703人、女子708人であった。Thomas G. Thrum, *Hawaiian Almanac and Annual for 1893* (Honolulu: Black & Auld, Printers, 1892), 12, <http://hdl.handle.net/10524/662>.
- 27 “Report of the Japanese Department of Work in Queen Emma Hall,” *Friend*, May 1888; ハワイの日本人のキリスト教化が彼らの本国の同胞に影響を与えるという見解はその後も『フレンド』紙上で繰り返された。“Untitled,” *Friend*, Aug. 1890; こうした相乗効果は「反射の効果 (reflex effect)」と呼ばれた。“Report 1890-91,” *Friend*, June 1891.
- 28 “The Japanese Mission,” *Friend*, Dec. 1888; 1889年3月号のハワイアンボード欄に掲載された回状は、「私たちのあいだには非常に大きな異教集団 (pagan element) が存在する」としたうえで、先住民のハワイアンに加えて、2万人の中国人と、7千人の日本人と、11,000人のポルトガル人に言及している。“Untitled,” *Friend*, March 1889.
- 29 “The Real Extent of the Task of Foreign Missions,” *Friend*, Jan. 1889.
- 30 “Native Testimony to the Prevalence of Idolatry,” *Friend*, May 1889; “Idolatry Among Hawaiians,” *Friend*, Oct. 1889.
- 31 “The Japanese Church in Honolulu,” *Friend*, Feb. 1889; “How Heathenism Poisons Young Churches,” *Ibid*.
- 32 “The New Japanese Constitution,” *Friend*, June 1889.
- 33 ウィンシャードの経歴については以下を参照した。Otis Cary, *A History of Christianity in Japan: Protestant Missions* (New York: Fleming H. Revell Company, 1909), 223.
- 34 “A College Revival in Japan,” *Friend*, June 1889; 磯前によると、この時期の日本の大学では、進化論に影響を受けた欧米の知識人を通して、「キリスト教」を「文明」と同一視する見方から、その科学的根拠を疑う見方への変化が起こったという。磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』岩波書店、2003年、45-48頁。
- 35 “Rev. E. G. Porter’s Talk to the Japanese,” *Friend*, July 1889; “Some Facts Worth Knowing,” *Friend*, Oct. 1889; “Curses and Compliments,” *Friend*, Nov. 1889; “Visit of Rev. Daniel C. Green. D. D.,” *Friend*, Apr. 1890.
- 36 “Untitled,” *Friend*, March 1890; フィッシャーはその後、健康上の理由により、ハワイの日本人ミッションを辞している。“Untitled,” *Friend*, Sep. 1891; そのすぐあとメソジスト監督教会カリフォルニア会議は、ハワイ諸島での日本人伝道から撤退し、その仕事をハワイアンボードに移譲した。“Untitled,” *Friend*, Dec. 1891.
- 37 “Our Work Among the Japanese,” *Friend*, Dec. 1890.

- 38 “Report 1890-91,” *Friend*, June 1891.
- 39 “Hawaiian Kahunas and Their Practices,” *Friend*, Sep. 1890.
- 40 “Rev. James Bicknell: Obituary,” *Friend*, Oct. 1892.
- 41 “The Jubilee Year of ‘The Friend,’” *Friend*, Jan. 1893; “Dedication of Central Union Church Edifice,” Ibid.
- 42 “A Wonderful Week,” *Friend*, Feb. 1893; 同号の別の記事には「異教によって精神的・道徳的に墮落した君主制は早いところ埋葬し、視界から消し去るしかなかった」との見解もみられる。“Helpless Collapse of Royalty,” Ibid.
- 43 1893年5月号では「市民的自由と公明正大な政府における進歩のすべて」は「主の来たる勝利への道を開く」ものとして支持する一方で、「公事における腐敗」はそれを「妨害する」ものとして「憎む」との見解が示されている。またそこでは、「正義」が「悪」に、あるいは「光」が「闇」にはっきりと対峙する場合もあるとして、ハワイ王国転覆をもたらした「運動」を前者（「正義」および「光」）のうちに位置づけている。“Thy Kingdom Come,” *Friend*, May 1893.
- 44 “Probably Annexation,” *Friend*, Feb. 1893; 翌月号のトップ記事は、合衆国への併合によりハワイは「地球上でもっとも強力な帝国 [合衆国] の広く富める西海岸を守る海軍の大要塞」になると主張している。“Hawaii A Strategic Center,” *Friend*, March 1893; 同号には「キリストの要塞としてのハワイ」と題する記事もみられる。“Hawaii A Fortress for Christ,” Ibid.; これらの記事では本稿の1章で考察したビショップの説教（1889年7月号に掲載）の内容が敷衍されている。
- 45 “Hawaii A Strategic Center,” Ibid.
- 46 “Arrival of Commissioner Blount,” *Friend*, Apr. 1893; “Removal of the American Flag,” Ibid.; ブラウントはハワイでの聞き込み調査を進めるなかで、次第に女王の復位を擁護する立場を鮮明にしていった。Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom, 1874-1893*, 623-25.
- 47 “Bishop Willis on Missionaries,” *Friend*, Apr. 1893; 山本貴裕「主教と君主のためのウィリスの戦い——ハワイ王国転覆の宗教的文脈に関する一考察」『史学研究』301号、2018年、55-82頁。
- 48 “Annexation to Japan,” *Friend*, Apr. 1893.
- 49 “Alleged Royalty and Japanese Conspiracy,” Ibid.
- 50 1894年4月号は例外である。この号では、巡洋艦高千穂が到着し、浪速と交替したことが伝えられ、同艦の到着によりハワイ在住の22,000人の日本人のあいだで「政治的興奮」が広がっており、この「興奮」は日本政府がハワイ在住の日本人にも欧米諸国の市民と同じ

- ように参政権を認めるよう要求した結果であるとの見解がみられる。“Japanese Cruiser Takachiho,” *Friend*, Apr. 1894.
- 51 “Japan and China at War,” *Friend*, Oct. 1894; “Great Japanese Victory,” *Ibid*.
- 52 “Japan and China,” *Friend*, Nov. 1894; 内村のこの論説は “From a Japanese Standpoint,” *Pacific Commercial Advertiser*, Oct. 22, 1894 からの転載であり、もとはと言えば『国民之友』明治27年8月23日号に英文で掲載されたものである。内村はのちに日清戦争の現実と直面するなかで非戦論者に転じている。金文吉「内村鑑三の平和思想と朝鮮無教会の動向」『アジア・キリスト教・多元性』2号, 2002年。
- 53 “A Manifest Divine Protection,” *Friend*, Feb. 1895; “The Story of the Insurrection,” *Ibid*.
- 54 “The Trial of the Ex-Queen,” *Friend*, March 1895; “Sentence of the Ex-Queen,” *Ibid*.
- 55 “Victorious Japan,” *Ibid*.
- 56 “War for Purity,” *Friend*, Feb. 1896.
- 57 “Liquor License Reform”, *Friend*, March 1896; “A Plan for Restricting the Liquor Traffic,” *Ibid*.
- 58 “Cheap Wine Proposed,” *Friend*, June 1896.
- 59 “Wine Bill,” *Friend*, July 1896; ホノルル酒造製氷会社の二瓶は、「当時の月給が26日間、1日10時間半の労働で15ドル内外であったことからして如何に高税であったかが判る」と指摘する。二瓶孝夫「日本酒（その1）」『日本醸造協会雑誌』73巻5号, 1978年, 348頁。
- 60 “Wine Bill,” *Friend*, July 1896; 二瓶も「酒法案」を「ワイン法案」と比較したうえで、前者は「排日移民政策の一環としての差別、圧迫」であったとしている。二瓶「日本酒（その1）」；コフマンも、日本酒醸造協会が日本酒に課された高関税の撤廃を求めてハワイ共和国に請願を送ったが、同国の執行評議会は対応を先延ばしすることで、日本への挑発を続けたと述べている。Coffman, *Nation Within*, 258.
- 61 “Reformatory Acts,” *Friend*, July 1896.
- 62 “Japanese Immigrants Formidable,” *Friend*, Dec. 1896.
- 63 “Facts from the Census,” *Friend*, Jan. 1897; “Census of Honolulu City,” *Friend*, Feb. 1897; “New Census—Nationalities in Hawaii,” *Friend*, March 1897.
- 64 “Japanese Interest in Hawaii,” *Ibid*.
- 65 Morgan, “The Anti-Japanese Origins,” 27-28.
- 66 “Japanese Immigrants Excluded For Fraud,” *Friend*, Apr. 1897; この事件の詳細については、兒玉『日本人移民ハワイ上陸拒絶事件』に詳しい。
- 67 “Origin of the Japanese,” *Friend*, June 1897; “Banquet to Japanese Newspaper Men,” *Ibid*;

- “Hawaii Refuses Japan’s Demands,” *Ibid.*; “Shall Hawaii be Japanese or American,” *Ibid.*
- 68 以下はその例の一部である。“A Deadly Blow at ‘Higher Criticism,’” *Friend*, Nov. 1896; “Character of Jesus Unique,” *Friend*, Jan. 1897; “The Atoning Christ,” *Ibid.*; 磯前もこの時期のキリスト教と科学の対立について取り上げている。磯前『近代日本の宗教言説とその系譜』, 45-47頁。
- 69 同年10月号には「太平洋におけるハワイの運命」は、合衆国に代表される「西半球の西洋文明」と日本に代表される「東洋の執拗な劣等文明」のどちらが支配するかによって決せられるとする記事がみられる。“Hawaiian Destiny in the Pacific,” *Friend*, Oct. 1897; ハワイ併合論者であったアメリカ海軍の軍人マハンも、1893年1月31日付『ニューヨーク・タイムズ』紙に掲載された編集者宛の書簡のなかで、ハワイ諸島が「将来、ヨーロッパ文明の前哨地になるのか、それとも比較的野蛮な中国文明のそれになるのか、という問題は合衆国だけでなく文明世界全体が関心を持っている」と述べている。A. T. Mahan, “Hawaii and Our Future Sea Power” in A. T. Mahan, *The Interest of America in Sea Power, Present and Future* (Boston: Little, Brown, and Company, 1917), 31.
- 70 “Liliuokalani Protests Against Annexation,” *Friend*, Aug. 1897; “Japanese Protests Against Annexation,” *Ibid.*
- 71 “Reported Japanese Schemes Against Hawaii,” *Friend*, Sep. 1897; “Powerful Enemy of Japanese Beetle,” *Ibid.*; 日本の「甲虫」との戦いについてはその前年にも同様の記事がみられる。“Prof. Koebele Wars on the Japanese Beetle,” *Friend*, June 1896.
- 72 “Ex-Queen’s Attitude Toward Idolatry,” *Friend*, May 1897; “Royalism and Heathenism are Allies,” *Friend*, Sep. 1897.
- 73 “Untitled,” *Friend*, Nov. 1897.
- 74 “First Impressions of Christian Work in Japan,” *Friend*, Oct. 1897.
- 75 “How has Christianity been presented to Japan, and how far is it influencing Japanese life and character?” *Friend*, Nov. 1897.
- 76 “Present Condition of Mission Work in Japan,” *Ibid.*
- 77 ポール・F・ボラー（北垣宗治訳）『アメリカンボードと同志社 1875-1900』新教出版社、2007年（Paul Franklin Boeler, Jr. “The American Board and the Doshisha, 1875-1900” [Ph. D. diss., Yale University, 1947]), 5章-8章。
- 78 “Christian Work in Japan: Relapse and Recovery,” *Friend*, Dec. 1897; この書簡の直後には、同志社の熊本バンドに関するもう一つの記事がおかれた。“Erratic Japanese Preachers,” *Ibid.*

山本貴裕

79 “War!,” *Friend*, May 1898.

80 “Battle Hymn of the Republic,” *Friend*, June 1898.

81 “A Great Door Opening,” *Friend*, July 1898.

82 “Annexation at Last,” *Friend*, Aug. 1898.

83 “This War a Needed Preparation,” *Ibid*.

84 金澤によれば、モーガンは併合を実現するために、ハワイの日本人や中国人に関しては彼らの選挙権を奪う方策——英語かハワイ語の識字資格と財産資格——を推進したという。金澤宏明「ハワイ併合問題再検討——ジョン・T・モーガンの膨張論と人種統治政策を中心として——」『駿台史学』121号、2004年、51-62頁。

A Civilized Pagan Nation: An Evangelical View of the Japanese and Its Relationship to the Annexation of Hawai'i

YAMAMOTO Takahiro

In the late nineteenth century in the Kingdom of Hawai'i, there was a power struggle between King Kalākaua, who tried to revive traditional Hawai'ian culture, and the missionary party, which sought to preserve the evangelical heritage in Hawai'i that had been established by the successive waves of missionaries sent by the American Board of Commissioners for Foreign Missions. In the midst of the tug of war came the Japanese immigrants who began to arrive in Hawai'i in droves in 1885. The Japanese were received by the evangelical community in Hawai'i as a “heathen” or “pagan” people to be evangelized for the hastening of the coming of the Kingdom of Christ on earth. To them, they presented an anomaly, i.e. a “civilized pagan” nation. The present paper will examine the ways in which the evangelical community in Hawai'i viewed the Japanese in the period from 1885 to 1898 with their eschatological lens and by analogy with the other “heathen/pagan” peoples such as Hawai'ians and Chinese, and also the ways in which their view of the Japanese affected their discourse about and realization of the annexation of Hawai'i to the United States, which was to be realized in 1898. For this purpose, it mainly refers to articles published in *The Friend*, an evangelical organ in Hawai'i, with those published in secular newspapers in Hawai'i referred to where relevant.

可傷的で攪乱的 ——ニーナ・ルヴォワルの『ウイングシューターズ』 にみる「枠組み」批判

渡 邊 真理香

はじめに

ニーナ・ルヴォワル (Nina Revoyr, 1969-) の『ウイングシューターズ』 (*Wingshooters*, 2011) は作者の幼少期の経験に基づいた小説である。舞台となっているウィスコンシン州の田舎町ディアホーンは、人口のほとんどを白人が占める町と設定されており、白人と日本人の間に生まれた主人公ミシェル (Michelle) はそこで人種差別に苛まれる日々を送る。本作品については、拙論「歴史の語りべたることを主張する——Nina Revoyr作品における同性愛の必然性」において、人種マイノリティの経験を物語る文学ジャンルの排他性を問題視するものであると述べた。具体的には、ルヴォワルの『ロストキャニオン』 (*Lost Canyon*, 2015) と『ウイングシューターズ』の両作品において物語の終盤で明らかになる主人公の非規範的セクシュアリティに注目し、伝統的に人種マイノリティをめぐる物語からセクシュアルマイノリティが疎外されてきたことへの戦略的批判であることを指摘した。本稿はそこでの議論を『ウイングシューターズ』に焦点を当てて展開するものである。

『ウイングシューターズ』の語り手は大人になったミシェルである。彼女は幼少期に体験した人種差別の悲劇を振り返った後、セクシュアルマイノリティである自身についてわずかに言及する。そこで読者は、ミシェルが人種とセクシュアリティの両方においてマイノリティであること、つまり複層的なマイノリティであることに気づく。アメリカ社会において有色人種且つセクシュアルマイノリティであるということは、周縁のさらに周縁に追いやられ声を奪われた存在であることを意味する。白人及び異性愛中心主義社会の中で彼らは、抑圧に晒され続ける傷つきやすいアイデンティティを抱えて生きなければならない。

『ウイングシューターズ』は、白人／有色人種、そして異性愛／非異性愛の支配構造に揺さぶりをかける物語である。この作品は単に人種マイノリティの苦悩を描くのではなく、差別の構造が抑圧する者すら苦しめる側面を示すことで、人種差別の虚しさを語る。また、ミシエルのセクシュアリティにあえて触れることで、複層的マイノリティの可視化に挑戦している。セクシュアルマイノリティが人種マイノリティを描いた文学作品で排除されがちであったことへ我々の意識を向けることで、人種マイノリティ文学というジャンルが内包する排他的異性愛規

範を攪乱する。

本稿ではまず、作者ルヴォワル自身と彼女の作品に付されるマルチラベルに注目し、複層的マイノリティであることを武器にした戦略的創作について確認する。次に、アメリカ社会の白人中心主義を象徴するディアホーンの町で混血児ミシエルの周縁性がどのように描かれているのかを読み、有色人種を排除しようとするディアホーンに蔓延する差別意識—観念的「枠組み」—がミシエルの可傷性を示すだけでなく、マジョリティ側である白人をも傷つけるものであることを分析する。さらに、本作品が「自伝」という形式を装う意味について探ることで、人種マイノリティ文学というジャンル—文学的「枠組み」—の排他性を具体的に提示したい。

1. マルチラベル作家ニーナ・ルヴォワル

ニーナ・ルヴォワルはポーランド系アメリカ人と日本人の間に日本で生まれた。幼少期にアメリカに渡った彼女は、人種差別問題をめぐる物語を書く小説家として活躍している。¹ 1997年に『ネセサリー・ハンガー』でデビュー以来、『ある日系人の肖像』² (2003)、『銀幕に夢をみた』³ (2008)、『ウイングシューターズ』、『ロストキャニオン』、『スチューデント・オブ・ヒストリー』(2019)といった長編作品と、アンソロジー『コカイン・クロニクル』(2011)に収録された短編「ゴールデン・パシフィック」を上梓してきた。

この作家の作品を一言で形容するのは難しい。というのは、それらは複数の文学ジャンルで評価されることが多いからだ。ルヴォワルの代表作とされている『ある日系人の肖像』を例に挙げると、レズビアン日系人がアフリカ系男性の力を借りて、死んだ祖父の遺産相続人をめぐる謎を追うこの物語は、推理小説を対象とするエドガー賞（ペーパーバックオリジナル部門）にノミネートされ、またセクシュアルマイノリティを描いた作品に贈られるラムダ賞（レズビアン・フィクション部門）を受賞した。このことから、『ある日系人の肖像』が「ミステリー小説」でありながら「クイア小説」でもあることが分かる。また、バックパッカーたちがシエラネヴァダ山中で白人至上主義者に遭遇する『ロストキャニオン』を、ステフ・チャ（Steph Cha）は「社会派小説（social novel）」と呼ぶが、その一方、レスリー・パリー（Leslie Parry）は「山についての小説（mountain book）」、「LA小説（LA novel）」、「ネイチャー・ノワール小説（nature noir）」と複数に表現する。このように、ジャンルを横断するルヴォワル作品は決して単一のラベルを付与されることがない。読者や批評家によるだけでなく、時として同じ人物が異なる複数のラベルで言い表すこともあるのだ。

ルヴォワルの作品に与えられるマルチラベルは、彼女の複層的なアイデンティティを反映したものだと考えられる。アジアにルーツを持つ人種マイノリティであり、レズビアンという点でセクシュアルマイノリティでもあるルヴォワルは、アメリカ社会において周縁化される負の

アイデンティティを複数抱えた存在である。彼女はそのような自身のアイデンティティやそれに伴う経験を創作に多く反映させてきた。彼女の作品の分類しづらさやマルチにラベル付けされる作家性について、ルヴォワルは次のようにインタビューで答えている。

CK: While many recognize that your fiction is hard to classify, some talk about your work in terms of LGBT fiction and some label you a regional writer. What do you think about these labels?

NR: Oh, I don't mind as long as I'm multi-labeled. I've been called a Los Angeles writer, a mid-western writer, LGBT writer, historical, noir. My critics have put me in a lot of boxes, and those boxes become shorthand and, just like the assumptions we talked about earlier, they can be used as a way to dismiss. I am fortunate because I have become a part of so many boxes. So I don't mind about the label. (Kellerby, 下線筆者)

ルヴォワルは“I don't mind as long as I'm multi-labeled”と述べ、単一のラベルでない限りはいかなるラベルも受け容れるという態度を取ってきた。ここで注目すべきは、ルヴォワルは彼女の複層的で交差的な創作、ひいては彼女自身のアイデンティティを、ラベル付けの難しさやラベル付け自体への拒絶を示すものとしてではなく、肯定的に見ている点である。複層的のマイノリティであるルヴォワルによるマルチラベルの肯定は、文学的「枠組み」への挑戦なのだ。ひとつのジャンルで捉え切れない、言い換えれば、単一のラベルでルヴォワルの作品を捉えることができないということは、それぞれのラベルが何らかの排他性を伴っているということに他ならない。このように、既存の枠組みに揺さぶりをかけ、その排他性を焙り出すルヴォワルの態度は、先述の通り、彼女が白人と日本人との混血であり、レズビアンであるということが根底にあると考えることができる。白人コミュニティでも、アジア系コミュニティでも、セクシュアルマイノリティのコミュニティでも周縁化されてきたそのアイデンティティは、寄る辺を欠いていることで非常に可傷性の高い存在である一方、その特異なアイデンティティは枠組みを攪乱する因子にもなりうる。今回取り上げる『ウイングシューターズ』から読み取れるのは、まさにその可傷性と攪乱性であると言えよう。

2. 混血児ミシエルの人種的可傷性

『ウイングシューターズ』の主眼は混血児ミシエルをめぐる人種差別問題にある。彼女の混血という人種アイデンティティは、白人ばかりの田舎町ディアホーンにおいて可傷的な負のア

アイデンティティである。ミシェルは白人中心主義の町で排除の視線に晒され、さらには、他の人種マイノリティへの迫害を目撃することによって、人種差別の構造を深く学んでいく。

1965年に日本で生まれたミシェルは、8歳でウイソコンシンに渡る。日本では、両親と暮らしながらふたつの学校に通う生活を送っていた。ひとつは外国人児童用の学校、もうひとつは一般的な日本の小学校である。混血であることで、どちらの学校でも異質な存在として扱われるミシェルは、次のようにアメリカ移住に対して希望を見出す。

If both the Japanese and the Americans disliked me in Japan, I reasoned, then in America all sides would embrace me. America was where my one remaining parent was from; America was the land of the free. (21)⁴

しかしながら、実際に渡米すると、彼女はその人種アイデンティティを理由に露骨な差別を経験することになる。

ミシェルがディアホーンで暮らすきっかけとなったのは、母レイコ (Reiko) の出奔が原因であった。男とアメリカに渡ったレイコの後を追って、ミシェルと父ステュアート (Stewart) も日本を去る。レイコの行き先が分からないステュアートは、ひとまずウイソコンシン州ディアホーンの実家にミシェルを預けて、レイコを探す旅に出る。ディアホーンの祖父母の家での滞在は、当初は数週間の予定であった。しかし、ステュアートとレイコの仲が修復することはなく、ステュアートは手紙を寄こすばかりで実家に帰らないようになる。ミシェルの滞在は1年以上に及ぶこととなり、帰らない父をひたすら待ち続ける日々を過ごす。

白人が占有する町ディアホーンでは有色人種の存在は認められない。ミシェルがディアホーンにふさわしくない理由は、彼女に有色人種の血が流れていることに付随して、語り手が“Many of the older men in town had fought in World War II, and to them I wasn't just a foreigner; I was the Enemy” (22, 下線筆者) というように、それが第二次世界大戦時の敵性外国人の血だからである。さらに、アジアにルーツがあるという大きな括りで、ミシェルを通して朝鮮戦争やヴェトナム戦争を見る者もいる。

町の子どもたちは毎日ミシェルに暴言を浴びせ、暴力をふるう。その一方で大人たちは、あからさまにミシェルを迫害することができない。それは、ステュアートに代わってミシェルを愛情深く大事に育てる祖父チャーリー・ルポー (Charlie LeBeau) が町の男たちのリーダー的存在であるためだ。祖父チャーリーは偶然どの戦争でも従軍しなかったのだが、だからと言って日本人への差別意識がないわけではない。彼がミシェルの母レイコに歩み寄ろうとすることは決してなかった。

Let me make this very clear—my grandfather was a bigot. He wasn't shy about using racial epithets, or blaming blacks or Jews or Democrats for all the country's problems. But it enraged him that the town did not embrace me. (23)

この語り手によるチャーリーの説明からも分かる通り、チャーリーもまた有色人種を排除することを当然視する人々のひとりなのである。

それでもチャーリーが、日本へのルーツに触れないようにしてミシェルを育てる理由は、単純に彼女が血のつながった孫だからということに終始しない。ミシェルとチャーリーの関係は、孫と祖父というよりは、活発な少年とその父親のように見える。チャーリーはミシェルをマイク (Mike) やマイキー (Mikey) と男の子の名前で呼び、町の男たちが夢中になる活動—野球や狩猟—を経験させる。チャーリーは孫を通して、ディアホーンの男たちのようにたくましく育たなかったステュアートを育て直しているかのようである。つまり、彼はこの機会に便乗して、息子ステュアートとの関係では叶わなかった白人父子関係の構築を疑似的に試みているのだ。また、白人の子どもたちからミシェルに繰り返されるいじめを見過ごせないチャーリーは、ミシェルに喧嘩の仕方を教える。このことは一つの矛盾を生む。

These lessons made my life there easier, and the irony strikes me only now: it was my grandfather, the rural, prejudiced white man, the father who refused to embrace his son's wife, who taught me how to survive as a child of color in America. (24)

上記引用の通り、白人からの迫害に立ち向かう術を教えたのは、迫害する側の祖父だったのである。そして、その後の物語も混血の人物が白人社会と有色人種との架け橋になるという楽観的なものにはならない。ミシェルはディアホーンの生活の中で、白人社会の中で自分が人種マイノリティという被抑圧者であることを徐々に認知していく。特にその可傷性の高さを、自分とは別の人種マイノリティであるアフリカ系アメリカ人を通して学び、同時に彼らとの連帯感を強めていくのである。

ミシェルがディアホーンで暮らし始めてしばらく経つと、ある噂が流れ始める。それは、黒人夫婦がディアホーンに越してくるというものである。この黒人夫婦に対して、町全体が容赦なく差別的な態度をむき出しにする。ミシェルは彼らの迫害される様子や、彼らをめぐって町中が大騒ぎになる様子を観察することで、自らの人種的可傷性についてもより深く触れること

になる。主人公がアフリカ系への差別を通して構造的差別をはっきりと認識するという展開は、デビュー作『ネセサリー・ハンガー』や代表作『ある日系人の肖像』にも共通している。

間もなく噂の夫婦はディアホーンにやってくる。ジョー・ギャレット (Joe Garrett) はミシエルの通う小学校の産休代理教師として、ベティ (Betty) ・ギャレットは新しく開院した病院の看護師として働き始める。黒人が町の子どもたちを教え、黒人が町の人々の治療にあたると知ると、ディアホーンの男たちは耐えきれない思いを共有しようとチャーリーのもとに集う。祖父を囲んで黒人夫婦をめぐる議論を展開する男たちを眺めるミシエルは、“[...] I wondered what could possibly be so dangerous and threatening that it so upset the strongest men in town” (33) と不思議に思い始める。

彼らの強い拒否感は当然のものであった。“To my grandparents and their friends, black people lived elsewhere, in big-city slums or remote country settings, deep in the backwater South. [...] They were not meant to live among whites” (38) とあるように、この白人社会にとって黒人という存在はあまりにも日常から切り離されたものだったからだ。誰もギャレット夫妻を受け入れる心を持たず、彼らの存在が町全体をパニックに陥らせると、ミシエルへの人種差別は相対的に減少する。ミシエルは自分に注がれていた排除する視線がギャレット夫妻に向くことで安堵した気持ちを覚える (56)。

ある日ミシエルは、祖母ヘレン (Helen) に頼まれて食料品店まで使いに行くと、ギャレット夫妻に遭遇する。優しく話しかけられるミシエルは、驚きと緊張でほとんど自分からは言葉を発することはできなかったが、高揚した気持ちのまま帰路につく。

But something important had happened; I felt like part of something. For the next hour and a half, before my grandmother called up for supper, I sat there smiling, thinking about my chance meeting in the store, holding it, turning it over like a jewel. (96, 下線筆者)

上記引用にあるように、ミシエルにとっては彼らとの遭遇は危険でも脅威でもなく、「宝物」のように貴重な瞬間であった。ミシエルとギャレット夫妻の間には有色人種としての共通点があり、ミシエルは無意識のうちにこの繋がりを欲していたのだ。スティーヴン・ホン・ソン (Stephen Hong Sohn) は、食料品店で彼らのちょっとしたやり取りや、後に怪我をしたミシエルをベティが抱きかかえる描写が疑似家族的だと指摘する。ソンは、ギャレット夫妻はミシエルにとって「生物学的な家族の単位」(176) を超えた「理想的な家族の幻想」(176) であるとし、ミシエルがこの夫婦と「異人種間代理家族 (interracial surrogacies)」(169, 176) を形成

していると主張する。父と母から離れ、白人の祖父母に育てられているミシェルにとって、この若い夫婦は有色人種という可傷性を共有することができる初めての「家族」的共同体となる。

ギャレット夫妻への迫害を通して徐々に人種差別の構造の輪郭を掴み始めるミシェルは、次第にディアホーンの人々、特にチャーリーを取り巻く男たちの過剰な反応を冷静に非難する気持ちになる。

They didn't seem to realize that the danger was not *out there*, on the other side of the window. They didn't realize that the storm was right there in the room, contained in their own minds and hearts. (102, 強調本文)

ギャレット夫妻をめぐる議論を白熱させる男たちを見て、上記の引用の通り、ミシェルはこのパニックが外側、つまりギャレット夫妻の存在そのものにあるのではなく、ディアホーンの男たちに内在化された差別構造に根ざしているものであることに気づく。

チャーリーは、彼自身がギャレット夫妻に対して強い迫害の言動を示すことはないものの、ディアホーンの男たちの味方であり続ける。彼は幼い孫に町の仲間たちを代弁して “people don't like to mix with people different from them. They like to be with their own kind” (101) と説明する。有色人種の孫を育てながらも人種差別を容認するチャーリーに対し、ミシェルは “what exactly was my kind?” (101) と疑問を持ち、咎めるような感情を抱き始める。

But in the last few weeks their company had begun to feel less safe. What I had always seen as their strength and fortitude had crossed over into something different, unfamiliar. I couldn't go home, and I couldn't go out to the country; I could not figure out where to be. (150)

この引用の通り、チャーリーや彼の仲間たちが体現する白人中心主義のもとで安全を感じられなくなったミシェルは、自分の居場所を見失う。そして、アフリカとアジアというルーツの違いはあるものの、同じ人種マイノリティという可傷性を持つ者として、ギャレット夫妻とのつながりをより強く感じるようになる。

このように、日本にルーツを持つ混血児は、白人社会によるアフリカ系夫婦への強い差別を目の当たりにすることで、彼らの周縁性あるいは可傷性を客観的に理解するだけではなく、アフリカ系夫婦と自らの人種マイノリティという共通点に深い結びつきを感じるようになる。そしてそれは、白人の祖父母に保護されてはいるが負の人種アイデンティティを決して引き剥が

すことのできないミシエルの可傷性を読者に再認識させるのである。

3. 鳥撃ちの悲劇——マジョリティと「粹組み」

『ウィングシューターズ』で示されるのは、抑圧する白人種と抑圧される有色人種という単純な構図ではない。その間にある線引きや中心と周縁の絶対的な区別への固執が招く自壊への警告がこの物語には見られる。常に権力を持つ側でなければならないというマジョリティの強迫的意識は、人種差別という観念的「粹組み」の中で、マジョリティも自由を奪われた存在であることを意味する。つまり、人種差別の構造は、抑圧する側の可傷性すら内包しているということなのだ。

ディアホーンの白人中心主義者たちにとって問題なのは、チャーリーが“people don't like to mix with people different from them” (101) と述べたように、彼らの領域に異質な存在が混ざることである。自分たちの権威が脅かされぬよう、異質な存在を排除する観念的「粹組み」にしがみつくと不自由な人物がいる。それはチャーリーの友人のひとりアール・ワトソン (Earl Watson) である。彼は日常的に幼い息子ケヴィン (Kevin) を虐待している暴力的な人物だ。彼が町でガンショップを営んでいることから分かるように、アールは白人社会の暴力性を象徴する人物でもある。

ケヴィンが児童虐待の被害者であることを最初に発見したのは代理教師ジョー・ギャレットであった。チャーリーたちは仲間意識から、アールと児童虐待を簡単には結びつけることができない。だがある日何者かの通報によって、ケヴィンはアールのもとから離され、保護される。アールは通報者がギャレット夫妻であると思ひ込み、彼らへの憎しみを爆発させた結果、ベティ・ギャレットを誘拐する。

アールの行動は理不尽な復讐に他ならないが、次の引用にあるミシエルの気づきからも分かるように、そこには彼がこれまで体現してきた支配への固執がある。

[...] I realized that what so offended Earl was not that his son was off in the care of strangers. It was that something of his had been taken. Something had been removed from him against his will, a possession whose fate he believed he should control completely. (219)

このことに有色人種への強い拒絶意識が重なり、アールはギャレット夫妻が彼からケヴィンを奪ったという妄執に取り憑かれることになったのだ。

アールにとってギャレット夫妻は自分の領土を侵す脅威だったが、ベティを銃殺したことで、

彼自身が町の人々にとって新たな脅威へと変貌してしまう。ベティの殺害は、アールが不名誉な父親ではなく、典型的なディアホーンの男でいるため、つまりヘゲモニックな立場を挽回するために必要なことであった。ディアスタンドがそれを証明している。ディアスタンドとは、鹿を狩るために設けられた高床式の猟師小屋である。それは狩猟に興じる町の男たちにとって、自分の行動が邪魔されない「聖域」(210)であり、ベティを獲物とみなし自らの手で殺める場所は、狩人アールにとってそこでなければならなかったのだ。支配者たる自分を誇示するアールの銃は、次の展開でミシェルにも向けられることになる。

ミシェルは以前からアールが醸し出す異質な存在への強い拒絶を感じており、彼を苦手に思っていた。

“Listen,” Earl said, and his eyes were piercing. Although it had been over a year since he’d met me, I don’t think he’d ever really looked at me before. [...] I looked down and moved some peas around my plate. I wondered if he’d given a speech like this about me when I first came to town. (70, 下線筆者)

ミシェルは、ギャレット夫妻が町にやってきた当初、彼らと関わらないようにとアールに諭される。ギャレット夫妻に対するアールの嫌悪感に触れ、有色人種という共通点があることで、ミシェルは下線部のように彼の攻撃的な視線の的である自身を意識する。

アールは自分がケヴィンと離されてしまったことや、ベティを殺さざるを得なかったことの原因がギャレット夫妻にあると、ミシェルを前に訴える。その時“they”や“them”という代名詞によってギャレット夫妻を指すのだが、次第にアールは“you”という代名詞を用い、ミシェルを含めた有色人種全般を責めるようになる。

“It was them,” he insisted. “It was them. And even if they didn’t make the call today, it was them who got this started. They should have just never come here!” He spat something out in front of him, chew or gum or the flavor of bitterness. “You too, goddamnit. All of you. You should have just stayed where you belonged.” (219-220, 強調本文, 下線筆者)

この時すでに個人としてのアールは失われている。ここに浮き上がって見えるのは、支配する者と支配される者という抑圧の構造そのものである。

I was not a person to him, not a living thing, and I knew that he would kill me with as little concern as he'd shown for Brett and Mrs. Garrett. None of us were real to him. What *was* real to Earl? Was Earl even real to himself? (228, 強調本文, 下線筆者)

引用下線部のミシエルの疑問が示唆するように、アールは彼自身の中に構築された「枠組み」に捉われ、飲み込まれてしまっている。ここにいるのは頼れる町の男アールではなく、ディアホーンの町の排他性を行使する使命を担った記号に過ぎないのだ。

もう後戻りできなくなってしまったアールは、チャーリーによって始末される。アールの死によってディアホーンの町がミシエルやジョー・ギャレットが生きやすい場所に変化したわけではない。彼らはどちらも町を去らざるを得なくなる。チャーリーもまた、アールを死に追いやったことの重責に耐えかねたかのように、事件後すぐに病死する。この一連の悲劇は、白人優位の町で人種マイノリティがいかに可傷的な存在であるのかを物語っていると同時に、優位的な立場を誇示しようと足掻いて自ら破滅してしまうマジョリティ側の悲劇も物語っている。その点でアールもまた白人中心の抑圧構造の被害者であると言える。

本書のタイトル『ウィングシューターズ』はアールのような人々を言い表している。境界を越えて、否、境界のない空を飛ぶ鳥を撃ち落とそうとする鳥撃ちは、排他的な「枠組み」に固執する人々や社会を表象するものなのだ。

4. 複層的マイノリティの可傷性と攪乱性

ミシエルはただ可傷的な存在としてこの物語にいてのではない。アールの銃に狙われたミシエルは、境界を侵犯する鳥である。まず、彼女は白人との混血であることで、人種の境界を越えて白人社会に侵入する。そのことは、この物語の中に散りばめられている野球や狩猟への愛に示されている。それはどちらもディアホーンの男たちが興じるものである。つまり、ミシエルはただ白人性を帯びるというよりは、むしろ白人男性のヘゲモニックな領域に踏み込んでいる。特に銃がそのことを表している。ミシエルは8歳にしてすでに銃の撃ち方をチャーリーから教わり習得しているのだ。アメリカ社会の暴力的な側面を象徴する銃は、もちろん白人男性の象徴である。語り手は銃を使った狩猟について次のように述べる。

I knew already that there was something very manly in holding a gun, in tracking and killing other living creatures. [...] It was a heightened sense of excitement, the promise of possession and dominance, that I would have linked,

had I been older, with the sexual. (105)

ミシェルは銃で獲物を狩ることに男らしさを見出している。その男らしさとは、言い換えれば社会的覇権なのだが、語り手はそれを性的な意味にまで延長して捉える。ここから、ブッチ・レズビアン(男役の／男っぽいレズビアン)に成長するミシェルを推測することが可能だろう。主人公と語り手は相まって、セクシュアリティの側面でも「粹組み」を攪乱する。

ミシエルのセクシュアリティが攪乱するのはアジア系アメリカ文学等の人種マイノリティを語るジャンル、つまり文学的「粹組み」である。主人公は明らかに作者の生い立ちを反映した混血児であり、物語は大人になったミシエルの一人称の語りで進んでいく。これらのことから、『ウイングシューターズ』はまるでルヴォワルの自伝作品であるように読めるのだが、本作はあくまでもフィクションである。ただし、自伝的要素が強いという点で、ルヴォワル作品の中では一番「アジア系らしい」作品なのかもしれない。ここで「自伝的＝アジア系らしい」という見方について確認したい。

「自伝」というジャンルがアジア系文学の主流をなしてきた背景についても、ここで触れておく必要があるだろう。それには二つの理由が上げられる。一つは、トリン・ミンハが指摘するように、自伝は支配文化の中で周縁化された者が、声を上げ、「見える」存在となる戦略として極めて有効な手段となり得るからである。もう一つは、自伝はアジア系作家が出版の機会を得やすいジャンルだからである。その背後にはアジア系作家の作品を文学作品ではなく、社会学的、人類学的情報源と見なす白人読者市場があり、その好みに合わせて自伝の出版を優先する出版社の商業主義がある。第二次大戦後、大手出版社から出されたジェイド・スノウ・ウォン、モニカ・ソネ、ジーン・W・ヒューストン等の自伝は、知られざるアジア系のアメリカ体験を伝えるという書き手側の意向と、アジア系民族を「モデル・マイノリティ」の鏡として売り出したい出版社の意向が合致した例といえるが、出版に際し、かなり大幅に編集の手が加えられたと言われている。しかし、そうした制約、妥協にもかかわらず、これら自伝は、アジア系の存在を可視化させ、後続の作家により自由な自己表現の道を拓いた作品群である。(植木 xi-xii)

植木照代がまとめるように、アジア系アメリカ文学において自伝は重要なジャンルであってきただけでなく、つまりそれは、アジア系というアイデンティティを表現し、同時に多くの読者を惹きつけるための恰好の表現形式なのだ。⁵ ルヴォワルは、自伝、つまり、「アジア系らしい」作品と

して読者が『ウィングシューターズ』を読めるように罫を仕掛けている。主人公の人種アイデンティティ、日本からアメリカへの移住、ウィスコンシンでの暮らしやいじめのエピソードなど、作者が実際に体験した事柄が盛り込まれている。作者はミシェルという自身の分身を使って、この混血児がいかに可傷的な存在であるのかを存分に読ませ、読者の同情を惹きつける。そして、アジア系アメリカ人に対する人種差別を扱うというアジア系アメリカ文学作品の王道の仮面を被り、その文学的「枠組み」に疑問を投げかける展開へと読者をおびき寄せるのだ。

『ウィングシューターズ』は語り手が子供時代を振り返る物語構造になっているため、8歳のミシェルのセクシュアリティに焦点が当たるわけではない。ミシェルのセクシュアリティについて言及されるのは、現在についての語りの部分である。大人になったミシェルである語り手は、物語が終わりに差し迫っている段階で、“A few month ago I was driving in Central California with a woman who was trying to love me” (245, 下線筆者) とごく自然に同性の恋人の存在に触れることで、読者に驚きを与える。冒頭でも述べた通り、物語終盤におけるカミングアウトは、『ウィングシューターズ』の次に発表された『ロストキャニオン』でも仕掛けられている展開だが、『ウィングシューターズ』でのこの仕掛けは、自伝を装っている点で一層戦略的である。というのは、人種マイノリティ文学は伝統的にセクシュアルマイノリティを排除してきたからである。人種マイノリティ文学の代表的表現形式である自伝は言うまでもない。セクシュアルマイノリティであるミシェルの存在は、複層的マイノリティを可視化させ、人種マイノリティ文学という単一ラベルの文学的「枠組み」を批判する。

人種マイノリティ文学というジャンルにとっての異質な存在、つまりセクシュアルマイノリティを登場させるという戦略は、予断を持った読みを無効にする。予断を持つということは排他的な「枠組み」を持つこと、そして不自由であることだからだ。混血であることに加え、セクシュアルマイノリティでもあることで、ミシェルはより一層可傷性を帯びた存在になる。どこにも拠り所を見出せない存在ではあるが、逆説的に捉えると、彼女はいかなる「枠組み」にも縛られない自由な存在なのである。ルヴォワルは大人になったミシェルにレズビアンというセクシュアリティを付与することで、読者に近視眼的な読みを与えてきた文学的「枠組み」を批判しているようである。

おわりに

本稿は、ニーナ・ルヴォワルの『ウィングシューターズ』を複層的マイノリティの可傷性と攪乱性という観点から考察してきた。マルチラベル作家ルヴォワルは、どこにも属せないその複層的なアイデンティティに可傷性だけでなく攪乱性を見出す。ルヴォワルは本作で、構造的差別がマイノリティだけでなくマジョリティをも翻弄する様を描き、「枠組み」や境界に縛

可傷的で攪乱的——ニーナ・ルヴォワルの『ウイングシューターズ』にみる「枠組み」批判

られ続けることの危険性を指摘する。また、作者は自伝という物語の表現形式、つまりその「アジア系らしさ」でもって、アジアにルーツを持つ者の可傷性をアピールする。ただし、多くのアジア系アメリカ文学における自伝作品とは異なり、『ウイングシューターズ』で描かれているのは、個人がどう自身の人種アイデンティティに向き合うのか、あるいはどうアジア系という人種アイデンティティを構築するのかではない。作者は、主人公のセクシュアリティを物語の終盤で唐突に明らかにすることで、アジア系アメリカ文学を含む人種マイノリティ文学の異性愛規範にとらわれた「枠組み」を前景化する。言い換えれば、自伝を装いながら「アジア系」という単一のラベルを強調することで、セクシュアルマイノリティを排除してきたアジア系アメリカ文学の「枠組み」の問題を指摘しているのである。このように、単一のラベルでは捉えきれないルヴォワルの創作は、アジア系アメリカ文学ひいてはアメリカ文学全体をめぐる「枠組み」を再検討させるものであると言える。

註

本稿は、2020年11月28日に広島経済大学立町キャンパスで開催された中・四国アメリカ学会第48回年次大会のシンポジウム「超克されるアメリカ研究——境界に映るアメリカ像をたどつて」における口頭発表原稿（題目「可傷的で攪乱的——ニーナ・ルヴォワルの『ウイングシューターズ』にみる境界侵犯的戦略」）に加筆・修正を加えたものである。

- 1 Revoyrは兼業作家であり、執筆活動の他には、貧困児童への支援を行うNPOでの重役や、大学で創作を教える教員という立場にある。
- 2 本間有による*Southland*の邦題。
- 3 長澤あかねによる*The Age of Dreaming*の邦題。
- 4 『ウイングシューターズ』からの引用は括弧内にページ数のみ記す。
- 5 ミア・ナカジ・モニエ（Mia Nakaji Monnier）のインタビューに答えて、ルヴォワルは『ウイングシューターズ』の読者層は、前の3作品に比べると白人読者率が高かったと言う。

引用・参考文献

- Cha, Steph. "Q&A: L.A. based Nina Revoyr talks about writing socially conscious adventure novel 'Lost Canyon'." *Los Angeles Times*, 21 Aug. 2015, www.latimes.com/books/jacketcopy/la-ca-jc-nina-revoyr-20150823-story.html. Accessed 11 Sep. 2017.
- Kellerby, Carrie. "Nina Revoyr, Author." *Lunch Ticket*, lunchticket.org/nina-revoyr/. Accessed 25 Aug. 2017.
- Monnier, Mia Nakaji. "From Crenshaw to Deerhorn: An Interview with Nina Revoyr."

渡邊真理香

- Discover Nikkei*, 16 Feb. 2012, www.discovernikkei.org/en/journal/2012/2/16/from-crenshaw-to-deerhorn/. Accessed 11 Sep. 2017.
- Parry, Leslie. "Occasions for Wonder." *Los Angeles Review of Books*, 24 Aug. 2015, lareviewofbooks.org/article/nina-revoyr/. Accessed 11 Sep. 2017.
- Revoyr, Nina. *A Student of History*. Akashic Books, 2019
- . *The Age of Dreaming*. Akashic Books, 2008. (ニーナ・ルヴォワル『銀幕に夢をみた』長澤あかね訳, PHP研究所, 2011年)
- . "golden pacific." *The Cocaine Chronicles*, edited by Gary Philips & Jervey Tervalon, Akashic Books, 2011, pp.163-79.
- . *Lost Canyon*. Akashic Books, 2015.
- . *The Necessary Hunger*. Simon & Schuster, 1997.
- . *Southland*. Akashic Books, 2003. (ニーナ・ルヴォワル『ある日系人の肖像』本間有訳, 扶桑社, 2005年)
- . *Wingshooters*. Akashic Books, 2011.
- Sohn, Stephen Hong. *Inscrutable Belongings: Queer Asian North American Fiction*. Stanford UP, 2018.
- 植木照代「プロローグ」『アジア系アメリカ文学—記憶と創造—』大阪教育図書, 2001年, pp. v-xvi.
- 渡邊真理香「歴史の語りべたることを主張する——Nina Revoyr作品における同性愛の必然性」『関西アメリカ文学』56号, 2019年, pp.17-31.

Vulnerable as Well as Subversive:

The Criticism of Frameworks in Nina Revoyr's *Wingshooters*

WATANABE Marika

This study examined Nina Revoyr's novel *Wingshooters* from the perspectives of vulnerability and subversiveness to elucidate the author's critical attitude toward frameworks, which always tend to be exclusive and structurally discriminatory.

Revoyr is a biracial lesbian writer born to a Japanese mother and a Polish American father. Her mixed-race identity and homosexuality make her a multilayered minority: a

defenseless, powerless, vulnerable, yet subversive group. Her novels reflect this multilayered identity. Thus, the author herself and her works have been described using many different labels. Revoyr strategically accepts multi-labeling to criticize frameworks of homogeneity in both American society and Asian American literature.

Wingshooters depicts racial discrimination in Deerhorn, Wisconsin, where white people account for almost 100% of the population. The protagonist Michelle, an 8-year-old of mixed Japanese and European race, is racially marginalized in the town. She comes to understand the town's exclusive social structure through reproaches against not only her but also an African American couple in Deerhorn. Michelle feels a stronger connection with them than her white grandparents because she finds that as a racial minority, she shares a common vulnerability with the couple.

Wingshooters shows a simple picture of an oppressive white race and oppressed colored races. Furthermore, it shows those who adhere to racial lines between people and an absolute distinction between the center and the margin, as espoused by Earl, a friend of Michelle's grandfather. Holding a gun symbolizing the violent side of America, Earl desperately tries to protect his hegemonic position as a white male from the town's outsiders. His miserable end seems to warn against being caught in society's framework of injustice.

Michelle is not merely a vulnerable being. With her mixed-race identity, she crosses racial boundaries and invades Deerhorn's white society through her love of baseball and hunting, both also enjoyed by the town's men. Rather than simply confronting the white characters, Michelle subverts the realm of white male hegemony. In addition, her lesbian identity plays a subversive role in the story. Michelle's homosexuality is revealed at the very end of the story by the narrator, the grown-up protagonist, thereby criticizing readers for framing the story as a heterosexual story due to the heteronormativity of Asian American literature. The possibility that *Wingshooters* is autobiographical as a form of resistance to an exclusive literary framework is raised because autobiography has long been strongly represented in Asian American literature, a heteronormative literary genre.

Nina Revoyr published an autobiographical fictional work about a multilayered minority woman raised in a white-centered community; it criticizes American society for neglecting multilayered minorities in all its frameworks and in its literature while depicting the futility of adhering to this unjust framework. The vulnerable yet subversive identity

渡邊真理香

Revoyr represents in her works highlights the danger of remaining bound within the confines of such a framework.

『中・四国アメリカ研究』第11号
投稿規定

- 1 資格：中・四国アメリカ学会会員に限る。ただし、編集委員会が執筆を依頼する場合はこの限りではない。投稿できる論文は一人1編とする。
- 2 内容：アメリカ研究に関する未発表論文。すでに口頭で発表したものはその旨を明らかにすること。
- 3 言語：日本語または英語。日本語の場合は英文の要旨を付けること。
- 4 用紙：A4判の用紙を使用し、横書きとする。必ずワープロ原稿であること。
- 5 長さ：日本語原稿の場合は、1ページにつき1行42字×32行、15頁以内（400字詰原稿用紙に換算して約50枚。注、文献リスト、英文要旨を含む）。英語原稿については、1ページにつき1行80～90文字×32行、15頁以内とする。英語原稿はネイティブ・チェックを受けたものであること。
執筆分担金の割増し負担を条件として、規定の頁数を越えることができる。
- 6 体裁：注は後注とし、本文の終わりにまとめる。注のあとに引用・参考文献リストを付ける。注及び引用・参考文献の表記の仕方は各研究分野の論文執筆の慣行によるものとする。
- 7 提出：原稿は2部提出すること（コピー可）。匿名審査を行うので2部のうち1部は著者氏名、所属、口頭発表への言及、謝辞など、著者の身元を明らかにする事項を削除したものであること。
- 8 締切り：2022年10月31日必着（厳守のこと）
（なお、投稿希望者は2022年3月末までに、学会事務局宛に、ハガキ又はメールで申し込むこと）
- 9 その他：
 - 1) 論文の採否の決定は、編集委員会が選定する査読者の審査を経た後、編集委員会が行う。採否の結果は2022年12月末までに本人に通知する。
 - 2) 採用決定後に、電子媒体の提出を求める。
 - 3) 執筆者による校正は再校までとする。
 - 4) 執筆者は一律20,000円の執筆分担金を負担し、抜刷り20部を受取る。
規定の頁数を越える論文の執筆者には、更に割増し負担金を求める。
 - 5) 発行年月は2023年3月の予定。
 - 6) 特別講演講師に特別講演報告を依頼する。枚数は1ページにつき1行42字×32行、5頁から10頁程度とする。

編 集 後 記

- ◇『中・四国アメリカ研究』（第10号）をお届けします。
- ◇2020年執筆者募集の段階では8名の執筆希望者がありましたが、論文提出期限までに提出された論文は結局5編でした。これら5編の論文は、編集委員会が選定した査読者による審査を受け、いずれも掲載されることになりました。
- ◇本号の掲載論文の執筆者の所属等は次の通りです。
- 岡本 勝（広島大学名誉教授）
中野 博文（北九州市立大学）
本岡亜沙子（広島経済大学）
山本 貴裕（広島経済大学）
渡邊真理香（北九州市立大学）
- ◇『中・四国アメリカ研究』は隔年で刊行されます。次号については、2022年3月末日が執筆申込みの締切り、同年10月末日が論文提出期限、2023年3月に刊行予定となっています。ふるってご投稿ください。
- ◇お忙しい中を査読の労にあたっていただいた皆様には心からお礼申し上げます。
- ◇編集委員は次の通りです。
- 委員長 岩崎 佳孝（甲南女子大学）
委 員 伊藤 詔子（広島大学名誉教授）
委 員 小平 直行（県立広島大学）
委 員 辻 祥子（松山大学）
委 員 寺田 由美（北九州市立大学）
委 員 横山 良（神戸大学名誉教授）

（岩崎 佳孝）

中・四国アメリカ学会歴代会長

- | | |
|---------------|------------|
| (1) 吉田弘重 (故人) | 1973-1983年 |
| (2) 三崎敬之 (故人) | 1983-1985年 |
| (3) 武則忠見 (故人) | 1985年 |
| (4) 陣崎克博 (故人) | 1986-1989年 |
| (5) 畑博行 | 1989-1991年 |
| (6) 志邨晃佑 (故人) | 1991-1992年 |
| (7) 糸藤洋 (故人) | 1992-1994年 |
| (8) 横山良 | 1994-1996年 |
| (9) 稲田勝彦 | 1996-1998年 |
| (10) 山本雅 (故人) | 1998-2000年 |
| (11) 伊藤詔子 | 2000-2002年 |
| (12) 岡本勝 | 2002-2004年 |
| (13) 片木晴彦 | 2004-2006年 |
| (14) 上田みどり | 2006-2008年 |
| (15) 佐野真理子 | 2008-2010年 |
| (16) 松水征夫 | 2010-2012年 |
| (17) 小平直行 | 2012-2014年 |
| (18) 中野博文 | 2014-2017年 |
| (19) 藤江啓子 | 2017-2018年 |
| (20) 中野博文 | 2018-現在 |

中・四国アメリカ研究

第 10 号

2021年3月31日

発行者 中・四国アメリカ学会

代表 会長 中 野 博 文

事務局 〒731-0192 広島市安佐南区祇園 5-37-1
広島経済大学
山本貴裕研究室内

TEL (082) 871-1494

印刷所 株式会社ニシキプリント

〒733-0833 広島市西区商工センター 7-5-33
TEL (082) 277-6954

The Chu-Shikoku American Studies

Vol. 10

2021

CONTENTS

Articles:

- History on the Relation of the Tobacco Industry and
the American Medical Association OKAMOTO Masaru (1)
- American Historical Studies in a Populist Age: Sentimentalism, Anachronism,
and the Quest for the Historical Profession NAKANO Hirofumi (29)
- Ghostly Representations:
Little Women and Make-Believe Games MOTOOKA Asako (49)
- A Civilized Pagan Nation: An Evangelical View of the Japanese and
Its Relationship to the Annexation of Hawai'i YAMAMOTO Takahiro (65)
- Vulnerable as Well as Subversive: The Criticism of Frameworks in
Nina Revoyr's *Wingshooters* WATANABE Marika (95)
- Notes for Contributors (111)
- Editors' Remark (112)
- Past Presidents (113)

The Chu-Shikoku American Studies Society